
赤井神社にようこそ

米竹乃鮭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤井神社にようこそ

【Nコード】

N50450

【作者名】

米竹乃鮭

【あらすじ】

赤井神社の少年には、これといった自慢できるとりえは無い。さらには前世の恨みがどうとらこうとらで幽霊にもとり憑かれ、陰気な顔をして貴重な青春を浪費している。今の状態が良いとは思われない。けどどうすることもできないそんなある日、少年は鬼を名乗る女と出会う。いささか強引な鬼に導かれ、少年は明るく社交的な人間になれるのか？

赤井少年の秘密

序章

俺の名前は赤井草治。極端に根暗な性格だ。

いつもどんよりとした顔つきは人々をさぞ不快にしているのだろう。何にもやる気にならない。友達もいないし勉強も運動も恋も全部どうだっていい。正直な話、早く死にたいなあといつも思っている。とはいえ、自殺は良くないという倫理観は今のところ傷一つなく頑丈に俺の中にある。それに、まだ死ぬわけにはいかない。

誇ることの無い俺だが、実は少しだけ人とは違うことがある。

俺には靈感がわずかにあるのだ。

更に言うと、俺にはときどきしか視ることは出来ないが、靈感の強い母が言うには俺は一風変わった女の子にとり憑かれてもいるようだ。なんでも前世の恨みがどうのこうとら。

いずれにしろ、当面の目標としては俺に憑いた幽霊を除霊することだ。

今までも、いろんな除霊を試みた。

母曰く、「幽霊は荒んだ環境を好むけど、そうでない場所は嫌いな。ほら、心霊スポットと言えば廃墟とか荒れたところばかりでしょ。つまり埃一つ無い家にいればは、自ずと幽霊は離れていくわ」そう言われて毎日掃除と洗濯をこなし、更には何故か料理までするように言いくるめられた。

当時の俺がこの行為は除霊ではなく単に母に利用されているのだと気がつくのはずいぶんと先のことだ。

しかしながら成長するにつれて母に利用されているのだとようやく気がついた時にはもう俺は手遅れだったのかもしれない。何となく高名な除霊師を呼ばうと頭の中で思った途端、凄まじい頭痛と吐き気が俺を襲い、学校の教室で汚物を吐いてしまった。この生涯消

えることのないだろう思い出が刻まれた後、そういうことは考えないようにしている。

ああ、いかにすれば俺は自由になれるのだろうか。

赤井神社の少年

第一話 赤井神社の少年の日常

幼いころから度々同じ夢を観ることがある。

また、この夢だと彼は苦笑する。その夢の中で彼は血のように赤い桜の下に腰を下ろしていた。

彼の視線の先には、散りゆく桜に紛れるように赤い着物の幼い少女が舞いを踊っている。

少女は頭から深紅の薄絹を被っておりその顔付きはよく見えない。それでも、身体を踊らすことで時々見え隠れする口元は本当に楽しそうな笑みを浮かべている。少女が手を広げて何かを言った。

「昨日は大変でしたね。ずっと見ていましたから私は知っていますよ。今日も、今日とて大変な一日になるはずですよ。でも私は貴方のことを見守っていますよ。だって私は貴方のことがものすごく大っ大嫌いだからですよ！だから貴方の不幸な姿をたくさん私に見せて下さいね」

そんな弾んだ可愛らしい声が聞えた。

彼はそれを見てるだけ。そして彼の視界が霞む。彼の瞳に直接墨汁をたらされたかのように少女も桜も溶けるように消えて、彼の目の前は真っ暗になった。唐突に体が真上に浮上していく感覚で意識が強引に引つ張られ、彼は夢から覚める。

はつきりとしらない頭で周囲を見渡すと、教師がディスプレイの前で講義している。

今日の講義の内容は比較的楽な分野だったので少しだけと油断して机に伏せたのが間違いだったと彼は小さく舌打ちした。

（あーあ、またあの夢か。アレ観た後って大体いいことないんだ

よなあ)

嫌な気分を紛らわせるために窓の外に視線を向ける。そのまま退屈な授業を無視して呑気に夏めいた景色を眺めることにした。

灰色の雲が空を満たし、出し惜しみするように雨を落していた。教室の窓から少年は空を見上げた。窓からは雨が緑色の葉を揺らすのを見ることが出来る。少年は魅いつたかのように窓の外を見ていた。

少年の名前は赤井草治。顔立ちは整っているが身長は平均以下。流れるような漆黒の黒髪を胸のあたりまで伸ばしている姿は女子のようでもある。実際のところ男子用の黒い学生服を着ていなかったならば、一目で彼が男かどうか見抜くことは難しいかもしれない。

草治は何かと有名な存在である。今も授業の中、数人の生徒達が声を抑えて彼の噂をしているのが聞えてきた。

「ほら、あそこで赤井君が窓を見てるよ」

「ホントだ。やっぱ赤井の周りって何か淀んでるよな」

「窓の外に幽霊でも居るんじゃない？」

「今日も大凶だよ。凄いな」

「おい、もっと音量を下げる。赤井に聞えたら呪われるぞ」

(聞えてるぞ)

不快な小声に草治は喉を増す。草治はクラスメートの話が聞えていないかのように振る舞い、窓を見る。窓に広がる緑色の景色ではなく、窓に写る己の姿をただ眺める。

ガラスの中にいる己の姿を見て草治は呆れていた。

不気味なほど黒い前髪の中から覗く、濁った目付き。その瞳を見て昨日スーパで売っていた魚の眼を思い出した。トレーの中で拘束され、墨汁を垂らしたかのような暗い眼。幼馴染には、「草治の眼を見ていると草治の後に死神がいるような錯覚すら覚えるんだけど」と引かれたこともある。その瞳も原因の一つとなり、昔から草治は悪霊憑きだの和不愉快なことを言われてきた。

高校に入ってから気味の悪い目を隠すために髪を伸ばしてみた

草治だったが、事態は好転することはなかった。むしろ、髪を長くした所為で以前よりも更に日本的な幽霊的雰囲気が溢れていた。

外の景色に浸るほうがまだマシだと思った。

ふと、窓に映る己の姿が紅くぼやけた。草治はため息を吐きたくなつた。ガラスに薄い朱色の水をぶちまければこんな感じなのかもしれないという印象を持ちながら、窓の外に浮かぶ赤い影を睨む。草治の視線の先で、御巫女が着る衣のような着物の少女が浮いていた。小さな身体をみると10歳にも満ちていないかもしれない。頭から胸のあたりまで伸びる深紅の薄衣を乗せているため少女の顔が見えることはない。

いつも夢の中で会う少女。

幽霊の如く静止する女の表情は見えなかったが、何かを伝えたいためか右手を突き出して写真を撮るかのように草治に向かってV字を作っている。

（何がしたいんだあの馬鹿）

両の目に力を入れてから強く心の中で毒づいた。

幸か不幸か、教室の外で薄笑いを浮かべる少女に草治以外は気が付かない。少女はスーッと、足も動かさず草治のところに移動する。

窓をすり抜け、草治に顔を近づけた。薄絹の向こうでニンマリと笑うのが視えた。

「ねえ、ねえ、いいこと教えてあげますね」

少女が無邪気に笑った。少女の声も草治以外は特に気にした様子を見せない。

教室では教師がディスプレイの横で喋っている。生徒達は人それぞれで、集中して耳を傾けていたり、寝ていたり、喋っていたり。草治は真横で浮かんでいる少女に視線だけ向ける。

「ほら、草治つてばお財布どこかで落しましたよねー？」

薄絹の上から口元に手を当てて、不注意ですねえと呟く。草治は

白けた様子で少女を眺める。

（どうせ、お前が手引きしたんだろ）

「言っておくけど、私が盗んだわけじゃないですよ。私には盗みをする趣味はないのです。それに、そんなに直接的に行動するのは怨霊としてルール違反ですから」

少女は草治の疑うような視線に気分を害したのか少し怒った口調で言った。それから右手で草治の頭をペシペシと叩いてきた。

「そう落ち込むことはないですよ」

少女は愉快に微笑み、草治を覗き込む。

「実は、一寸前に食堂に落ちてるのを見つけました」

右手をピシりと伸ばし、薄絹の上でおそらく額であるところまで敬礼のポーズを作った。

草治は胡乱気に見つめる。

「感謝の言葉とかはないのですかあ」

少女が尖った口調で不平を漏らした。草治は頭を抱えなくなった。

憂鬱な気分窓を眺めているといつしか授業の終わりを告げるチャイムが教室に響いた。赤い少女から目を逸らしてからチャイムの音を聞くや否や、草治は即座に立ち上がる。

（急がなくては）

数人が驚いたように草治を見上げてきたが、彼は気にすることなく鞆に教科書を詰め込み教室を出て行った。

（食堂に急がなくては）

廊下で生徒にすれ違う度に恐怖の表情が浮かぶのを無視してズラズラと進む。

「見て、赤井草治よ。どこに行くのかしら？何？何か様子が変わらない？」

「きつと何か幽霊の気配を感じたのよ」

「そつえば赤井さんの家って神社なんでしょう？確か赤井神社とかいうボロ神社。きつとお祓いとか失敗したから憔悴してるんじゃない？」

ない？」

「ああ、きつといろんなものが憑いてるんだろっね」

「見た？赤井君のあの目付き。ホントに何か濁っているっていうか、背中に悪霊とか死神とかついてても頷けるよね？」

（憔悴しているのか？何か憑いているってのは当たりだが）

生徒達は草治に触れると呪われると言わんばかりに彼から避けるように道を空けて行く。傍から見れば草治はヤクザのように堂々と歩いていく。ヤクザといっても小柄で、そこから怯える女子生徒達とそれほど格好は大差はないのだが。その暗い瞳と雰囲気だけで周囲を怯えさせる。

授業が終わったばかりのこともあってか、食堂のあたりには生徒はいなくなっていた。草治にとっても皆にギャーギャー騒がれるのは好きではないので好ましい。

ところが、食堂の扉の前で草治は中から話声が聞えてくるのに気がついた。妙に高い声で騒いでいるので女子であることが分かる。

「こんなところまで連れてきて何か用？」

「あんたさあ、調子にのりすぎ」

「そうよ、さつきだつて偉そうにしてさあ。マジウザい」

いささか刺々しい女子の会話に草治は立ち止まった。簡単に入れる雰囲気ではない。とはいえ食堂に財布があるかもしれないわけで。あの財布には今月の赤井家の食費がたんまり入っているのだ。

（どうして俺はこうもついてないんだ？）

ひとまず食堂の中を覗いてみようと思つた草治はゆっくりと扉を開いていく。

「アンタ達が馬鹿だからしょうがないじゃない。っていうかさあ、わざわざ教えてあげた私に対してこの態度は酷くない？」

そつと扉の向こうを覗くと金髪の少女が挑発するような声を上げていた。

「何が教えてあげたよ。私が英語の訳を言ったとたん爆笑しやがっ

て」

「いや、だってさあ、あれは無いわよ。よくその頭で高校入れたわね」

食堂の左隅で3人の少女が金髪の少女を取り囲むように立っていた。少女達は尋問のような雰囲気で中心の金髪少女に向かっている。傍から見ると典型的な苛めの構図であるが、苛めを受けているはずの位置で、金髪少女は悠然とした態度でむしろ馬鹿にするような笑みを他の少女達に向けていた。

半ば啞然としながらも、草治は本来の目的である財布を探すため、食堂を見渡す。そして喜ばしいことに財布は簡単に見つかった。食堂の左隅の机にぼつんと置いて少女達がたむろっている丁度後である。

財布を取りに行くためには少女達に近付かなくてはいけない。草治はため息まじりに眼の前の扉を音を立てないように開けることにした。

「だいたいアンタってさあ、遺伝子教育受けてるんでしょう？それなら私達よりも頭が良くて当たり前じゃない」

「いえいえ、そんなことはないわ。確かに遺伝子も生物の才能を決める重要な要因でもあるけど、人間の周りの環境と何よりも努力が一番大切な要因であるって生物の授業で習ったでしょう？」

「そんなのは詭弁よ、だって、」

草治が完全に扉を開いた時に、少女達の言い争う声がぴたりと止んだ。それから少女達が目を丸くして草治に視線を向けてきた。

突然の沈黙の中、草治は何か声を掛けなくてはと思考していると取り囲んでいた少女が今までにない高い声を上げた。

「ああああ赤井草治？」

怯えるかのような少女の声を皮切りに他の少女達からも甲高い声が草治の耳に響いた。

「赤井草治ってあの不幸を呼び寄せる男？」

「歩く？不思議って噂の？」

不本意な噂に草治は目を細めるもゆっくりと財布に向かって、引いては少女達に向かって歩き出す。草治の長い黒髪と暗い瞳が醸し出す不吉な気配に少女達が圧倒される中、金髪の少女だけが面白い見せモノが始まったとも言つかのように静観していた。

ある程度少女達に近付いたところで草治は立ち止った。要件だけ伝えて早々にここを立ち去ろうと大きく息を吸い込む。

「邪魔だ」

（俺の財布が後にあるからね）

女の子のような小柄な外見にしては低く地鳴りのような声が食堂に行きわたった。不吉を背負う少年に相応しい声に、取り囲んでいた少女達は怯えの表情を濃くした。

少女達の反応を見て、草治は言葉が足りていないことに気がついた。これでは喧嘩を止めようと脅しているかのような物言いになってしまう。ただ財布を取るために食堂に来たことを伝えるため、補足をしようと草治は口を開こうとした。

しかし、草治よりも早くリーダー格であろう背の高い少女がヒステリックな声を上げた。

「何よ。アンタには関係ないでしょう」

「いや、大いに関係ある」

（俺の財布がお前達の後にあるからね）

草治は勢いで反応してしまい、補足を入れるのを忘れてしまう。

草治の声に背の高い少女が後ずさるも、突然後ろを指差した。

つられて草治も指の方向でにやける金髪の少女を見る。改めて見ると外国の映画で主役を張ってもおかしくなさそうなグラマー美人といった感じだ。背は草治と同じか少し高いぐらいで、女子にしては高いほうだろう。

草治はこの少女に見覚えがあった。

（確か、先月に転校してきた天竜寺妃だったかな）

「言っておくけど、こ、こいつが悪いのよ。いつもいつも私達のこ

とを劣勢種の遺伝子だつて馬鹿にして」

「別に、馬鹿にはしてないわ。事実でしょう？私はきちんと遺伝子を改良してもらつて優勢な遺伝子にもらったのだから。それに全ての才能が遺伝子だけで決まるわけじゃないってさっきから言っているでしょう？きちんと努力すればそれなりに結果が出せるのよ」

天竜寺妃が高笑いするのを聞いて、草治もようやく状況を把握することができた。

（ああ、また遺伝子教育を巡る争いか）

遺伝子とは生物の設計図である。生物の形、色等の形質を決定する設計図。その設計図を書き換える技術、遺伝子の組み換え技術により、理論上は効率的な生物を造ることができる。植物の品種改良から始まり、動物の遺伝子操作、さらに近年では人に対しての遺伝子教育と呼ばれる用は人間に対する遺伝子操作も流行りつつある。

「ほら、今のを聞いた？こいつ私達のことそうやっていつも馬鹿にしてくるのよ。許せないでしょう？」

少女が苛立ちながら草治に同意を求めてきた。草治は賛成も反対もせずに堂々としている妃を観察する。

遺伝子教育では瞳の色、髪の色、運動能力、脳の記憶容量や演算能力などの形質を書き換えることで理想的な子どもを造ることができる。しかし、この技術は倫理的にも問題視されることもあるが何よりも費用がかかることが問題となる。

つまるところ、英才教育の如く、裕福な家庭の子どもたちにしか遺伝子教育を行うことはできない。

眼の前で胸を張る少女は噂を聞いたところ、親もかなりの資産家で、勉強も運動神経も完璧らしい。

このことは遺伝子教育のもう一つの問題点を生む。遺伝子教育を受けたかどうかで人を判断する選民思想のような流れ。現に、天竜寺妃は自分の容姿と能力を鼻に掛けている節があるという噂も草治は聞いたことがあった。とはいえ、遺伝子教育を受けてない者達も過剰に嫉妬を抱いているという感覚も草治にはあるのだが。

しかし、と草治は改めて少女達も見渡す。

「アンタだって遣伝子教育を受けたぐらいで威張られるのは嫌だろ？」

少女に言われて草治は深く息を吐く。

「そんなことはどうでもいい」

草治は心底どうでもいいという風に呟く。天竜寺を除く少女達が息を呑む。音量は非常に小さかったがその低い声は食堂の中で不気味に反響した。自分の声の不吉な感じに呆れながらも続けようとして草治は粘つくような濁りの瞳が尖る。

「問題は、一人に対して多数という手段に出たお前達が理に適っているとは思えない」

多少ながら武道を嗜む草治は曲がった事を好まない性質でもある。だが今日のところは説教をしようなどとは思っているわけではない。伝えたいことだけを言っ て草治は満足した。

「俺は言ったぞ。邪魔だと。とにかくどけ」

（そこに居ると財布を取ることができないんだけど）

草治はそう言っ て少女達を睨む。見かけによらず低い声音は少女達の耳に粘つく。

「あ、アンタは天竜寺の肩を持つわけ？」

背の高い少女が震えるながら叫ぶように言っ た。他の少女達は顔を青くして草治に言いかかる少女を止めようとしていた。

「早く、逃げた方がいいよ」

「だって、あいつは、赤井は、」

少女達が喚くのを聞きながら草治は頭を掻いた。

「どうしても、そこをどかないと言っ たらば」

草治はそこで口を閉じた。一瞬、静寂が訪れた。興奮していた少女も、草治のそら怖ろしい声に顔を引きつらせた。妃は相変わらずにやけた笑みを浮かべている。

（遠回りして財布を取りに行くしかないな）

彼女達を説得するよりも遠回りして財布を取っ たほうが早いと判

断した草治は彼女達から視線を外し、身体が強張った。草治は右頬を震わせながら己の視たモノを注視する。

彼の頭上では赤い影が揺らいでいる。時が止まったかのような感覚を草治は感じた。

「ほらあ、私の言った通り、お財布がありましたよ。それではご褒美です」

薄絹の間から下品に口元を笑わせて、赤い着物を着た少女が言った。両の手を水平に伸ばし、赤い袖を垂らしてから、パチンと掌を打った。

（こいつが俺の前に来るといつも、）

少女たちは滑らかな黒髪を撫でてから頭草治がため息を吐く。

「お前は何がしたいん、」

その時、真上から大量のガラスが一齐に割れる音が轟いた。

「な？」

草治は目を見開き、天井を見上げる。天井からはいくつもの透明な大粒の塊が当たり一面に落ちてくるのが見えた。

食堂は張り板の天井であり、ガラス等一切ないことを草治は知っていたが、実は食堂の天井はガラスでそれが今、突然粉々に割れて降ってきているのだとすら感じた。

周囲からは少女達の悲痛な悲鳴を聞きながら、草治は目を閉じた。（これだけのガラスが突き刺されば、さすがに命はないかもなあ）そんな諦観にも似た感傷に浸った瞬間、凄まじい衝撃が草治の身体を揺らした。

衝撃は、数々の破片が突き刺さる感覚ではなく心臓が止まるかと思うほどの冷たさと、重たい布団が頭の上に落ちてきたかのようなものだった。

（これは、水？）

未だに頭の上から押し付けられるのを感じながら草治は目を開い

た。滝に打たれているかのような光景に苦笑していると、次第に水が止んでくるのが分かった。

眼の前でも少女達が茫然としているのを横目に草治は天井を観察した。

「スプリンクラーの誤作動つてやつね」

天竜寺の弾んだ声を聞いてから、草治は天井の上に水道線がついた水巻機がぶらさがっているのに気がつく。

「まあ、旧式に散水機だから仕方ないと言えば仕方ないか。さっきのガラスが割れるような音は、スプリンクラーが作動した時に起こる音だわ。さすがは不吉を呼ぶ男」

天竜寺が楽しそうに言うのを聞いて、草治はびしょ濡れになった少女達に視線を移す。天竜寺だけがはしゃいだ目を向けていて、他の少女達は顔を引きつらせて草治を見ていた。

「噂では聞いてたけど、すごいわねえ。赤井草治が窓に近づくとガラスが割れる。赤井草治が薬品を扱えば誤爆する。そんなあり得ない噂ばかりだったけど案外、本当かもねえ。ってか不吉を呼ぶ男に近付くと不幸が伝染するって聞くけど、私達にもうつっちゃうのかしら？」

天竜寺は笑いながら少女達に話しかけた。途端に少女達の間顔が引きつる。

「そついえば、赤井草治と話すと呪われるんでしょう。どうしよう」「いやああ」

一人の少女が叫び出すとともに他の少女達も怯えた顔で逃げだした。

草治としては複雑な気持ちだった。確かに不足の事故が起こる回数には学園の中でも草治が一番であろう。先日草治の側にあった窓ガラスが割れたりしたのを思い出す。そのたびに赤い少女が現れたのだが。

（マジでお被いをしてもらおうか）

食堂には天竜寺と草治だけが残る。

草治は濡れた髪を掻き上げながら財布を探した。財布は水に流れ床に落とされていた。おそらく中身もびしょ濡れだろう。

草治はため息を吐いた。天竜寺はしげしげと草治を見つめている。「あら、不吉を呼ぶ男って名前にしては案外かわいい顔つきじゃない」

「別に俺の名前は不吉を呼ぶ男ではない。それに不吉を呼んでいるなんて思ったこともない」

不機嫌そうに草治が言っていると天竜寺が愉快そうに笑い、天井を見上げた。

「もしかしてアンタって遺伝子教育者？」

突然の話題に草治は眉を顰めてから首を振った。

草治が通う聖葉学園にも何人かの遺伝子教育をされた者がいるが、彼らのほとんどは突出した才能を持っている。対して、草治はこれといった才能はない。確かに成績も悪くないし、運動も出来ないわけではないが、それはあくまで普通と比べればの話である。

「何で俺が遺伝子教育をしてると思うんだ？」

「だってアンタって面白い才能があるみたいじゃない」

天竜寺が不敵に笑うのを見て草治は首を傾げた。面白い才能などこれっぽちも思いつかない。

草治の様子に天竜寺はキツネのように目を細める。

「だってアンタには不幸を呼び寄せるっていう才能があるんでしょ？ スプリングラーが誤作動するなんてなかなかないわよ」

「は？」

珍しく間の抜けた声を草治が漏らした。不幸を呼ぶなんて才能なのだろうか？と草野は目を瞬かせて天竜寺を見つめる。

天竜寺は唇を舐めて草治にむかって優雅な足どりで近づいてきた。「アンタは遺伝子教育ができた理由って知ってる？」

「遺伝子教育で優秀な子どもがほしいからだろ？」

そう答えた草治に対して天竜寺は裾から水を垂らしながら両手を交差させバツテンを作った。

「不正解。正解はある研究者達が人間を超えた人間を造ろうと思っ
たから」

肉食動物のように犬歯をむき出しにして天竜寺は笑った。草治は
何を言っているのか分からずに何も言わない。というよりも頭のね
じが外れたかのようなことを言うエリート少女のことを呆れるよう
な感情を抱く。

と、人々がかけてくる音が聞えてきた。

どうやらスプリングラーの誤作動に気がついたようだ。

「それじゃ、また今度」

天竜寺は親しげにも思える口調でそう言い残し、草治の横を通り
過ぎて行った。

ずぶ濡れの格好にも関わらず颯爽とした足どりで去って行く少女に
感心してから草治は床の上で大量に水分を含んだであろう皮の財布
を拾った。

「また、お前か。赤井」

小太りの担任の教師がいつの間にか食堂の入口に立っていた。

「3日前もガラス割っていたし、何て言うか頑張れよ赤井」

教師のほうも草治の対応には困っているらしかった。別にいつも草
治が悪さをしているということは明らかなのだが、草治の周りでは
事故が多すぎるのだ。

赤井神社の少年（後書き）

ちなみに、赤井神社という名前の神社は実際にあるそうです。佐渡の赤井神社、長野県の北赤井神社、おそらく福島県にある赤井諏訪神社があるらしいです。しかしこの話で登場する赤井神社は私が思いつきで考えたものであしからず。

赤井神社に祀られし姫

草治が暮らす神社は赤井神社と呼ばれている。手入れのなっていない雑草が無造作に石畳の間からいくつも顔を出し、本殿である神社のほうは埃だらけだ。

草治は石の階段を上り、本殿の横にある古臭い瓦葺の日本ならではの家に向かう。

草治はこの家に祖父と二人暮らしである。父と母を早くに亡くし、祖父が管理するこの神社に引き取られたのだが、祖父は近くにある大学で働いていて何かと忙しいせいか神社のほうはほとんど放つてある状態である。

「ただいま」

引き戸をこじ開け、草治は覇気のない声で家の中に入って行つた。

「お帰り〜」

間の抜けた声が奥から響いてくるのを聞きながら玄関に飾つてあつた時計を見上げる。

（9時。今日は帰るのが遅くなつたな）

スプリングラーの誤作動した所為でずぶ濡れになつた草治であつたが、学校から予備の制服の着替えを貸してもらつてきた。居間に行くと祖父である赤井源蔵が床に本を広げて熱心に読んでいた。

「今日は遅かつたな。草治」

「いろいろあつた。それより」

言葉を区切り、いつもと雰囲気が違う居間を眺める。

8畳の和室の中心には卓袱台が置かれている。その上に何故か古臭い刀が置いてあつた。刃渡り1メートルくらいだろうか。茶色の塗装が柄にも鞘にも施されているようだが、所々塗装が剥けている。柄には丸い円の紋様の中に蛇を象つた絵が刻まれている。

「その刀って家の神社の家法みたいなやつだろ。何でこんなところに出してゐるんだよ」

「ああ、まあ少し気になることがあってな」

祖父は今年で60歳になるが未だにその外見40代と言っても納得してしまいそうなくらい若い。

そして祖父は草治と違い、性格も陽気で声が大きい。

祖父の源蔵が呼んでいる文献も古臭く紙が茶色に変色している。

おそらく神社の倉庫にあった本だろう。源蔵は大学では日本史の研究をしている。

祖父は文献を読み進めながら口を開いた。

「最近、神社の裏にある井戸から音がするらしいんだよ」

「裏にある井戸って、御札が貼ってある板で封鎖されているやつ？」

「そうそう。子どもがこちら辺で遊んでたら井戸からトン、トンって叩く音が聞えるんだってさ。まるで封をされた板を破ろうとするように」

源蔵の話に草治は顔を曇らせる。

神社の裏にある井戸にはイワクガある。その所為か赤井神社は一種の神霊スポットであると近所では有名になっているのだ。

端的に言えば昔、こちらの土地にいた鬼を閉じ込めたという話だ。

井戸の中の鬼を鎮めるため、人々の願いの窓口としてここに神社を建てた。

それ以来、その井戸は誰も開けることができないらしい。井戸は一応は簡素な御札等や縄で塞がれている。草治も子どものころに井戸を塞いでいる粗末な板を取ろうとしたことがあるが、びくともしなかった。というか立てつけ悪すぎるだけだろうと草治は考えているのだが。

「そんでワシも井戸の近くに行ったら本当に音がするわけよ」

「か、風とかじゃないの？」

草治は不吉を呼ぶ男、歩く七不思議等といわれているが決して怖いものが好きなわけではない。むしろ苦手な方だ。正直なところ、風呂場で頭を洗った後に鏡に映る自分を悪霊と勘違いをして肝を冷やすような思いをしたことも何回かある。

「まあ、大した音じゃないけど風の音とは違う気がするんだよ」

「へえ」

「それなので、とりあえず除霊の仕方を探そうと思ってな」

「は？」

草治が本日二度目の間の抜けた声を発すると共に、源蔵は文献を閉じた。

「ひとまず、神社の文献に鬼を井戸に閉じ込めた時の様子が記されてたから読んでみたけどワシでも何とかなりそうだ」

源蔵は満面の笑みを浮かべて立ち上がり、卓袱台の上にあった刀を手に取った。

（何する気だ？）

草治が困惑しているにも構わずに源蔵は刀を抜こうと手に力を込めた。

「抜けないな」

（そりゃあ、錆びてるからだよ）

しばらく源蔵が刀を抜こうとしているのを眺めながら草治は頭を掻いた。

「その刀を抜いてどうするつもりだよ？」

草治が疲れた口調で質問すると源蔵は刀を抜くのを諦めた。それから草治に真剣な視線を送る。

「この刀で井戸から出てきた鬼を斬る」

真顔でそんなことを言う祖父を見て草治は頭を抱えなくなった。

源蔵は草治と違って怖い物知らずな性格である。率先してホラーズポット等とはやし立てられたところにも行くこともある。祖父は自分が専攻している民俗学の研究のためだと言っているが。

「ウチの神社に鬼なんているわけないだろう」

草治が言つと祖父は肩を竦める。

「お前は何でそんな夢のないことを言うかね」

「高二になってもそんなこと言っていると頭がおかしいと思われるからな」

「何かまるでじいちゃんの頭がおかしいみたいない方だな」

草治がにべもなく言うと同蔵は子どものよう眉を顰めた。しかしその表情もすぐに消え、突然口元を緩めた。まるで悪戯を思いつた子どものような笑みに草治は嫌な予感を感じた。

「そうか、そうか草治は怖くないんだね。それなら今から井戸のここに行つて変な音がどうして鳴るのか確認してこれるよねえ？」

子どものような祖父の言い分に草治は顔を引きつらせた。祖父は草治が怖がりなことを知っている。

「いや、夜は暗くてしつかりと確認できないからな。明日の朝のほうがいい」

「そんなこと言つて、本当は怖いんだろ？高二にもなつて鬼が怖いってダサいなあ。恥ずかしいなあ。お前の中学の友達に言いふらしてやろう。きつと皆笑うだろうなあ。そんな不吉な顔してホラーが怖いなんてさあ。きつと仙石さんの娘さんなんか大爆笑だろうなあ。あれ？そういうえば草治って仙石の娘さんが好きだったよねえ？振られちゃったけど。いやあ、本当に悲惨な振られ方だったよねえ」源蔵の得意顔でペラペラと口を動かすのを眺めながら草治は観念した。本当だったらコンプレックスすら感じている低い怨霊の如き声で威嚇したかったが、口下手な草治では本を読む時と寝る時以外は喋つてないと死んでしまうかのような祖父に口で勝てるわけない。それはいつものことで分かっている

「分かったよ。確認してくるよ」

草治は口を尖らせながらぼやいた。

勝ち誇つた祖父を横目に草治は再び玄関に戻り、外に出た。

夜空には少しだけ赤みを帯びた三日月が浮かんでいた。玄関にあつたライトの余波を浴びて神社の古びた本殿を見て草治は背中に寒いものを感じた。まるで本殿の掃除などをサボっているのを怒つていて草治にたいして報復をしようとしているのではというような妄想も持った。

（とにかく神社の裏に回つて、井戸を見てくるだけ、それだけだ。

走れば5分もかからない)

草治は自分に言い聞かせて急いで神社の本殿を横を回る。

突如、建物の下から細長い物が横切った。慌てて影をライトで追う。猫がいた。この神社の境内でときどき見かける猫だ。夜の中、眼を見開いてこちらを見ていた。内心、怖がっている所為かその猫が笑ったように思えた。ガサガサと本殿の裏の森の中に入って行った。

(あと少しで、井戸がある。とにかく井戸を見たらすぐ帰ろう)

神社の森に入った途端、周囲の温度が劇的に下がったのを草治は肌で感じた。

草治は全身から血が引いたと。

草治を脅かすようにどこかでカラスが啼き、羽ばたく音が聞えてきた。

風が木の葉っぱを揺らし、森が呼吸しているかのような葉のこすれる音が聞えてくる。

(あ、井戸が見えた)

太い木々の間から四角い椅子のようなシルエットを確認し、草治がホツと胸を撫で下ろした。その時、

ズドン

壁を蹴ったような音が森に響いた。草治は驚いて身を竦ませる。

ズドン

再び、井戸の方から鈍い音が聞えてきた。

ズドン

井戸の蓋の部分が盛り上がった気がした。

(えっと、あれ?)

困惑しながらも草治は思考する。その間にも定期的に井戸の蓋を蹴りあげる音と、井戸の蓋が盛り上がるのが見えた。

（今からじいちゃんを呼ぶわけにはいかないし）

ズドン、ズドン、ズドン

井戸の底から暴れるように音が続く。まるで井戸の底からナニかが這い上がってくるような。

（とにかく、井戸の蓋を押さえつけよう）

慌てて草治は走り出した。

木々が開き、井戸しかない広場のような空間に出た時だった。木の根っこに足を取られた。（あら？）勢いよく転び、額を井戸にブツケテしまった。バットで頭を打ち抜かれたかのような衝撃が草治の頭を揺らす。

（痛え）

額からやけに凄惨な刺激を感じた。血が出ているのだろつとぼんやりと思いながら立ち上がる。次第に額から血が出てくるが草治の表情に苦痛の色はない。だが血が滴っているせいでいつも以上に死人のような顔つきにはなっている。

倒れた時にライトも手から落ちて地面に転がり、井戸を照らしていた。

ズゴン

今度は拳銃を撃ったかのような音と共に、井戸の蓋が吹き飛ぶのを草治は見た。

そして蓋から紙のようなものが剥がれる。

（御札が剥がれた）

御札は暗い森の中を蝶のように草治の目の前に舞ってきた。草治は御札に視線を奪われ、昨日停止したロボットののように茫然と立っていた。

「よ、う、や、く、で、れ、た」

草治の真下から、井戸の底から女の声が響き、右足に冷やりとしたものを感じ心臓が跳ね上がる。

井戸の中から赤色の腕が伸びてきて草治の足をもつすごい力で驚頭かみにしている。

「っうお」

草治を井戸に引きずり込もうとする腕の力に引きずられ、足払いされて滑るように倒れた。

草治が倒れても人間の力とは思えないほどの力で彼の足は引っ張られる。

無我夢中で腕の力に抗う草治の真上から御札が風に舞う葉のように下りてきてペタリと草治の頭に張り付く。

足を引きもどすことに必死で張り付いた御札に気付くことはなかった。それどころではなかった。

井戸からぬつと茶色い何かが飛び出してきた。

もじやもじやとした茶色の綿に包まれたお化け、それが草治の第一印象だった。良く見ると茶色の綿からは二本の細長い棒が角のように生えており、そして二つの赤い目があった。一瞬だけ草治の足を掴んでいた力が抜けて、草治と茶色の物体は無言で見つめ合う。彼自身も額に御札を張り付け、出血している様は人間には見えず、化け物同士が向き合っているようでもあるが。

草治はこの井戸から出てきた何かを見て井戸にまつわる説話を思い出した。

（井戸から鬼が放たれた？）

モジヤモジヤの物体も草治の顔を見て息を吸う気配を草治は感じた。

「この悪霊があああああ」

井戸から出てきたお化けが突如叫び、草治に飛びかかってきた。草治は呆気にとられる。

反射的に草治は茶色い物体を左足で蹴りあげた。二つの赤い目玉の真ん中をめがけて。見事に草治の足がもじやもじやお化けに突き刺さった。草治を掴んでいた手が離れ、再び異形の物体は井戸に落ち

て行く。

（助かった）

草治が蹴った恰好のまま固まっていると、すぐに井戸からもうじやの髪が這いあがってきた。

「てめえ、女の顔を蹴るなんて最低だな」

脅すような男口調が茶色のお化けから聞えた。構わずに草治はもう一度蹴った。形勢逆転。今の草治にはこの井戸から出てきたモノに恐怖は感じなかった。触ることもできるし、話すこともできる。つまり眼の前に居るのは鬼の変装をした人間であるという答えを草治は出した。

（どうせじいさんが俺をからかうために誰かを雇ったんだろう）

草治の祖父ならあり得ることだ。そして祖父の頼まれた脅かし役は草治の不気味な雰囲気逆に怯えてしまったというところだろうと草治は推測した。

草治に蹴られた自称女のお化けが再度落ちそうになるも今度はすぐに体制を整えて踏ん張った。

「おい、低級霊。私を誰だと思っている？喰うぞこら」

「誰が低級霊だ。お前こそジジイにそそのかされて俺を驚かそうって魂胆だろ」

「はっ何を。血を流しながら頭に御札を付けて良く言う。どうせ魔導師にチョッカイでも出してのされたんだろ？ザコが」

「そっちこそ何を意味分からんことを。潰すぞ」

草治は会話が噛み合わない女に呆れながらも足に渾身の力を込めて女を押しもどそうとする。

「ちょ、お前、調子に乗るなあああ」

女が大声で叫んだ瞬間、草治の眼の前にいくつかの金色の粒が蛍のように横切った。蛍達はゆっくりと蛍が女の下に集まる。

（いや、蛍じゃない）

光の粒は全て金色の文字で出来ていた。本に印刷されている程の小さな小さな文字がどこからともなく現れ、いつしか文字は草治を取

り囲み、浮いていた。

文字の群れは女の周りを蛍の如く舞い始める。

「くたばれ、クソガキ」

女が手をかざし、口元を吊り上げた。同時に文字の光が輝きを増す。光の群れが草治に一齐に群がり飛びまわった。

しかし、光は草治に当たると雪が溶けるように消えて行く。熱くも何とない。

（火の玉、でもないし糸も付いてない）

草治が薄らぐ光に困惑して女を見ると、女も赤い瞳を見開いていた。女の顔にも困惑が見てとれた。

「あれ？成仏しない？なぜ？もしかして人間？」

女が首を傾げる。草治も女を押しつけていた足から力を抜く。

草治はお化けだの悪霊だの間違えられることは毎度のことだ。文化祭でのお化け屋敷に客として参加したのに脅かし役が悲鳴を上げるのも慣れたものであるし、その不気味な容姿をして脅かし役としては最強だと言われこともある。そのため肝試しの仕掛けは一通り知っているつもりだった。だが今回ばかりは釈然としなかった。

「今の光はどういう仕掛けなんだ？」

「いや、仕掛けはないけど」

そう言つて女が癖のある髪を掻き上げる。ここで初めて草治は女の顔をまじまじと見る事ができた。色白の肌に癖のある長い髪が赤い着物を覆っている。

また神秘的な赤色の目が鋭く、剣呑な印象を人に与える。そして特に目を引くのは頭から生えている二本の角である。

草治は女から生えている角に手を伸ばしてグイッと引っ張った。

（取れない。飾りじゃないのか）

草治が女の角を揺すっていると女の眼が更に険しくなる。

「おい、何するんだ。角に触るな。変態」

ほぼ毎日不気味だの死人みたいだの言われているが、変態と言われたのにはさすがに傷ついた。仕返しのため角を持つに手に力を

込めて井戸の上で女をグルグルと回す。気分としては煮込んだ鍋をオタマで掻き回しているようだった。ちなみに草治は料理が好きである。

「俺は変態じゃない」

「それならまずは角から手を離せ。破廉恥男」

女に言われてようやく草治は角から手を離す。女の厳しい口調に角を触ることは予想以上に良くないことだと草治もひとまず反省し、もう一度名誉を取り戻すために口を開いた。

「俺は変態じゃない」

「知らない。死ねばいいに」

「おい、すぐに変態を撤回しろ。名誉既損だ」

草治が憤って聞いたが女は答えずに井戸から出てきた。女は十二単のような豪勢な着物を着ていた。

井戸を覗いてみると暗いためもあるが底が見えなかった。近くにあったライトを手に取り井戸を照らしても黒色の絵具で塗りつぶしたような空間しか見えない。どうやらかなり深い井戸であることが分かった。

（この女はどうやって井戸を這いあがってきたんだ？）

女を見ると着物を手で叩いて埃を落とすような仕草をしている。草治は改めて女の角を見てから呟いた。

「鬼姫」

草治が呼んだ名前に応じるように女が顔を向けてきた。口元には薄笑いが浮かんでいる。

「それだ。それが私の名前だ」

女の赤い瞳が妖しく光った。

魅入ったように草治はその瞳を見つめた。

鬼姫、それは赤い神社の文献に伝わる神社の裏の井戸に封じられた鬼の名前である。

「それで？お前は誰だ？」

女、鬼姫が草治に尋ねてきた。

草治は頭を掻く。

「赤井草治」

草治が名乗った途端、鬼姫が目を見開いた。

「お前が赤井家の当主。やっぱり死ね」

「何で死ななくちゃいけないんだ。俺が何をした」

鬼姫の罵詈雑言に草治も声を荒げた。

草治は怒っていた。先ほどから聞いていれば特に悪いことをしたわけではないのに鬼姫の草治に対する態度は癪に障る。もはや草治の中では先ほど彼女の顔を足蹴にしたことは忘れている。

憤る草治に対して鬼姫は彼から視線を外しながら口を開いた。視線の先には赤井神社の本殿がある。

「何で私の神社がボロボロなのか知ってるか？」

草治の顔が再び青褪める。

鬼姫は草治を睨む。

「答えはな、お前が神社の手入れを怠ったからだ。せめて一年に一回くらいは掃除をしるよボケ。神社がボロいと私も気持ちが悪くなるんだよ」

鬼姫の目にはうつすらと涙が浮かんでいるような気がした。罪悪感を感じた草治は鬼姫から逃げるように目を逸らしながら言い訳を考えた。

「考えてみたら当主は俺じゃなくてじいさんじゃん」

（つまりじいさんの所為）

心の中で祖父に責任を押しつけてから真っ直ぐに鬼姫を見つめた。

「俺は悪くない」

堂々とした草治の態度に呆れるかのように鬼姫は息を吐いた。

「赤井源蔵は赤井家に婿に来たわけだから当主の資格はない。覚えておけ神主として必要なのは血筋だ。つまりお前が犯人だ。償え」
鬼姫はどこからのドラマの主役のように人差し指を突き立てて草治に向けてきた。

（人到人差し指を向けるな）

気分を害しながらも草治は背中に引汗が流れるのを感じた。どうやら悪いのは自分という流れになってきているのを感じた。というか智樹はほとんど家に居ないため神社の管理をしなくてはいけないのは草治であり責任の多くも自分にあるのは確かなのだ。

「償うって何をだ？」

草治が恐る恐る聞くと鬼姫は小さな顔に手を当てた。

「無論、神社の復興だ。今や私の神社は誰ひとり参拝に来ないどころかホラースポットとして名を馳せている」

「言っておくが参拝者がほとんどいないのはずっと前からだぞ。俺の所為じゃない」

「それは知っている。だから私の封が解けたことを機に再興を計ろうと思っている」

「それを俺に手伝えと？」

「そうだな。私の神社の神主に手伝ってもらいたいのだが」

明らかに嫌々な草治に鬼姫は上から下まで不躰に観察した。それからため息を吐いた。

「チェンジで」

「は？」

鬼姫の脈絡を得ない発言に魔の抜けた声を出す。こんな簡単なことも分からないのかと鬼姫は出来の悪い生徒を前にしたように声を強める。

「だから、お前じゃ私の神社の神主として相応しくないからすぐに私の神社の神主としての地位を誰かに譲れ。早くチェンジしろ」

失礼な物言いに当然ながら草治は機嫌を悪くする。というか、鬼とやらが外来語を使うな。

「何で初対面のお前にそんなことを言われなきゃならねんだ」

別段神主の座がほしいわけではなかったが、面と向かって否定されるのは苛立たしい。怒った態度を気にも留めず鬼姫は堂々と答える。

「私は普通の人間には視えないものも視えるからな」

視えないものが視えるからと言って草治を否定することに繋がらな

い。未来でも視えるのだろうか。「いったい何が視えるんだ？」

「そうだな。色々視えるが」

鬼姫は考え事をするように少し間を置いた。

「一番は、魔法の文字の流れかな」

「何だそれ？」

胡散臭い視線を向ける。魔法の文字なんて聞いたことはなかった。

しかしながら先ほど見せられた金色の文字が脳裏を過った。あれのことだろうか。

「ああ、深く考える必要はない。様は、森羅万象を司る気の流れだな」

説明を受けた草治は釈然としないものを感じ、ため息をついた。

「その流れが視えるからって、俺の何が視えるんだ？」

「だから言っているだろ。森羅万象を回している流れが視えるって」
そこで草治は気がついた。鬼姫の瞳が紫色に変化している。呑みこまれそうな光に見とれる。

「つまり、俺の周りの気が良くないと」

今まで様々なところで祟られている等と言われてきただけあって草治に驚きはない。むしろ納得すらしてしまう。確かに呪われているような人間が神主というのは不吉だろう。ところが鬼姫は曖昧な表情を浮かべる。

「まあ、そうだが。特筆すべきはお前に憑いている守護霊のことだ」
「守護霊？」

またも草治は胡散臭そうな声を上げる。守護霊と言えば人間を災いから守ると言われている霊のことだ。

「今はいないが、赤い着物を着た少女の霊だ」

「ああ、あれか。なんか前世の恨みだとか言ってるんだよね」

げんなりと草治が言った。あの少女とは長い付き合いだが、あれが守護霊だということには驚きを持った。

「何にせよ、お前の守護霊は正常に機能していない。本来なら宿主の周りの気の流れを良くすることが日々の職務なのだがお前のはむ

しろ悪くしている。つまり呪われているわけだ」

少しだけ同情するような表情で草治を視る。一方で草治はやはりなあと頷く。生まれてから16年、本当に不幸続きだった。きっと彼女がいらないのもその所為なのだろうと考えだす。

「俺が崇られているのは了解した。俺の守護霊を良くすることは出来るのか？」

自分でも馬鹿げたことを聞いていると思いつつも尋ねずにはいられなかった。一応眼の前の女は井戸から出てきた時にも種も仕掛けもなさそうな光を出現させている。それに、いつの間にか紫色だった眼の色も赤色に戻っている。彼女の胡散臭い話を信じて良いと思うようになっていた。しかし鬼姫は再びため息を吐いた。

「そんなことは出来ん。そんなことよりも大切なのは次の神主のことだ」

薄情な否定の答えに草治は顔を引きつらせる。

「おい、本当に方法はないのか？」

思わず鬼姫の角を掴む。さすがに呪われていると分かれると気分は悪い。前後に角を動かす。鬼姫は迷惑そうに顔を顰めて草治を引き離そうとした。ところが草治の力が以外に強くなかなか離れない。

「分かった。私が後で守護霊に悪さをしないようにかけ合ってやるから、角から手を離せ」

鬼姫が折れ、草治は名残惜しそうに手から力を抜く。いつのまにか角で遊ぶことに夢中になっていた。「話を戻すが、お前に神主を続けてもらうのは困るのだ。だから早急に次に役目を引き継いでほしい」

草治は素直に頷いた。拒まれていた理由が分かり草治自身ではどうしようもないのではや鬼姫に抵抗しようとは思わなかった。むしろ不幸が減るかもしれないので珍しく胸を躍らせていた。

「そうか、良かった。それならば早く相手を見つけなければな」

「そつだな」

草治は鬼姫に協力しようとは常よりわずかに弾んだ声を出す。神主が

何をするのか知らないが、とにかく暇な奴を身繕ってこようと意気込む。と、草治は神主に必要なことが良く知らないことに気がついた。靈感みたいのが必要なのだろうか。

「それって誰でもいいのか」

草治が聞くと鬼姫は眼を丸くした。

「いや、お前がいいならだれでもいいが」

「へえ、そうか」

草治は満足そうに言う。次の神主を自分で決めていいならば適当に決めてしまおうと草治は暇そうな知り合いを浮かべる。とは言っても草治に知り合いは少ないが。中学では割かし友達はいたのだが高校の友達なんてたったの一人。しかも不登校。悲しいことに類は友を呼ぶ。不登校の友の顔を思い浮かべた。不登校だし暇であろうと結論付ける。

「よし決めた。有馬に決めた」

草治が鬼姫に言うとな彼女は表情を固めながら一歩草治から身を引いた。

「有馬って有馬辰巳か？」

「そうだが。なんで知っているんだ？」

「それは、私は先ほどまで封印でこちらの土地と繋がっていたから大かたの土地の情報は把握している。一応は神主のお前の身近な人物の情報は集めやすかった」

鬼姫の話聞きながら、草治は感心したが鬼姫は軽蔑したような視線を送っていた。何か顔に憑いているのかと顔に手を当てて血が付いていることを思い出した。それほど深くはないがこちらも早く手当しなければいけないであろう。

「とりあえず明日ぐらいに有馬に頼めばいいか？」

「いや、ダメだろ」

草治が選んで良いと言った癖に鬼姫は反対した。

「何故だ？」

「なんでって有馬辰巳は男だぞ？」

「普通は男が神主だろ」

それを聞いて鬼姫は今まで一番大きなため息を吐いた。訳が分からないと言った表情で草治は鬼姫に文句を言う。

「何だよ。それならお前が決めればいいだろ。だいたい俺は」

不平を言っていると、鬼姫は疲れたように目を閉じながら草治との間に右手を出して制した。

「お前は勘違いをしている。神主は赤井の血を継いでいないとなれない」

鬼姫に言われて草治は首を傾げた。混乱している草治に鬼姫は説明を続ける。

「現在、赤井の血筋を継いでいるのは草治、お前だけだ。しかし、お前は絶望的なほど神主として向いていない。よって」

そこで鬼姫は真剣な面を上げる。

「今すぐにでも草治には貰って子どもをつくってもらわないといけない」

草治は小首を傾げた。今言われたことが頭の中で上手く変換出来ないのか、呆けた顔を見せる。相変わらず鈍くさい奴だ、と鬼姫は空を見上げながら呟いた。

少年と姫の赤井神社復興計画

赤井草治、16歳。初恋というか初の告白は中学2年の夏。撃沈の思い出。それから恋愛などしたこと無い。

言い訳をすれば、周りの女子は怖がって近付いてこないのだが、実際のところ怖がられてなくても口下手を自覚している草治には女の子と仲良くなれるとは思えなかった。それなのに、といった感じで草治は心の中で愚痴を振りまきながら、雑巾をゴシゴシと動かした。「いやあ、本当に有難いことですよ」

赤井源蔵は上機嫌な調子で自称神様に話しかけている。鬼姫も愉快そうに胡坐を掻いている。彼らの横には酒がいくつも転がっていた。「正直なところ、草ちゃんの将来が不安だったんですよ。何せ本当に根暗で」

「安心してくれ。私のチカラであの社会不適合なクズをハキハキとした性格に矯正しててみせる」

鬼姫が大口を開けて酒を一气飲みしていく。ゲラゲラと笑いながら祖父も酒を仰いでいる。さりげない祖父からの中傷にもめげずに草治は赤井神社の掃除を淡々とこなす。

家に着くなり、鬼姫を見て茫然としていた源蔵だったが事情を説明したところ、というか草治の嫁探しをするという話をした途端両手を上げて喜び歓迎し出してしまった。一方で草治は神社の掃除を命じられ、ようやく一通りの草治が終わったところだ。

本当なら掃除機を使いたいところだったが、夜中ということもあり雑巾がけをしようということになった。近くに民家どころか昼間にも人通りもない山の麓に神社があるのだからそんなことは気にする必要はないと草治は思っているのだが。

「掃除が終わったぞ」

ひとまず全体の雑巾がけが終わり、話し合う二人に声を掛けた。すると酒の所為か若干顔を赤らめた鬼姫が睨んできた。

「私の本体は、井戸にあり、今はどうしてここにあるわけだ」

そう言って彼女は自分を指差し、次に上座に飾ってある鏡を指差した。

「しかしながら、この神社を通してこの土地からの文字を食べるわけで、ここは人間で言う口に等しい。口が汚れていてお前は思う」

厳しい口調で草治が問われ、彼は頭を掻いた。草治の態度が気に入らなかったのか鬼姫は更に顔を赤らめて口を開いた。

「おもにこの鏡が私と繋がっているのだが、この鏡は神主と繋がっている。草治、変に呪われたお前がここの神主になった所為でこの鏡も汚れ、結果私の力も激減している」

「それは、俺にはどうしようもないことだろ」

「そうだな。確かにそうだ。だから、誠心誠意を込めて必死に掃除をしる。そうすれば、私がこの土地を征服し終わった後、貴重なポストをお前に宛がってやる。頼りにしているぞ草治」

「征服って何だよ。お前、一応は神様だろ。それと俺は貴重なポストなんていらぬ。俺に憑いてる女の子をどうにかしてくれればいいよ」

草治が言っても、彼の言葉が耳に入らないのか鬼は拳を握りしめ、決意を述べる。

「私は鬼だが神様の資格もある。今の世の中は不条理に満ちている。だから、支配しなおさなくてはならない。その第一歩としてまずは新しい神主を設け、草治を遠ざけ、私のチカラを戻さなくてはならないのだ」

「それは神様の言うことでは無いと思うぞ」

一応現時点の神主がため息まじりに言った。

しばらく神様について語っていた鬼姫だが、眠くなってきたのかいつしか神社の床に寝転んだ。風邪を引いてはいけないということ

草治が彼女を担ぎ、祖父と一緒に神社を離れ家に帰ることにした。源蔵は安心しきった表情で草治に担がれている鬼姫を視ていた。まるで父におぶさる子供の様で。

「麻美が言っていたよ」

呟くように源蔵が言った。草治は怪訝な顔で祖父に視線を向ける。麻美というのは草治の母親だ。彼女は先代の神主ということになるのだろう。

「世の中は、神様にとってどんどん生き難くなっているって。私達のような者がサポートしてあげないといけないと言っていた。」

「そう、俺には関係無いよ。こいつのサポート何て面倒くさいし」素っ気なく、草治が呟く。

「でも、まあ、誰かに頼りにされるのは久しぶりだから、少しは協力してみるよ。もちろん子どもをつくるのではなくて他の方法でね」そう言ってから草治はため息をした。相変わらず暗い淀んだ瞳を祖父にかえす。

「母さんはひと際靈感が強かったみたいだけど、鬼姫のことは知っていたのかな」

「どうだろうな。麻美はこの神社を怖がっていたようだから、何かを感じてたのは確かだ」

20歳になるくらいだろうか、麻美は神社に近付くことを頑固に拒否するようになったのを源蔵は思いだす。「私は、ここに相応しく無いみたい」麻美は逃げるようにそう言っていた。

あれから、およそ20年。赤井神社の神様を背負うことは彼女の息子にとってはどうだろうか。

今日も夢を視る。

桜の下、そこで踊り狂う赤衣着物の少女。

「私は知っていますよ。鬼が目を覚ましたようですね。あの鬼はきつと私とご主人様を引き離そうとするに違いありません。本当に困りました」

少女の声が聞こえてきた。

少年はため息をつく。

「君が俺にとり憑くのを止めれば問題は無くなると思うけど」

「そうはいきません。」

力強い声が響いた。

「私はご主人様に深い深い恨みがあるのです。私はご主人様の幸せな姿なんて見たくないですからです。私は不幸でやる気の無いご主人様が大好きなんです。だからご主人様に彼女が出来るなんて認められません。何が何でも邪魔して見せます」
踊るのを止め、少女が握り拳を固め「えい、えい、おー」と意気込む。

赤井草治が通う聖葉学園はそこその進学校だ。

校門から校舎までのやたら長い道を対照的な黒い制服の少年と赤い制服の少女が歩いて行く。

疲れのためか、草治の顔はいつも以上に暗い。

その隣りで長身の鬼姫が楽しそうに歩いている。鬼姫が学園に行く
と今朝宣言した時は非常に焦った草時だったが、今は頭には大きめのリボンを巻いて角も隠し草治の母がかつて使っていた制服を着こんでどつからどう見ても普通の、むしろ美人の女の子という感じだ。
「サイズもぴったりで以外と似合うな」

「ああ、この制服のことか」

鬼姫が視線を落とし自分の姿を眺める。少し顔が紅い。

「聖葉学園は50年前に設立されてから制服のデザインは変わっていないから助かったな」

男子は黒が基調、女子は赤が基調なので見事に二色が学園の中を動

かしている。制服さえ着ていれば部外者の鬼姫も学園に上手く紛れることができるのだ。

「近頃の学校では変出者が校舎に入らないようにカードで認識登録しないと校舎に入れないというのに。この学園はこんなんで大丈夫かと疑いたくなるな。設備も旧式が多いし」

草治が不平を漏らした。しかしながら草治は聖葉学園の外観は嫌いではなかった。設備は古いが校舎は整っている。西洋風の高級ホテルのような白い校舎は建てられた年月を感じさせない。

「まあ、そのおかげで私もこの学園に遊びに来れたわけだが」
機嫌が良いのか声の調子が軽い。

「良いか、草治。私はこれでも一応は縁結びの神様を目指しているつもりだ。私が学園の女を吟味し、今日の下校時間に候補者たちを体育館倉庫におびき寄せる。お前はどうかやってその子たちを口説くか授業の時間に考えておけ」

「あほか」

「ふふ、確かにアホのような作戦だが、私の眼にハズレは無い。必ずやお前に気のある生徒を見つけてみよう」

「そんな子はいない」

「そんなことはないさ。任せておけ。きっと私に結べない縁は無い」
不敵に鬼姫が笑う。

草治はため息をついた。

「ところで草治はどういう子が好みなんだ？」

そんな学生同士のような質問に草治は少し考え込んだ。

「そうだな。特に、そいうのは。性格が合えば誰でも。というか誰でも縁とつのは繋がるものなのか」

「そういうわけではない。大方、繋がるべき縁というのは決まっているものだ。ただ、聞きたかったただけだ。それに、私にとっては子どもがほしいだけ」

そう言っずんと前に進む。その話を聞いて、草治もいささか

引つかかるものを感じた。

「それなら、例えば、俺のクローンとかはどうなんだ？」

あまり言いたくなかったが、言ってみた。血統が大事だと言うなら問題は無い。それに鬼はくるりと踵を返した。その顔は少しだけ陰がある。

「確かに、それでも問題無いかもしれないが、私は私達は生命の儀式を冒瀆するような行為は認めないからダメだ」

「いや、こつちも何となく言っただけだ。それにクローン技術は公に禁止されている」

鬼が意外にも怒った口調だった所為か少し言い訳のような感じで言った。

と、鬼が足を止めた。何事かと草治が視ると、前方で登校している少女に視線を向けている。

「あの、色黒で金髪の女は誰だ？」

「ああ、天竜寺か。天竜寺妃」

妃は優雅とも呼べる足どりで歩いている。

「嫌な感じの人間だな」

ぼそりとした囁きに草治が驚いて振り向いた時だった。

鬼姫の頭上に白いものが落ちてきた。

叩きつけられたヨーグルトのごとくそれは飛び散っていく。だがヨーグルトは空から降ってこない。空から落ちてくる白いものと言えば、鳥の排出物だ。鬼姫は口をぽかんと開けたまま放心している。

「ばーか、ばーか」

真上からの声に草治が顔をあげると、空に赤い着物の少女が浮かんでいた。今日も夢で視た幽霊少女だ。最近の彼女は夢以外の場所に出現する頻度が高くなっているような気がする。

この少女を鬼姫のチカラで何とかしてもらいたいわけなので、このまま少女を懲らしめてくれると喜ばしい。

白い液体的なものをたらしながら鬼姫はわなわなとふるえていた。

「あの、ちび殺す」

草時の隣りから怒りを抑えた声が響いた時には赤い着物の少女は消えていた。

「私から逃げられると思うなよ」

そう言つて鬼姫が校舎に向かつて走り出すのを草治はひきつった顔で見送った。

周囲から白い視線が草治に突き刺さる。「赤井君が呪いで女の子に衛生的に良くなものを振りまいたわ」などというひそひそ話も聞こえてくる。

「帰りたい」草治は暗澹たる気持ちでため息をついた。

赤井神社の復興計画2

楽しく騒がしいお昼の時間。

草治は食堂の隅でちらりと周囲を見る。草治は未だ今日一日の間に誰とも交流を持っていない。うん、これは不味いね。と一人自嘲する。

「おい、草治何をしている？」

後から声を掛けられて草治は仕方がなく振り向いた。

「何一人でたそがれている」

そこには鬼姫が不機嫌な顔で立っていた。

「本当に大変だったわよ。一応、シャワー室がこの学園にあるって知ってたからプールのとこまで走って頭洗ってからあのチビを捕まえてぼこぼこにしてあげたわ。だから当分は悪さはしないとと思うわでもまあ、あの子を怒らすと厄介だから、少し作戦を変更しなくちゃいけないかもしれないけど」

「へえ、そう」

軽い相槌を打って草治はカレーに手をつけようとした。鬼姫が隣りに座り、草治のスプーンを奪ってカレーを頬張った。鬼姫は草治の昼飯を口に入れてから、眼を見張る。

「こんな辛いものを良く食べるれるな」

「俺はそれほど辛いとは思わないが、激辛らしいぞ」

「草治は変なものが好きなのだな」

鬼姫は涙目になりながら草治のコーヒーを奪い、一気に喉に流し込んだ。

「しかもこのコーヒー無糖かよ」

苦味のある薬を飲んだ子どものような顔で鬼姫は草治を睨んできた。

「コーヒーに激辛カレーって草治はマゾなの？」

大変ご立腹である。草治としてはお気に入り組み合わせなのだが、少し傷つきながら草治は話題を変えることにした。しみじみと鬼姫

の服装に注目する。

「母さんの制服ってまだ残ってたんだな」

「まあ、草治の祖父は思いでを大切にする奴だからな」

そう言っただけで鬼姫は立ち上がった。食堂の中央から水くみ所まで向かう。先ほどは制服を着ていれば鬼姫が浮くことはないと思っていた草治だったが、他の生徒達の流れに入っていく彼女を見てその考えを改めた。鬼姫は背も高く、スタイルも良い。モデルのような鬼姫は周囲の注目の的となっていた。水を汲み、歩きながらコップを煽っているのは御行儀が悪いことだが、鬼姫がそれを行うと何故か絵になっていく。戻ってくる鬼姫を見ながら彼女が部外者だとはれるのは時間の問題だなあと草治は感じた。周りの視線が気にならないのか、クールな表情で草治の隣に座りなおし唐突に言った。

「さて、そろそろ作戦を説明しよう」

「何だいきなり」

草治が怪訝な顔付で尋ねると鬼姫はニンマリと笑った。ポケットからまったく見覚えのない携帯を取り出した。黒猫のストラップが付いている。

「これは、お前のか？」

鬼姫はニヤニヤと笑いながら首を振り、彼女の斜め向かいをピシりと指差した。

「この携帯はお前の知っているあそこの金髪女のものだ」

鬼姫の人さし指は食堂で一番派手な女子の集団を向いている。その集団の中で金髪は数人いるが草治の知っている人物は一人しかいなかった。天竜寺妃。鬼姫が示す先で彼女は女王のような雰囲気を出しながら自慢話を侍従の如く彼女に笑っている生徒に聞かせている。「なんで天竜寺の携帯をお前が持っているんだ？落ちてたのか」

「そんなミスは彼女はしないさ。先ほどの彼女は体育の授業の時に鞆に入ればなしで更衣室に置いてあったから拾ってあげたのさ」
してやったりな表情の鬼姫と食堂からそそくさと立ち去り人通りの少ない廊下で草治は声を顰めながら軽く叩いた。

「それは拾ったのではなく、窃盗だ。すぐに返して来い」

「だから、それが作戦なんだって」

叩かれた所を撫でながら鬼姫が言う。

草治はいつも以上に顔を青くした。

「作戦って何だ？」

「昨日言っただろ？お前に恋人を作るんだよ」

「それは聞いたが、それとこの携帯はどう関係あるんだ？」

「本当に草治は頭が悪いな。だから天竜寺妃とお前をくつつけるんだよ」

胸を張る鬼姫の額を草治は軽くつついた。「アホか」それ以上の言葉が出てこなかった。言いたいことは山ほどある。相手は草治が選んでよいはずではなかったのか。というよりも昨日高校生でそういうのはまだ早いと言ったばかりではないのか。何故よりもよって天竜寺なのか。草治が口をパクパク動かしている鬼姫が口を開いた。「言いたいことは大体予想はつくんだけどね」

申し訳なさそうに笑いながら水を一口。

「私には気の流れが視えるって話はしただろう。流れは全ての事柄を指し示す。つまり人間のその流れを見ればどんな奴なのかってことが大方見当がつく」

それから天竜寺の携帯電話を軽く人差し指で弾いた。

「そんでもってその流れを確認したところ。ここの土地の中では草治とあの娘が非常に相性がいいことが分かった」

自慢気に説明を聞きながら草治はようやく我に帰る。

死人のような濁った眼を三角にして草治は目の前の女に睨みを入れる。

「そもそも俺はお前の考えに賛成したつもりはない」

頑固とした声で反対した。昨日、恋人探しをしろと言われてからも草治は即座に否定した。第一、友達もまともにいない自分に恋人など作れるはずもない。

「それじゃあ、私に任せなさい」

と鬼姫は言ったが、他人の恋路に茶々を入れるやつなど信用できるはずがない。そういうのはキチンと好きな相手が出来てからがいいと思っっているのだ。

姫はむっとした顔を見せるも、草治にとってここは引くことが出来ない。

「あんたの腰の引けた態度だと一生出来ないの。アンタのやり方やダメ。それは私が保証する。こう見えても私は縁結びとしても機能していた」

そんな話は信用できない、草治は鼻で笑った。頑固な草治に思案気に少しだけ眉を顰めた。

「いづれにしろ、ここに携帯がある。これは返さなくちゃならないだろ？」

「それはお前が盗ったものだからお前が返すのが道理だ」

怒った口調の草治にはそれはできないと首を振る。

「今、私が彼女の前に出ていくと色々と厄介なことが起こる」

「何が厄介なんだ」

詰め寄る草治にそれは秘密だがと囁いてきた。

「とにかく私に言われた通りに彼女に携帯を返してみろ。そうすれば彼女と草治の仲は急転していずれは恋い仲に陥ることは間違いない」

自信満々な態度に怒りを通り越して呆れを感じた。草治から陰が薄れたところで鬼姫は急に優しく微笑んだ。

「私はお前を視てきたからな少しはお前のことを知っている。本当はもっと人と関わりたいんだろ？」

初めて見せられた柔らかい表情に草治は更に毒気を抜かれた。そして彼女に言われたことは存外的外れでもない。

「今までは少しだけ草治の周りの運が悪かったただけだ。今からでも少しずつやり直すことはできるさ。今回のほまあ、簡単なりハビリみたいなものだ。とりあえず携帯を返すだけでいいから騙されたと

思ってやってみな」

しばらくの間草治は肩まで伸びた前髪を弄っていたが、
「携帯、返すだけだから」そう言って携帯をふんだくった。

草治が見るかぎり、天竜寺妃は浮いていた。もちろん草治より浮いているわけではないのだが、彼女はいつも一人だ。というよりも人を近づけさせない雰囲気があった。

容姿も勉学も運動も家柄も完璧というだけあってなのか、それとも遺伝子教育者ということが人を遠ざけているのかもしれない。遺伝子教育には多大なお金が掛るため、ほとんど一般家庭からはそれを行う者はいない。さらに遺伝子教育と言っても簡単な操作だけしてもらったような少し裕福な家庭が弄った程度の遺伝子操作が普通だ。天竜寺のような完璧さを持ち合わせているほうが不自然なのだ。そして彼女の性格や言動にもかなりの問題があった。

いつも嘲笑しているかのような笑みを浮かべて、時には明らかに侮蔑したことを平気でのたまう。

そんな人物に好き好んで近づく人間は少ない。遺伝子教育者専用の学校に行けばいいのにと陰口を草治は何回か聞いたこともある。とはいえ、天竜寺の父親の天竜寺財団が非常に強い権力を持っている。結果ごますりのためか天竜寺に媚びへつらう生徒は多い。

彼女の周りには取り巻きがいることが多いため、簡単には携帯を返すことが出来ない。それなら仕方ないあきらめて職員室にでも届けよう、草治はため息をつきながら思った。

しかし、鬼姫はそんな草治の気持ちを見透かすように言う。

「大丈夫よ。約束通り体育館倉庫に彼女を呼んであるから」鬼姫は楽しそうにそう宣言した。

少年の葛藤と少女の疑惑

ありとあらゆる資質は設計図である遺伝子によって決まる。だから血縁というものが大切なのだ。母である麻美は草治にそう言い聞かせた。

「努力しても、設計図に入っていないものは出来ないの。人間は空を飛べないし、海で生きることには出来ない。同じように遺伝子の設計図の中に、幽霊が視える要素を持っていない人には幽霊は視えないの。遺伝子の中に魔法を操る要素が無い人には魔法は操れない。それならば、遺伝子の中にこれらの要素を無理やり付加すれば魔法が使えたり、幽霊が視えるのよ。これはすごいことだと思うわ。でもね、問題はその貴重な遺伝子の設計図がどこにあるかよね。彼らはずっと探し続けてるのよ。私たちの持つ異形の遺伝子を」

麻美は疲れた口調でそう言っていたが、幼い草治には理解できなかった。

ただ、自分の設計図は人見知りで頭の回転が悪くなるように造られているのだろぅなと思ったのだった。

「何してんだ、俺」

放課後の倉庫の扉の前で赤井草治は固まっていた。

鬼姫の作戦に嫌々ながら草治は参加することにした。他人の携帯をいつまでも持っているわけにはいかない。しかしながら、草治には直接学校で渡す勇氣はなかった。本来ならばこっそり下駄箱にでも入れておきたいところだが、彼女の言によると「大丈夫だって。今日の所は直接渡すだけでフラグが建つし。そんな睨みつけるなよ。」

独断でことを進めたのは悪かったよ。でも安心しなさんな。後であの子の下駄箱に体育館倉庫の中で待ってるよ。ハートって文を送っておくから。いや、冗談だって。ちゃんと携帯拾ったので倉庫に来て下さいって書いておくから」そんなことを自信満々に言い残し、どこかに消えてしまった。

そうして放課後になった今、草治は予定通り倉庫にやってきたのだ。気だるそうな表情だが、彼の心臓は様々な思考で早鐘のように脈打っていた。というか頭が真っ白。

（彼女はきちんとした手紙を送ったのだろうか。何か妙に楽しそうだったし、何か好きで的なことを書いてないだろうか。というか放課後に呼び出なんてまるで告白みたいじゃないか。やっぱり帰るうかなあ。でも携帯どうしよう）

色々な不安はあったのだがとりあえず今日は携帯を返すだけでいいと彼女も言っていた、つまりこれはただの親切。とようやく気持ち割りきり、倉庫の扉を開いた。

あまり使われていない倉庫の所為か埃が舞うのがはっきりと見えた。薄暗かったが誰かがいるようには思えない。考えてみれば特に時間を設定されていたわけでもない。

（もしかして鬼姫に遊ばれてただけだったりするかもな）

実は携帯を盗んだというのは嘘で、倉庫に入ったらドッキリとか書いてある可能性もあるのではと考え直し、一寸前まで緊張が嘘のようになんて溶けていく。

埃が収まるのを待ち、中に踏み込む。誰かがいる様子も、何か細工をしている様子もない。倉庫はじめじめとしていて暑苦しい温度である。

（考えてみれば、仮に天竜寺が手紙を見てもここに来るとは考えにくいな）

冷静になつてみるとこんなところに呼び出されて来るような人間はあまりいない。おまけにあの天竜寺なら無視する可能性のほうが高い。そう考えるとホッと胸を撫で下ろしたくなるような気持ちになっ

た時だった。

後ろから差し込んでいた赤い光がスツと抜けた。がっシャン、と鍵を閉める音が暗くなつた部屋に響いた。開けっぱなしにしていたドアが突如閉められたことに気が付き、はつと後を振り向こうとした。しかし、背後から力強く両腕を回され身動きが取れないようにがちりと草治は固められた。

押しつけられた腕からどうしようもない痛みがあつたが、そんなことよりも草治は頭に血が上るのを感じた。

（鬼姫の奴、何がしたいんだ）

イラつく頭の中で草治は理解した。草治を押さえつけている腕は以外にも細かったが、掴まれている腕の血が止まると思えるほど人間離れた握力があつた。こんなことをする奴は、そしてこんなことが出来るのは一人しかない。自分は鬼姫にいいように遊ばれていたのだと。

「遊ぶのもいい加減にしるお。クソ女あ」

草治は首を後に反らせてから持ち前の低い、自分ですら寒気のような声を背後に囁いた。化け物であり、優勢な立場の鬼姫が怯えてくれるとは思わなかったがいらついたら黙っていられないのが彼の性分である。内公的な人間ほど沸点は以外と低い時がある。

しかし、以外にも後ろからは「ひっ」と息を呑む音が漏れ、一瞬だけ腕から力が抜ける。瞬間、草治は弾かれたように身体を捻りながら飛びあがり、右足を引きつける。そして背後の小柄な人影が視界に入る。

（鬼姫にしては小さくないか？）

湧き上がった疑問を振り払い、相手に反応させる暇を与えず草治は至近距離から右ストレートの蹴りを放った。

蹴りを放つてからの小柄な影の動作は素早く、余裕をもつて蹴りを両腕でガードする。それでも草治は蹴りの反動で影から飛びあがるように離れることに成功した。空中で態勢を整え、地面で受け身をとる。埃を舞いあがらせながら床を転がり真横にあつた細長いポー

ルを抜いた。子どもの頃から祖父に剣術を習っていたので多少の心得はあったりもするので獲物が手元にあると妙に自信が湧いてくるようにも思えた。

「てめえ、俺に何の用だ？」

少し強気になりどこかチンピラの如くドスを効かせる。埃も次第に収まりうす暗かった倉庫にも眼が慣れてきたのか眼の前の人物の輪郭が確認できるようになってきた。（鬼姫ではないな）

「何を今さら、白々しいわね」

不機嫌そうな声を聞いて草治は間の抜けた声が喉から出た。

「天竜寺？」

草治の眼の前に立つのは、草治よりも少し背が低いぐらいの毅然とした顔付きの少女だった。

草治はポールを握る手から力を抜いた。しかし天竜寺からただならぬ形相をしている。

「貴方が倉庫に來いって手紙で書いてきたじゃない」

瞳を剣呑の細め、天竜寺妃は草治を睨んできた。とてもじゃないが、落ちていた携帯を返しにもらいに來ましたあという雰囲気は欠片もない。

もしや鬼姫があらぬことを書いたのではという不安が草治の心で膨らむ。つい先ほど背後から襲われたことを考えると、「果たし状的な手紙を入れたのではなからうかすら思えてしまふ。はたまた「オマエノ携帯ヲ盗ンダ。返シテ欲シクバ体育館倉庫ニ來イ」的な脅迫文かもしれない、と草治の顔は青白くなる。

（何が恋愛成就だ。縁結びの神だ。やっぱりあんな得体のしれない奴の言うことなんて聞かなければ良かった。というか手紙の内容を確認しておけば良かった）と草治は悔やむ。

「アンタの携帯が落ちていたのを見てな。ただアンタに返そうと思つてここに呼んだんだ」

咄嗟に鬼姫と打ち合わせした脚本が口から出ていた。今さらどうし

ていいか分からず、半ばやけになってポケットから天竜寺の携帯を取り出した。

「これ、だろ？」

天竜寺に近付こうと乱気な様子であるがその瞳はしっかりと草治を見据えている。

「よく落ちてたのが私の携帯って分かったわねえ」

からかうような口調に草治は内心動揺するも、無然とした表情は崩さない、と言うよりも崩れない。「裏庭で落ちたのを見てな。だからと言ってアンタに声を掛けるのは躊躇われたんだよ」

アンタは目立つから俺みたいのは近づきたいと呟いてから、天竜寺を伺った。相変わらず意地の悪い笑みを浮かべながら口を開く。

「あらあら。私は今日裏庭に行つてないんだけど」

さすがに草治は顔を引きつらせた。「騙されたと思って」と言っていた鬼姫の優しげな顔が浮かぶ。（マジかよ。本当に騙しやがつてもう誰も信じられないや）

「ちよつと待て。本当のことを言つとだな。この携帯は」

そんな草治に対して天竜寺は遮るように言う。

「ふん、分かてるわよ。アンタが盗つたんでしょ」

言いながら、天竜寺は燃えるような傲慢さを瞳から消した。そうして懷に手をつ込んだ。先ほどとは間逆に獲物を見つけた獣のような容赦のない眼差しを向けながら刃渡り20センチくらいのナイフを取り出した。

「さあ、始めましょうよ。互いの行く末を賭けて。古き世の魔物さま。私は『ヤオヨロズ』直属の魔人狩り部隊の妃と申します」

歌うように口ずさみ、表情を歪めた。右手に収めたナイフで真横に空を切った途端刀身に小さな小さな電光が走り青色に染めていく。

（つて、何で盗みだけでナイフを出すんだ？）

草治は尋常でない殺気を受けてパイプに力を込める。

天竜寺は獰猛な殺気を放ちながら態勢を低くした。天竜寺の全身、頭から足先まで薄い青色の光の膜に覆われ、暗い部屋の中で飢えた

獣の如き存在感を放つ。天竜寺の髪から静電気が弾ける音が立ち、それを合図としたのか一直線に草治に向かって突っ込んで行った。霞んでしまうほどに天竜寺の動きは速く、およそ9歩はあった距離が一瞬で縮まる。草治は驚愕しながらも天竜寺の右手に握られたナイフの軌道を先読みして獲物を掲げ受けの型を作る。しかし天竜寺から振られたナイフの蒼い閃光は鉄のパイプを古枝のように両断した。美しい弧を描いていた青光りするナイフは草治の喉元で止まった。

「油断したな。馬鹿め」

天竜寺の嘲笑の言葉と同時に草治の左手に冷たいものが鈍い音を立てて掛けられた。草治は首にナイフを突きたてられているため何が起ったのか確認できない。状況に付いていけずに茫然と立っていると、天竜寺は以外にもあっさりとナイフを離れた。

草治が未だに背筋を伸ばして立っていると天竜寺がにやけながら、左手を掲げた。ジャラつと音を立てて草治の左手も持ちあがる。不思議に思っ腕を見るといつの間にか左手首に手錠がかけられ、黒い鎖で天竜寺の腕の手錠と繋がっていた。

「お前、何がしたいの」

草治が聞くと、キツネのように笑みを深めてから口を開いた。

「これは封魔の手錠。もうお前のチカラは使えないわ」

「おい、意味分からんぞ」

「シラバクレても無駄よ。依然から怪しいと思っていたのよ。アンタの周りで珍妙なことがたくさん起きてるから。何より私のポケットから、携帯を取ったのが証拠よ」

投げ捨ててしまった携帯を一瞥してから言いきった。当の草治は失礼にも何だコイツといった印象を抱いてしまう。黙り込む草治を勝ち誇った顔で眺める。

「私の遺伝子に設計された刻印はね、小さな雷を造ることしか出来ない。それこそちょっと強い静電気くらいなの。でもね、電気を身体中に流して神経を刺激させれば身体能力は格段に上がるわけ。それ

に、特注性のこのナイフに私の電気を与えて振動させれば、鉄も簡単に一刀両断の武器の完成ってわけよ」

見せびらかすように右手に握られた青く放電しているナイフを持ち上げてから話を続けた。

「そんでもって私は学校ではいつも周囲に微弱な地場を張ってるわけ。だから私の身体のおよそ半径1メートルくらいに誰かが近づけば嫌でも気が付いちやうのよ。でも私の胸ポケットに入れていた携帯は私が気が付かない間に抜き取られていた。ってことは私から携帯を盗んだやつは奇妙なチカラがあるって分かるの」

天竜寺の類は草治を捕まえられてよほど嬉しいのか上気して赤く染まっている。と、ここまでの説明を聞いてようやくお互いの誤差に気が付いた。

「言っておくがアンタの携帯を取ったのは俺じゃないぞ」

草治がげんなりとして言うところ今度は天竜寺が呆ける番だった。天竜寺の話から考えると彼女が魔人というものを捕まえようとしているのを推測できる。そして天竜寺が探している魔人というのが鬼姫であることは連動して推測出来る。

「ちよっと、下手な嘘は止めなさいよ。アンタ以外の誰が私のチカラを相殺したって言うのよ。って何ため息付いてんの」天竜寺が怒鳴るような声で草治に詰め寄ってきた。

その時、うす暗かった倉庫に一筋の光が差し込んだ。

「予想の斜め上をいつてるな」突如、倉庫の扉が開き、底抜けに楽しい笑い声が響いた。

「お前ら、本当に最高に愉快的阿呆だ。私の目論見よりも全然良い結果だ」鬼姫は腹を抱えて笑っている。

魔術師の遺伝子

麻美は時折、『神の島』と呼ばれる空飛ぶ大陸の話草治に聞かせた。

「その土地は、かつて偉くて力のある神様が住んでいた土地なの。今では人間たちの手に渡っているけど。その土地は普通の人間には視えない美しい土地らしいわ。でもね、そこで暮らしている人間たちはとても汚い人ばかり。彼らは日々良好な『魔術師の遺伝子』を研究しているわ。彼らは地上でも様々な奇怪な現象を探すために、地上にたくさんの方員を流しているの。だから、草治も気をつけるのよ。彼ら『ヤオヨロズ』に見つからないように」

「おい、これはどういうことなんだ？」

険しい声音で草治は尋ねた。鬼姫は草治と天竜寺となら仲良くやれると言っておきながら事態はその間逆の結果を生んでいる。というよりも鬼姫の代わりに面倒なことに巻き込まれだしていることに気が付き始めていた。別段、鬼姫は草治に嫁を探してあげようという言葉で鵜呑みにしていたわけではないが、利用されるような形でそれを裏切られるのをさすがに傷つくというか腹が立つ。

「いやいや。別に草治を騙したわけじゃないぞ」

草治の険しい表情を見て鬼姫は笑うのを止め、真顔で答える。「波長だけならけっこう相性がいいいんだよ。お前達は」鬼姫は嫌らしい笑みを浮かべた。

「こいつは誰なのよ」

天竜寺は鬼姫を値踏みするような視線を向けている。

「初めまして、新しき世の神の使い。私は古き世に守巢の山で懲伏された鬼の姫。そして守巢に祭られた神」

「何が神よ。ただ人間達から怖がられているだけの存在の癖に。

アンタなんか魔人で十分よ」

天竜寺は瞳を細めた。

「とはいえ、アンタが魔人狩りである私の標的ってことね」

「そうなるわね」鬼姫は頷いた。

「でも、貴方じゃ無理」

「そんなの、やってみないと分からないわ!」

ヒステリックにも聞える天竜寺の声に会話に参加していない草治が驚いてしまう。しかし鬼姫は意にも介さず、右手を持ち上げて細長い銀色の力ギを取り出した。すると天竜寺の顔色が変わる。

「ちよつと、それって私の手錠の力ギじゃない。返しなさいよ。この泥棒」

「泥棒とは心外だな。私はこの土地の神様だから、この土地にある物は全部私の物。それが私がこの土地で大人しくしている替わりに決められた条件」

澄ました顔で嘘か真か飛んでもないことを言う。

「そんなこと知らないわよ。いいから、それを返しなさいよ。じゃないとこの手錠が外せないのよ」

天竜寺からの話を聞いて草治も自分に掛けられた手錠を眺める。いつまでもこんなものをしているわけにはいかない。第一動きにくい。

「とりあえずその鍵は返しくれ。俺も困る」

草治も願いでるが鬼姫はゆっくりと首を振る。

「残念ながらこれを返すわけにはいかない」

「おい、調子に乗るなよ。クソガキ。お前の角引っこ抜かれてえか」

「そ、そうよ。早く返しなさいよ」

草治は我慢出来ずにドスの効いた調子で、天竜寺は草治の声に驚いたのか少し勢いが引いた調子で文句を言う。それを聞いて困ったよ

うに鬼姫は呟いた。

「この鍵を返せば、私はそのヒステリック女に狙われてしまう」
「誰がヒステリック女よ」

「それが何だ。俺は一向に構わない」

「うわ、私の神主兼下僕の癖に最低なことを言うのな」

「言っておくが下僕になつたつもりはないぞ」

まあそれは置いといて、と言って鬼姫が咳払いをする。

「私としてはこの土地で神様を続けたいと思っているの」

「そんなこと言われても、私はアンタを『ヤオヨロズ』の本部に連れて行つて報酬貰いたいんだけど」「ああ、新しい導き手がこんなに貪欲な奴で、世界も可哀そう」

そう言つて鬼姫はよよよと泣きまねをする。

「そんなこと言つてもね、私の他にも大勢魔人狩りはいるのよ。どうせいつか誰かに捕まるんだから今のうちに私に捕まっちゃいなさいよ」

「それは大丈夫。私には考えがある」

得意顔で不敵な笑みを見せた。そして天竜寺に真剣な表情を向けた。

「私は貴方と取引がしたい。それに応じてくれれば、この鍵を返してもいい」

「取引？」

「そう、私にとつても貴方にとつても利になる取引」鬼姫は言う。

「へえどんな条件なのかしら」

「貴方には私の存在を新しい者達から情報を隠すために動いてほしい」

「はああ。そんなの私に利が無いじゃない。それなら私はアンタを捕まえたほうがいいわ」

しかめっ面で天竜寺は言つたが、鬼姫は頭を振る。

「その替わり、私が貴方に私以外の、異形を捕まえる手伝いをする」
鬼姫は少し黙り込んだ。草治には何が何だか分からないが、要は天竜寺にスパイになれと言っているように聞えた。彼にとつてはとに

かく早く手錠を外してほしかったため、特に横やりを入れずに静観を決め込んでいる。

「貴方のチカラはさつき見せてもらった。とても小さな雷を応用して身体のチカラを高めた技術は見事だった。でも、私達異常な存在はそこらの人よりも強い程度じゃ敵わないのは、貴方も分かっているはず。つまり、貴方のチカラじゃ一匹も捕まえることは出来ない。でも私が協力すれば、あるいは」

そこで言葉を止めて、天竜寺を伺う。憮然とした表情を消し彼女は口元を吊り上げた。

「それは、面白そうね」

「それでは取引成立ということだ」

二人は顔を見合わせて狡猾な笑みを浮かべる。

日が沈み込んだ夕刻、二人は街並みを草治と鬼姫は歩いている。来週の花火大会のためか道に沿って提灯が飾られている。所々に巨大な提灯も飾ってある。

「結局、お前は何がしたいんだ？」

錠が外れた手首を回しながら、草治は聞く。

「それは、決まっている。草治のお嫁さんの候補探しを」

「嘘つけ。要はお前を狙っている天竜寺を出し抜きたかったんだろ」
げんなりとした調子で言った。今日一日散々振りまわしてもはや怒るのも面倒だった。鬼姫は角を隠すためか帽子を被っている。

「正直なところ、私も困っている。草治にとり憑いているあのチビが威嚇してくるから草治の嫁を探すのは難しい。ということだ、まずは私達の敵の『ヤオヨロズ』をどうにかする方向にしたわけ」
鬼姫の表情に起伏はなく、本心かどうか分からなかった。

「よく分からないが天竜寺と仲良くするのは難しいと思うぞ」
気位の高そうな彼女の表情を思い出す。

「そうでもないと思うの。私は確信しているの。私を信じるの」

薄い胸を張り、自己主張するが草治はうんざりして口を開いた。

「どっかの誰かさんを信じて俺は今日酷い目に遭ったけどな」

「失敗は誰でもあることなの。気にしてはいけない。下手な鉄砲も数撃てば当たる。草治は私の言うことを聞いていればいいの」

「人ごとだと思つて随分と無茶なこと言うな」

「ぶつちやけ、草治がどうなるうと私には構わないの」

「お前なあ」

と疲れたように鬼姫を見ると、彼女は以外にも真剣な表情で草治を見ていた。

「正直な話、私にとって草治が不幸になろうが幸せになろうが心の底からどうでもいいと思える心のつくりを持っているの。でも、貴方がいつまでも私の神主でいると本当に困るのは事実。それは貴方も私も同じ。だから、明日から必死にアプローチしていくことを勧めるわ」

「アプローチつて天竜寺のことか。俺の彼女作りは終わったのだろ」
手錠を外す時、鬼姫は異形の居場所を教えるから神社に来ることを伝えていたのを思い出した。

「いずれにしろ、草治はもっと人と接するべき。そうしないといつまでたつても結婚できない」

高校生で結婚のことを言われてもなあと草治は思った。社交性が無いのは事実だ。

まばらではあるが屋台も並び、心なしか人通りも多いように草治には思えた。

「天竜寺のグループにお前は狙われてるんだろ？下手したら、仲間にお前のことを報告してるんじゃないのか？」

「それはない。彼女達の組織は、基本的に個人プレー。最初に異形を捕まえた者に報酬が渡されるの。だから誰もが、他人を出し抜くことに必死なの」

へえと草治は簡単に相槌を打つ。

帰ったらすぐに寝ようとぼんやりと思った。

今日も夢を観た。草治は真赤な桜が散る樹の下で腰を下ろしている。この日も少女は桜に塗れながら踊っている。

「ねえ、大変なことになったりしましたよね。変人達に振りまわされて大変ですよね？」

はしゃいだ様子で少女は聞いてくる。

「もっと大変なことにして見せますからって本当は言いたいのですけど残念なことに、あの無粋な鬼が私の邪魔をするんです。おかげで最近の私は直接的に貴方を使って遊ぶことが出来なくなっているんです」

少しだけ悲しそうな声を出した。それも僅かのことですぐに元気な声が届いた。

「でも、安心して下さいね。私、頑張りますから。頑張つて貴方に繋がる赤い糸も貴方を結ぶ縁も全部ちゃん切つてから、貴方に関わる全てのモノの運命を歪めて纏れさせて不幸のどん底に落として見せますから」

幼き少女は健気さも感じさせながら言いきつた。そんなこと頼んでないというか止めてくれ、と草治はため息混じりに言おうとしたが声が出なかった。そして彼の腹に重たい何かが降ってきたような錯覚を覚え、周囲の景色が霞む。意識が遠のき、

「いい加減、起きなさいよ」

不機嫌な声を聞いて草治は眼を覚ました。瞼を擦り、見上げると知っている顔があつた。

「天竜、寺？」

眼の前で顔を顰める少女を見て草治は呟く。

「ほら、早く着替えて用意しなさいよ」

良く見ると腹を踏まれている。困惑している草治を見て天竜寺はすぐに足をどかし、睨むような感じで草治を見下ろす。

「この子から聞いているでしょ？今日は異形を捕まえに行くつて」

天竜寺は横に視線を向ける。そこには鬼姫がこちらを寝むような顔

でうつらうつらとしている。

「俺も行くのか？」

「人では多いほうがいいってこの子が言ってたのよ。早くしてよね」
そう言い残し、天竜寺は部屋から出ていった。枕元にあった携帯を確認すると朝の4時前。いくらなんでも早すぎだと草治は呆れた。鬼姫を見ると立ちながら眼を閉じている。草治は起きあがり、鬼姫の角を引っ張った。

「？」鬼姫がビクリと身体を震わせた。

「何で、俺までお前達の手伝いしなけりやならんのだ」

「それは昨日言ったはず。共同作業はお互いの心を近づける凄いチャンスなの。あと、角を掴むのは反則」

鬼姫は草治の腕を引っ掻きだした。さすがは鬼と言うべきかなかなかのキレ味である。草治は手を引っ込めた。

「まあ、今日は学校がないからな。少しくらいなら手伝ってやらないでもない」

草治は髪を弄りながらつまらなそうに言った。とはいえ、草治としては悪い気はしなかった。鬼姫が主張するアプローチはともかく、考えてみれば学校でも周りから怖がられ、グループ活動なんてまともに出来たことはないためちよつとだけ心が弾んでいる。

「まったく素直じゃない男」

可哀そうなものを見るような視線を送りながら鬼姫は言った。

「別に、嬉しくなんかないぞ」

「はいはい」

「それよりも、今日は変な夢というかとり憑かれてる女の子の夢を見たんだけどあまりこう、疲れた感じがしないんだよね」

と、草治は肩に掛る髪を撫でながら強引に話題を変えた。すると鬼姫もからかうような雰囲気を出し瞳を細めた。

「草治に寄生しているチビはいつもお前から生気を奪っているの。今は私が牽制してるから草治も心なしか良い感じになってるわ。でも、これも長くは続かない。だから、」そこで鬼姫は言葉を区切っ

た。
「早く子供を作れ」

ヤオヨロズのお仕事

早朝、と言うこともあるが何より山の中で人は誰もいない。樹の根っこが地面に張って出ていて足場が悪いことこの上ないが、草治は赤井神社の裏山を歩いていった。標高が高い山というわけでもないのだが、霧が立ち込め視界が悪い。

彼の横では天竜寺妃も憮然とした表情で歩いている。二人とも息が荒く、草治に至ってはぐったりとした表情で歩いている。

鬼姫曰く、この裏山の井戸の前に参拝に来る猫が異形のものだと言いつ張った。それを聞いて天竜寺と二人で井戸の近くで張り込み、しばらくして猫がやってきたのだ。

二人がかりでそれを捕まえようとしたが予想以上に素早く裏山に逃げ込んだのを搜索している。

「小さい時から爺ちゃんとの裏山に上ってはきのこ取ったり遊んだりしてたわけよ。だからけっこう方向感覚もいい方だと思うんだが」

「そう、それならここはどこか分かるのね」

「いや、それが全く分かん。どっちに赤井神社があるのかすら使えないわね」

天竜寺はそう言っ山を見渡す。草治も同じようにするが、どこを見ても木々が生い茂っている。空もいつの間にか曇りがちな天気になり太陽を指針にすることも出来ない。

「これは、所謂化かされたってやつなのかしら」

天竜寺が汗を拭う。

「狸や狐じゃなくて猫に化かされたとでも？」

「魔物に関われば何があっても可笑しくないのよ」

諭すように天竜寺が言うが、その顔には余裕がない。彼女の能力は昨日聞いたのだが、今のような状況では役に立つとは思えない。このまま山の中で餓死したら嫌だなあと草治が考えていると、「いた

！」天竜寺が大声で言い、走り出した。慌てて草治も天竜寺の後を追う。霧の奥にどこにでもいそうな茶色の毛の色の猫が走っているのが見えた。

「お前、昨日みたいな感じでアレ捕まえるよ。何か身体能力高めるとか言ってただろお」

隣に向かって怒鳴り声を上げる。彼の横では天竜寺もさすがに息を切らしている。

「私のチカラは短時間しか使えないのよ。それに、あの猫完全に遊んでるわよ。ほら、今もこっち見た。何かあの猫笑ってない？」

天竜寺が怒鳴るが、草治の視力はそこまでいい方ではないので猫が笑っているかあ分からなかったが、確かに口元を吊り上げているような気はした。やはり遊ばれている。そう思うとこうして息を切らせて走るのが馬鹿らしくなってきた。

霧の中に猫が消える。二人とも走るのを止めた。草治はぜえぜえとその場に膝をついた。かれこれ二時間は今ののように猫に遊ばれているのだ。正直なところ嫌になる。頼みの綱の魔術師とやらの天竜寺はチカラを使う気が無いらしく今まで石を投げたりと普通の策を実行している。

どうしても届かない目標というのを眼の前にと人間誰しも諦めたくなるものだが、霧が濃い所為で諦めるにも帰り方が分からない。おそらくあの猫を捕まえるまでここから出られないのだろうと思うと泣きたくなるほどだ。

そんな状況でも天竜寺の瞳に諦めはなかった。思案するように黙り込んでいる。感心するような呆れるような視線を向ける。するとその視線に天竜寺が気が付き、草治を睨んできた。

「相変わらず、地上の人間はダメね。これだけの運動でへばるなんて」

侮蔑するようなことを言った。これでこそ天竜寺妃、性格の悪さは学園一位の噂は伊達ではない。とはいえ、今の天竜寺の発言は草治には違和感があった。呼吸も整ってきたこともあり草治は聞いた。

「地上の人間って、お前はどこに住んでるんだよ」

「ヘンテコな島の上よ」

鼻を鳴らしてそっぽを向く。猫を掴める算段が付かず相当機嫌が悪い様子だ。

「ところで、『ヤオヨロズ』ってどういう組織なんだ」

草治は特に返答を期待したわけではないが、以外にも天竜寺は話してくれた。

「『魔術師の遺伝子』って知ってる？」

「ああ、知ってるよ。確か昔の学者さんが不思議な形質を生みだす遺伝子を見つけたって一時期世界中が盛り上がった話だろ。でも、デマだったって聞いたけど」

「そうよ。公にはその説はデマダッタってことになったわ。そういうことにしたの『ヤオヨロズ』が。第六感に関するチカラを人間達に知らしめることは神が決めた最大の禁忌。当時は『ヤオヨロズ』なんて呼称はなくて一体の魔人が人間達から奇跡を遠ざける仕事をしていただけだったらしいわ。長い年月をいつまでもずっと一人で奇跡を管理し続けたその魔人は疲れを感じていたと言っわ。だから魔人は科学的に奇跡が解き明かされたことを知り人間達に己の職務を引き継がせることを告げた。魔人は研究者達に住んでいた奇跡に包まれた島も船も与えて眠りに付いた。それを引き継いだ人間達が私達『ヤオヨロズ』」

ここで天竜寺は話を止めた。

「へえ。でも何でお前達は魔人を捕まえようとしているんだ？」

「そんなの、魔人がいなければ奇跡も広まらなくなるでしょ？」

そんなことも分らないの？と天竜寺が言う。

「いやいや、それだと魔人が可哀そうだろ？」

強引な話で草治が驚いて声を上げる。

「可哀そうって偽善じゃ、世界は回らないの。それに島に連れてった魔人にはかなりの好待遇が約束されてるらしいわ」

「いや、それなら話合えば、」

と、草治を遮るように電子音が鳴る。天竜寺は携帯が鳴っていることに気が付き、携帯をポケットから出した。携帯を開くと、草治のほうにそれを寄こしてきた。着信登録は「根暗」となっている。

「そっちの様子はどう？」

通話ボタンを押すと鬼姫のか細い声が聞えた。携帯を持っていない鬼姫は今草治の携帯を持っている。つまり根暗は草治のことのようだ。

「全然、ダメ。俺達じゃ、あの猫捕まえられる」

とりあえず登録のことは置いといて現状を報告する。

「そう。それじゃああの女はどんな感じ？」

「天竜寺か？かなり不機嫌みたいだぞ」

「折角二人つきりにしたのに進展もなし、草治は男の風上にも置いておけないな」

携帯の向こうでわざとらしくため息を吐く。

「おい、そんなことはいいから俺達はこれからどすればいいかだけを言え」

身体中が重いこともあり、いつもよりも短気になっている草治は脅すような低い声を出す。しかし携帯の向こうでは怯えた様子はない。「今回の男女二人っきりのハイキング大作戦はどうやら効果がないことが判明した。よって私も少し手伝うことにするよ」そう言って携帯が切られた。

「あの鬼っ子、何か言ってた？」少し期待を込めた様子で天竜寺が聞いていた。

「何か私も手伝うとか言ってたぞ」

そう言って携帯を返す。それから立ちあがった。少し休んだだけで未だに身体は重かったが。

「ねえ、あれ何かしら」

天竜寺が草治の後を指差した。つられるように草治も振り向くと極少数だが蛍のような金色の小さな光が飛んでいた。少し前に草治は

それを見たことがあった。（鬼姫の光だな）

霧の奥からいくつもいくつも螢が現れる。光は草治達の周りを踊るように散らばる。そして光は霧と混ざり合っていく。最後には光も霧も無散していき、燦々とした太陽の光が注ぎ出した。

茫然と突っ立っている草治の視線の先で、消えていく霧の中から猫の姿が浮き上がる。猫は金色の光に囲まれていたが、勇敢にも毛を逆立てて威嚇している。

草治の近くで、バチリと静電気が弾ける音がした。草治が首を動かすと横で天竜寺が凄惨な笑みを見せた。その瞬間、天竜寺妃は青い微弱な輝きを残してこちらに気が付かない猫にむかって駆け出した。足場の悪い地面をもっともせず瞬く間に二〇メートルはある距離を天竜寺は縮める。天竜寺の跳躍は地面を滑るように滑らかで思わず草治は見とれてしまう。猫と天竜寺との距離がなくなり、天竜寺は右手を猫に叩きつける。

「ぐへえ」と猫からおっさんのような声が吐きだされたが、それに動揺することなく天竜寺はどこかで見たことがある黒い手錠を猫の首に掛けた。

それを見て草治も天竜寺の元に向かう。ようやく終わったのかと、意味もなくどっこいしょと言って進む。霧が晴れ、何だかんだで遠くに守巢神社の本殿も見えた。そこまで遠くに行っていないことが分かり草治は安心した。

「女の子が隣に居たのだからもつと根性を見せるべきだったと思う」後ろから草治と同じくらいの少女がため息を吐いてきた。鬼姫がしかめっ面で睨んでくる。

「実は近くで待機してた」

聞いてもないのにそんなことを言う。偉いでしょと鬼姫は胸を張る。「そんなことよりも駆けっこは、得意じゃないから疲れたな。いい運動にはなっただけ」

「私が手を貸してあげたと言うのに、随分な態度ね。ムカつく」鬼姫が草治の背中にのしかかってきた。草治はよろめきながらも鬼

姫を引き離そうとする。

天竜寺のどこまで行くころには鬼姫を引き離すことに草治は成功する。天竜寺も捕えた猫を引きずりながら草治達に向かつてきた。今までにないくらい頬を上気させ、純粹に嬉しそうな笑みを天竜寺は湛えている。

「ねえ、ほら見て、この猫、実は狸だった」

天竜寺は散歩で言うこと聞かない犬を無理やり引つ張る如き勢いで鎖を引く。鎖の先で仰向けに寝転がった狸が胡乱気な瞳をこちらに向けてから口を開いた。

「おいおい、これは何の冗談ですかい鬼姫様」

可愛らしい外見とは裏腹に渋い声が狸から発せられた。狸は後ろ脚で立ち上がる。前足を胸の前で組み説教するように草治達を見上げる。

「お前達もさあ、俺様が誰か分かつてるわけ？調子乗るなよガキども。早くこの手錠取れ馬鹿」

偉そうな態度の狸を草治達は見下ろす。不細工な狸だなあという感想を草治は抱くが、鬼姫は何を思ってたか狸の頭を撫で出した。

「久しぶり、奈菜霧」とやさしい声音で言った。奈菜霧と呼ばれた狸は改まった調子で頭を下げる。「ええ、お久しぶりです鬼姫様。鬼姫様が眠りに着いてからもほぼ毎日、健気に赤井神社に参拝していた奈菜霧です。それよりも、この錠を外して下さいよ。これの所為で気分が悪いのです」

礼儀正しい紳士のように笑み、毛深い前足で首に掛った錠をポンポンと叩く。しかし鬼姫は悲しそうな表情を浮かべて首を振る。

「それは出来ない相談ね」

「な、何故ですか。この人間達はおそらく最近私達神を誘拐している不遜な者達ですよ。このままでは私もこいつらに連れ去られて何をされるか分かったものじゃありません」

奈菜霧は天竜寺を憎らしげに指差した。鬼姫は優しげな眼差しで奈菜霧を見つめる。

「私も身が裂けるほど辛いけど辛い。でも、私の替わりに貴方が新しい管理者の元に引き渡すことで、私の身の安全が保障される。だから私のために大人しく掴まってほしいの。一生の頼みを言わせてもらう」

かなり無関係の草治が聞いても自分本位なことを鬼姫は言った。それを聞いて狸も怒った。

「自身の保身のために神としての誇りを捨てるのですか」

強い口調で奈菜霧が言う。鬼姫は狸の頭を撫でるのを止め替わりに頭を鷲頭かみしてギリギリと力を込める。その瞳が紅く染まるのを草治は見た。

「折角私が出出に出てるのにいい度胸だな。このまま中身の少ない頭を握り潰したい気分」

「あ、あの鬼姫様、調子に乗ってすいません。それと痛いです」

「ぶつちやけ赤井の神社を復興して再び神としてこの土地に居られるなら神としての誇りなんてどうでもいいの。そんでもってお前のような狸もどきがどうなるうと、私には関係ないこと」

ついさっきまで身が裂けるほど辛いとか言っていた奴の身代わりの早さに草治は舌を巻く。よほど怖いのか狸は硬直しながら鬼姫を見る。

「それと、これだけは覚えててほしい。もしも私のことを誰かにバラシタラお前がどこに居ようと必ず喰いに行く。私は人間も喰うけど狸もけっこう喰ったほうだ」

もはや狸は涙目になりながら何度も頷いている。鬼姫は狸を離す。すると天竜寺も満足げに狸を引きずり出した。

「そういうことで、こいつ連れてくわね」そういつて天竜寺は山を降り出した。草治も何だか気のどくなってきた。

「あの狸、お前のとこに毎日参拝してたと言ってたし。俺も何回か見たことあるぞ」

「別に狸が一匹来なくなってもこの神社は困らない」

「そうじゃなくて、あの狸が可哀そうと言いたいのだが」

「そうでもない。アレはずっと人間達から隠れてために一人で暮らしてた。それよりも向こうで気楽に暮らすほうがきつとアレにとつてもいいはずな。絶対、そうだな。それにここに居てはアレの縁はずつと繋がらない」

鬼姫は言い聞かせる様に言った。ここで草治は天竜寺が捕まえたモノは好待遇で接待しているという話を思い出した。

「よく分からんが、一応はあの狸のことも考えてたんだな」

「失礼なことを言わないでほしい。基本的に私は草治以外に対しては神として幸せになってほしいと願っているのだよ」

「何で俺以外何だよ。そんなに俺のこと嫌いか？」

「別に嫌いとかじゃないの。単にどうでもいいだけ」

それだけ言つて鬼姫も山を下りていく。「よく分からんな」残された草治は呟いた。

天竜寺財団

狸の奈菜霧を捕まえてから、数日が経った。それから毎日天竜寺は赤井神社に顔を出すようになった。草治はまた変なものを探すのを手伝わされるのかと思ったが、そうではないらしい。神社に来ては鬼姫と、今度はどこに異形が居るのかと聞いては勝手にどこかに行つては帰ってくる。そして今までの収穫はゼロ、らしい。見つけてもすぐに逃げられてしまっているようだ。そして鬼姫も面倒なのか奈菜霧以降手伝うことをしていない。草治にとってここ数日の忙しさが嘘のようにのんびりとした日々を送っている。

幸い、補習期間も終わり祖父も出かけている。特にすることもなく草治は今日もごろごろと床に寝転がる。

「たまには外に出たほうがいいと思うぞ。まさにダメ人間だな」
鬼姫が草治のポータブルゲームを動かしながら言った。

「俺はダメ人間じゃないぞ。学生として必要な勉強は毎日きちんとこなしている。ただ昼間はどうしても動く元気が出ないだけ。俺って夜型だから」

「そうじゃなくて外に出て身体を動かせと言っているのだが」

「それも大丈夫。少しは鍛えてるから」

基本的に草治は祖父との稽古以外で動くことはない。その替わり祖父が居れば修行だと言つて裏山に登つて色々やらされたりする。

「とうか、お前なんて勉強もしないで一日中家でごろごろしているだけだろ」

「私はこう見えて忙しいのだよ。頑張つて草治とあの女の距離を縮める作戦を考えている途中なの。でも中々良い案が浮かばないから最近の人間の嗜好を深く理解するためにこうして恋愛ゲームをしているの」

「言つておくがそのゲームかなり古い奴だぞ。それこそ爺ちゃんの若い時に出たぐらいだぞ」

人の思考に関しては詳しい神様も現代機器には疎いらしく、呆けた顔をした。

玄関のドアが勝手に開けられ家の中にズカズカと入ってくる足音が聞えてきた。居間のドアが開かれ、天竜寺が入ってきた。

「今日も一匹見つけたわ」

弾んだ声を天竜寺が出した。学校では見せたことがないであろう、笑みを湛えて草治は不思議な気持ちになった。学校では成績も毎回トップで体育の授業だろうが音楽の授業だろうが誰よりも頭一つ分抜き出た結果を出しても特に喜ばず周りを馬鹿にしたことしか言わないことを草治は聞いていた。それが今は子どものような邪気のない笑みを浮かべている。学校での賞賛などよりも彼女にとって異形を捕まえることが大切であるようだった。

「ねえ、聞いてよ。この子の言った通り千曲橋のどこ地蔵に手錠掛けようとしたら狸になったわ。しかもその狸つてば私に捕まった後に離してくれって泣いて謝るのよ。本当に面白かったわ。逃げられたけど」

天竜寺が草治の横に座り話しかけてきた。その様子は子どもがか弱い動物を苛めて遊んだ出来事を報告するようでもある。今日捕まった狸が可哀そうな気もするが、鬼姫曰く捕まったほうが幸せとのことなので黙っておく。天竜寺の学園とは全く違うこのノリにももう慣れた。それよりも草治は気になったことがあり鬼姫に向けて聞いてみた。

「また、狸か。ここらにはそんなに狸が多いのか」

「確かにどこでも狐や狸の異形が化けているのは多いね。でも他にもいろんな異形がいるよ」

「ふーん。以外にも妖怪だらけだな」

「昔から八百万の神と言う。つまりいくらでも異形はいるの。でも大抵は化けていたり、眠ったり、視えなかったりで人間達が気がつくことはまずないの。ちなみに化けるチカラのある狸や狐はとても弱い部類の異形」

それを聞いて草治は不思議な感慨を受けた。

「そう言えば、天竜寺は狸一匹でどのくらいの報酬を貰えるんだ？」

「そうねえ。こっちで考えれば家が三件は建てられるくらいかしら」予想以上の値段だ、と草治は呆れる。高校生の草治はよく知らないが今の御時世家を建てるには土地が非常に少ないためほとんど家を建てるための費用が上がっていると聞いている。少なくとも高校生が持つべき額ではない。

「そうだ、今日はせっかくだし貴方達に何か奢ってあげるわよ」天竜寺が言った途端、鬼姫が食いついた。

「はい。焼き肉が食べたい」

鬼姫は本当に良く食べる。少なくとも草治の三倍は食べるのだ。おかげで赤井家の財政に悪雲が掛ってきている。

「赤井もそれでいい？」

草治がうらみがましい眼で鬼姫を見ていると天竜寺が聞いてきた。特に断る理由もない。というよりも、凄く行きたい。しかしながら今はもう夜遅い。

「お前のほうはいいのか？もう、夜の九時だけど、一応は天竜寺財閥の娘なんだろ？門限とか無いのか？」

何となく聞いてみた。すると天竜寺は笑みを消した。

「別に、その設定はカモフラージュよ。一応、娘ってことになってるだけ。現に私は一人暮らしよ」少し不機嫌な声だった。草治はもう少し聞いてみたくなったが他人の家庭事情に首を突っ込むのは良くないと考え直した。

「それで行くの？行かないの？」

「いや、別にどっちでも」

「そう、それならすぐに支度して」

天竜寺財団総帥には七人の子どもがいる。そのうちの七人全員が

『ヤオヨロズ』と呼ばれる組織で遺伝子教育を受けた者達であり、
「魔術師の遺伝子」を所有している。彼らに血の繋がりは無い。一
応は養子ということになっている。ところがその全員天竜寺財団総
帥の天竜寺明久を父親と見ている者はいない。何故なら彼らの本当
の姿は天竜寺明久をリーダーとした「魔物狩り」の構成員だからで
ある。むしろ彼らはお互いを同じ職場の人間と見なし、仲良しこよ
しを装いながらも互いを出し抜くことを計っている。

そしてその一人で天竜寺家次男、天竜寺円治は天竜寺家の内も外
も城のような自宅の食堂で表向き妹とされている天竜寺澪莉と食事
を取っていた。

円治は短めの金色の髪を逆立て紺色のスーツでワイシャツを胸元
ではだけて着崩している姿はどこぞのホストのようでもある。一方、
妹である澪莉は長い赤い髪に白色のドレスを着て気品に満ちている。
ワインに口を付けてから澪莉が口を開いた。

「聞きました？ 妃が昨日も魔物を捕まえたらしいですよ」

「ああ。聞いたよ。何でも化ける狸らしいじゃないか。随分と下ら
ないモノを捕まえたものだね」

「ええ。無能なあの子にはお似合いじゃないですか」

クスクスと澪莉は上品に笑う。

「でも妙だねえ。一匹も魔物を捕まえられなかった妃が突然魔物を
捕まえ出すなんて。しかもその狸達は僕達の捜査リストに載ってな
かったそうじゃないか」

「ええ。そうです。ですから私も気になって調べてみました。そ
したら面白いことが分かりました」そう言うってから焦らすように再
びワインに口を付ける。その様子を円治は微笑みながらも隙のない
目付きで伺う。

「何が分かったんだい？」

円治が尋ねると澪莉はグラスをそっと置く。さも純真そうな笑みを
浮かべる。しかし円治はこの女が兄弟の中で一番意地汚いと思っ
ている。

「妃ったら近頃、赤井神社に通っているらしいの」

「赤井神社というと、曰くつき付きの場所だったね。確か、その神社の跡取りの赤井草治とか言う子どもが僕達のリストに載っていたよね。何でも彼の近くだとポルターガイストが起こるとか」

「ええ、そうです。でも調査によると赤井草治は白。少なくとも魔術的要因はないとのことですよ。しかしながら近頃身元不明の変わった少女が赤井神社にいるらしいですよ」

「ふむ、なるほど気になるね」

円治が下唇を舌で軽く舐め、蛇の如く瞳を細めた。

「分かった僕が調べてくるよ。もしかしたら妃は僕たち兄弟に黙ってずるをしているかもしれないからね」

そう言っで円治が立ち上がる。さも、優しい笑みを浮かべて。

天竜寺家の兄妹

「花火大会に行きましょうよ」

天竜寺妃は赤井神社に来るなりそんなことを言った。心なしか今日もなかなか機嫌が良いように思える。

「おお、それは面白そうないイベントね。ぜひ行ってみたいな」

鬼姫もゲームから眼を離し、賛成する。

「赤井は？」

草治はいつかの焼き肉屋の時も同じような流れだったのを思い出した。

「別にいいぞ」前髪を弄りながら答える。正直なところ凄く行きたくないのだ。

「そう言えば、押し入れに浴衣があった」

鬼姫はそう言っただけで居間から出ていった。

「へえ浴衣もいいわねえ。私もどつかで買おうかしら」

そんなことを呟くのを聞いて金持ちは違うと感心する。

「赤井は何か着ないの？」

「ああ、着ないな」

同世代の女の子に面と向かって普通に接する機会がほとんどなかったため片言で返事をしてしまう。いつだかの様に緊迫した状況や頭に血が上った状態ならもつと舌が回るのに、と思いながら妃との沈黙を息苦しく思った。いつもなら鬼姫が助け舟を出してくれるのだと、カランという呼び鈴の音が響いた。

「このぼろ神社に人が尋ねてくるのは珍しいな」

草治は雑多な物で埋まった場所を歩く。

玄関にある黒ぶちの時計は午前9時を差している。花火大会が始まるのは午後の5時からでありそれまでどのように時間を潰そうかとチラリと考えた。

聞きたいことや、やらなくてはいけないことがあるならばともく、

意味もなく他者である妃と一緒にいるのは草治にとっては間が持たない。今も客が来たことでほっとしている自分に気が付く。こんなんじゃないダメだなあとと思うのだが致し方ない。

がちやり、草治がノブに触る前に勝手に回った。扉が開き一人の青年が現れた。金髪で長身のその男は柔らかい笑みを向けてきた。

「突然訪れて失礼。僕は天竜寺円治。実は妹がここに居るって聞いてね」

草治とは違う通りの良い優しそうな声で名乗った。天竜寺の妹と言ったその男は色白で一見本当に似ているところがない。しかし遺伝子教育によつて髪の色も肌の色も変えらる今日に於いてそのような家庭もなくはないのは確かであるが。

「ええと、妃さんですか。すぐに呼んできます」

「いや、それはどうでもいいんだ。今日は君に少し聞きたいことがあるんだよ。赤井君」

天竜寺を呼ぼうとした草治を円治は制した。怪訝な顔をする草治に微笑みながら続ける。

「あの妃と仲良くなる男の子ってのがどんな風なのか気になってね。何でも頻繁に君の家を訪れているらしいじゃないか」

「いや、あの」

草治は首をぶんぶん振った。つまるところ妹に悪い虫が付いていないか確認しに来たのだらう。そう考えるとあまり良い気分はしない。

赤井草治はぼろ神社の家系にして祖父の大学教授としての安月給で凌いでいるとこの根暗息子。一方で天竜寺妃は日本でも屈指の天竜寺財団のお嬢様である。普通に考えれば友達としても釣り合うわけがない。そんな男のところへ妹が通っていると知ってどのように感じるかは想像に難くない。

別段草治自身はやましいことを考えているわけではないが、鬼姫は草治と妃をくっ付けたいと言ってるわけで。（よくよく考えれば、家柄的にも無理だろ）

「少しだけ君のことを調べたんだ。君は祖父と二人暮らしのようだね。でも先週から祖父は出張で出かけている。つまり妃がここに来れば二人つきりなわけだ」

予想道理というか、円治は詰め寄るように言う。表情も僅かに険しくなったのを草治は感じた。

「いえ、あの、別に変なことをしているわけじゃないです。ただ、その、成績優秀な天竜寺さんに勉強、そう勉強を教えてもらおうと思っただんです」

「二人つきりで勉強会ねえ」慌てて言った草治を見て円治は笑顔を消す。

円治の様子を見てどうやら鬼姫のことは内緒なのだろうということを探し、彼女のことを避けるための言い訳を考えようとしたがなかなか上手くいかない。鬼姫からはとにかく彼女の存在を黙っていることを命じられている。

表情の変化に乏しい草治の顔も引きつる。すると円治が悪戯っ子を思わせる笑みを浮かべる。

「はは。冗談だよ。別に君と妃との関係を疑っているわけじゃないよ」怖かったかい？と楽しそうに笑う円治を見て、草治もほっと息を吐く。

円治はそんな草治を優しく瞳で観察しながらその口を開く。

「いやいや、正直なところ心配してたんだよ。妃は今まで自分から誰かと関わって行くことがなかったから。それにしても、君のような暗い子が妃と仲良くなるなんて以外だなあ」

「まあ、そうですね」

相槌を打つ。実際のところは妃とそこまで仲良くはない、とは言えない。しかしながら、妃の兄から見ても草治と妃のペアは以外らしい。やっぱり鬼姫の眼は節穴じゃないのかと疑いたくなる。

「少し興味が出てきたから家の中に上がっていいかな」

「は？別に構いませんけど」

草治が許可すると円治は床に上がり、草治の前に出て進みだした。

「おい。妃」

あたかも自分の家の如く進む円治は大声で妃を呼ぶ。おいてかれなように草治も歩き出すと、居間から妃が顔を出した。その時の表情は、草治が初めて見る彼女の顔だった。

「やあ、妃元氣かい」

妃は何も言わず、ただ頭を下げて挨拶をした。さきほどまでは笑みを浮かべていた顔が明らかに、固まっている。顔を上げてからも妃は兄に目を合わせずにむしろ伏せるように下を見ている。そして何より、彼女の瞳から生氣が抜けている。

草治が驚いていると、円治がこちらに振り向いてきた。

「赤井君、何か飲み物でも持ってきててれないかな？喉が乾いてしまつて」

草治は頷き、台所の冷蔵庫で冷やしてあった茶を取り出し、持つていくと兄妹は居間で対面式で向かい合っている。兄はとてもにこやかだが、妹の方は人形のような虚ろな視線を眼の前の卓袱台に向いている。とてもじゃないが、仲の良い兄妹には視えない。

ひとまず二人に茶を差し出し、自分は下がったほうがいいのかと空気を読んで下がろうとした。円治は草治は笑顔を向けてきた。

「驚いたかい？」

「は？」

何のことか分からずに呆けた声を出した。

「妃のことだよ」

円治に言われて草治は妃を見つめる。話題に出された妃は反応すら示さない。

「学園だと、妃はさも高飛車でクソ生意気な態度を取っているんだろ？でも、僕達家族の前になると人形のように寡黙になっちゃうんだよ。どうしてか分かるかい？」

「家での礼儀作法とかが厳しいんですか？」

聞かれた草治は思いついたことを言った。中流家庭の金持ちに対する偏見かもしれないが。円治は苦笑する。

「ウチだと、礼儀作法とかは合っていないようなものさ。大事なことはね、」円治は口元を歪めた。そして妃を指差して言う。

「コレが欠陥品のクズだからなんですよ」

そう言ってから先ほどまでの笑顔が嘘のように円治の顔には残忍な笑みに変わっている。嘲笑を受ける妃も普段の学校での顔とは同一人物とは思えないほど反応がない。

「はあ、それでどうしてまた欠陥品なんですか？妃さんは学園ではほぼ全てに於いてトップです」

草治は低い声にならないように気を付ける。心の平安を愛する草治の本心としては、わざわざ草治の家に来て兄弟喧嘩をするその神経が信じられなかった。

「それは普通の人間が出来ることが優れている程度ですよ？それくらいのとは僕達にとっては当たり前なんですよ。なんせそこらへんは君達とは比較にならないほどの精密な遺伝子教育をされてますから。それじゃあ、僕達にとってはダメなんですよ。僕達にとって大切なのはどれだけの魔法が使えるかどうかなんです」

円治は諭すように言う。妃の家族は魔法を使えることは聞いていたが、面と向かって魔法という単語を使われると違和感がある。

「それなのに、コレの使える魔法は本当に矮小なもの。赤井君も聞いていると思いますけど静電気ですよ、静電気。そんなの普通の人間でも起こせますよ」

「しかし、魔法が使えるからって別段、生活に支障が出るとは思えないんですけど。この時代に炎を出したりする魔法が使えても使いどころがありません」

草治はついつい反論してしまったがそれが本心だった。しかし円治は呆れたように鼻を鳴らして草治を見た。

「確かに、地上では魔法なんて使い道はありませんね。むしろ大勢に魔法を使っているところを見られたら即殺されますね」

「それなら、妃がクズという等式は成り立たない」

「だからそれは地上の話です。僕達が生まれた島では魔法が全てで

す。魔法は科学なんて凌駕します。信じられますか？誰にも知覚されることなく空を進む船、島。正確には魔法を科学的な算段で活用しているわけですが。より評価の高い魔法を持つものは島から優遇される。もしくは魔法についての研究に貢献したものが優遇されます。まあ魔術研究に対する研究者には魔眼がないと大抵はなれませんがね」

想像を絶する話に草治は啞然として押し黙る。そこで話の論点を戻すことにした。

「それと妃の性格とどう関係があるんだ？」

「それは、簡単だよ。コレは魔法もだめ。魔眼ももっていないから島では散々バカにされるしチカラでも敵わない。そうすると島の間には絶対に逆らわないようにしようと決めたわけ。人形のように反応しなければ誰も面白がってからかうことも止めるからね。でも、地上の人間達は魔法ももっていない。それに遺伝子教育で人間としての機能を強めているわけじゃないからほとんどのことでコレは簡単に勝てちゃうわけ。そうなると人形だと言い聞かせながら我慢する必要はない。むしろ今度は今まで馬鹿にされた鬱憤を晴らすことが出来るわけ」醜いだろ？円治は楽しそうに言った。

それを聞いてから改めて妃を見る。兄に馬鹿にされているというのに悲しそうな顔も苛立つような顔も見せない。

「さて、そろそろ本題に入るぞ、欠陥品」

茶番は終わりだとしても言うように、遠慮のない声で今度は妃に話しかける。呼ばれた妃は顔を上げた。

「お前が見付けた化け狸についてなんだけど」

化け狸、つまり奈菜霧のことだろうと草治は当たりを付ける。

「いったい、どうやって見付けたんだい？」

「たまたま、偶然です」

「いや、嘘はよくないな。あの狸はリストにものつてなかった。それだけ隠れ上手な異形が君如きに見付けられるはずがない」
そうして険しい表情を見せた。

「どんな手を使ったんだい？」

「いえ、本当に」

「本当に、ウザいよ。お前」

妃が言い切る前に、君の悪い笑みを円治は浮かべて言った。突如円治が湯呑を投げつけた。パリンと割れる音が響き、妃の頭で湯呑が割れた。湯呑の茶が赤色を帯びてダラダラと流れ出す。痛々しい光景を見て草治すら寒気を覚える。

「おい、アンタ何するんだ」

すかさず草治は円治に掴みかかった。掛ろうとした。

「紅の蛇よ」草治が動く前に、にやけた顔の円治が唱える。円治の肌から赤い蟲を思わせる文字の羅列が浮きあがる。彼の掌から細長い炎が生じた。それを見て草治の動きが止まる。

「僕の遺伝子に刻まれた刻印は炎を作ることに特化しているんだよ。凄いだろ？」

あざ笑い。火に手を突っ込む。草治はそれを睨むように見ていた。
「それが何？アンタささあ、馬鹿じゃねえの。ちよっとした火の芸が出来るからなんだよ。クダらねえ」

草治は低い声で吐き捨て泰然とした態度を崩さない。というか足が竦んで動けない。それでも頭に血が上っている所為か口だけは動く。弱い犬ほどよく吠える、という言葉が草治の頭にチラつく。

草治の挑発を受けて円治は瞳を陰しくした。右手を優雅に動かすと火は激しさを増し草治に襲いかかった。火は蛇のように草治に取り巻いていく。

「っ」紅の蛇の寒気を誘う目と合い、草治の足から力が抜けた。

「あらら、やっぱ君は外れか」

無様に地べたで固まる草治に円治のつまらなそうな声が届いた。

「このガキじゃないとすると、一体誰が君に入知恵したんだ」

閉じそうになる眼を見開くと円治が妃の髪を引っ張り問い詰めていた。妃の顔には変化はない。痛くないのかと草治は疑問をぼんやりと感じた。

「妃は電気信号を送って、脳に送られる痛みの刺激を抑制しているわけ。ザコはザコなりに工夫しているんだよ。本当に下らない工夫だけど」

円治がそう言って妃を放った。

一方、草治は息苦しさを感じ始めた。彼の周りを取り巻く炎が、周囲の酸素を奪っている。このままでは一酸化中毒になってしまうから立ち上がるとしても次第に彼の瞼が閉じていく。

「それでは、神社に棲む少女とやらを探させてもらつよ。おやすみなさい草治君」

最後に円治は玄関で会った時と同じような柔らかい笑顔を作った。

歓迎

草治は夢を彷徨っていた。

草治の母である麻美の話はいつも難しかった。そして非現実的であった。

母の話を草治はいつも聞き流していた。だけど、そのいくつかは今でも草治の中に残っている。

「反射させばいいの。草治はただ反射させるだけでいいの」

一度だけ、麻美は赤井神社の古臭い倉庫に連れて行って息子にそう言った。倉庫には様々なものがある。

「私には出来なかつたけど、貴方なら出来ると思うわ。確かに、貴方の魔法への視力は本当に弱い。だけど、貴方には魔法に触れる力がほんの少しだけあるの。これは本当に凄いこと。だって私にはその力が全くないから」

悲しそうな麻美の声が倉庫の中に満ちた。

麻美は埃かぶっていた一つの剣に手を伸ばす。

「この倉庫にあるものはきつと貴方を受け入れてくれる。いいえ、赤井の神社はきつと貴方を受け入れていくれるわ。だってこの神社は魔法で出来ているから」

ずっと昔に麻美は草治に言った。だけど、赤井神社で暮らしてみたら神社が彼を歓迎してくれているか草治には分からない。だけど、もしも本当にこの神社が魔法で出来ているのなら今だけでも力を貸してはくれないだろうか。せめて彼女たちを助ける力を。

「どうして、そんなことを思うのですか。ずっと前に言っていたではありませんか。貴方は現状を受け止めると。あの二人がいなくなっても貴方の現状に変化はありませんよ」
その声を彼は知っている。

彼の前に、赤い着物の少女が現れた。

「しかしながら、貴方が力を望むことは理解しました。貴方に教えても良いですよ、この神社の魔法を」

円治が優男ぶった笑みをみせて、草治の家と赤井神社を物色していたが件の少女の姿は無かった。

「この神社に見慣れない少女を見かけているという情報が出てきているが、それは何者だ」

穏やかな調子で円治が後ろに控える妃に聞いた。

「分かりません」彼女は人形のような無表情で言った。

それに円治は肩を竦めた。妃は己の感情を魔法で制限しているためそれが嘘か本当か分からない。同じ理由で妃には拷問も効かない。魔法の力が弱い彼女だったが、この少女との駆け引きは本当に苦手だった。

別の方向から試してみるしかないようだ。

「それはそうと、あの草治って子はどうしようか」

「どうするとは？」

「どうするって魔法のことを、ひいては僕らのことを知っているんだよ。口止めしないと」

「あの程度の人間が私たちのことを知ってるからと言って問題は無いと思いますが」

妹が珍しく、彼に反論をした。内心、円治の中でどす黒い愉悦が広がっていた。円治の口にいやらしい笑みが広がる。

「いや、そうでもないだろ。彼は僕の魔法を視た。僕としては大問題だ。だからいつそのこと殺してしまおう」

「そうですね」

妃は静かに言った。

その表情から何も読むことはできない。円治は彼女があの子に情

を移していると期待していたのだが、やはり彼女にとってはどうでもよい存在なのかもしれない。

いずれにしろ、少し様子をみる必要があるだろう。妹が何かを隠している可能性は高いのだ。どうすれば上手に情報をかすめ取れるだろうか。円治はそのことをずっと考えていた。

「とりあえず、彼を僕らの家に連れて行こうか」

あの草治という少年が何かを知っている可能性もある。

円治はこの神社に何かあることには半信半疑ではあるのだが、この気に食わない妹の心を踏みにじれるかについても思考していた。

「そうだ。いいことを思いついた。この神社を燃やして草治君が焼け死んだことにしようか。焼死体の替わりは後で持つてくればいいしね」

そう言つて円治は神社に向かって手を伸ばした。

彼の掌から火が作られる。幼いころから、彼は呼吸をするのと同じように火を造ることができた。

蛇のような細長い炎が蛇行して神社に飛びかかる。

その様子を見ても妃の表情には変化が無い。円治は軽く舌打ちしながらも更に大量の炎を作りだした。

（妃の出方を見ようと思つて神社を燃やしたのはやりすぎたか）

円治の苦々しい思いが膨れ上がるのに比例して炎も膨れ上がっていく。その時だった。

突如、神社から光の粉が吹き荒れた。その光の粉の一つ一つは本で書かれているくらいの小さな文字だ。光は炎を取り囲み、雪のように降り積もり、炎は物質が分子と原子に分解されるように光に変化していく。

そして神社の正面のドアを突き破り、一つの人影が砲弾を連想させる轟音と速度を伴って飛び出してきた。

人影は金色の光をいくも纏い、鬼姫は咆哮を上げて円治に突撃する。

「人の神社を燃やすんじゃないやねえええええ」

怒声に円治は眼を見開きながらも鬼姫に反応した。鬼姫が一直線に飛来しながら彼の顔面に鉄拳を構える。円治も右手を突き出し鬼姫との間に炎の壁を構成した。

しかし、鬼姫の振りあげた腕は伸び上げられたバネの如く跳ねあがりながら炎を突き破り爆風が巻き起こる。

爆風の後、鬼姫が静止する一方、円治は鬼姫の運動エネルギーを全て貰ったかのように砲弾のように森の中に飛んでいった。

二人の激突からすぐさま離れた妃は、鬼姫の怖ろしいまでの強さに呆然としてわずかに目を見開いた。

鬼姫はかつてないほど険しい瞳で円治が飛んでいった方を見ていた。妃も鬼姫の視線の先を追う。彼女は知っていた。兄がこの程度で終わることが無いことを。円治が吹き飛んだ先では森の樹がなぎ倒され、暗い森に穴が空いているようだった。森に空いた穴の中から青白い人魂のような炎が浮かび上がる。それを見て妃は兄が再び炎を造り出したことを悟った。

「やっぱ全然力が出ないわ」

鬼姫が唇を舐めながら言う。妃は森の穴から猛獣が忍んでいるような錯覚を覚えていた。

人玉が膨れ上がり、膨れ上がり、膨れ上がるのを妃は視た。ビルをも越す森を突き破り炎の蛇がアギトを開いて妃と鬼姫を見下ろしていた。息をするのも忘れる一瞬。

風に乗るように、波に乗るように光の文字を揺らし人間離れた速度で鬼姫が妃のもとに駆けつけ、抱きかかえて空を掛け上がった。

二人が居た場所に蛇のアギトが落ちた。鬼姫の足が空を蹴る度に光の文字が舞い、波紋のように広がる。空に階段の様な波紋を残して二人は遙か空の上にいた。それは一瞬のことで妃には何が起きたのかを把握することは出来なかった。気付いた時には眼の前に赤く燃える蛇の眼球があった。炎の蛇がここまで追ってきたのだ。

「マジかよ」

鬼姫が舌打ちをする。蛇の動きは鬼姫の予想よりも速く貪欲で、ア

ギトを開いて二人を包みこもうとした。鬼姫は光を纏った蹴りをアギトに向けて放つ。光の粉が舞い、蛇の動きが止まる。蛇に触れた瞬間アギトを根こそぎ分解する。蛇の頭が消えて助かったと妃は漠然と思った。

だが一瞬でまた蛇の頭が再生する。

「危ない」妃が叫ぶ。

「分かつてるわけ」

こわばった鬼姫の声。

鬼姫はすぐさま空を蹴った。空の上ではなく、その逆の下に。つまりは術者である円治に向かって。

「貴様を潰せば、この魔法も壊れる」

そう鬼姫が笑った。だが、妃は見てしまった。抱きかかえられている所で、鬼姫の背後に居たモノと目が合ってしまった。

まじかに迫りくる口を開いた炎の蛇を。

間後ろのさつきを感じ取ったのか、鬼姫は妃を虚空に投げた。

次の瞬間、空を舞う妃の瞳に鬼姫が炎の蛇の口に包まれた光景が映った。

そして、そのまま蛇は地面に隕石の如く落下したのだ。

妃は空中で必死に体勢を整え、地面で受け身を取ることに成功したが、体の負担はとても大きい。それでも頭をあげて状況を確認しようとした。

炎の蛇が消え、その下から真っ黒の鬼姫が倒れていた。

「おやおや、これは大当たりようだ」

円治が高い声を出して鬼姫に近づいていく。

「この子は魔法を分解する力があるようだね。こいつは珍しい魔術師の遺伝子をもっているようだね」

彼は明らかに興奮していた。

だが、その理由は彼女には理解できる。

地上に出てきている『ヤオヨロズ』のメンバーというのは簡単に言えば賞金稼ぎだ。珍しい獲物を捕まえればそれだけ報酬がもらえる。

「妃、君はこれを隠していたのか。でも残念これは僕のものだ」

「いや、違うな」

きつぱりとした低い声が響いた。

円治が眉をしかめて声の方を向き、無表情だった妃の顔からは明らかに驚きが走った。

二人の視線の先に、赤井草治の姿があった。彼はふらふらとした足取りで夢遊病のように二人に向かっていった。そしてその右手には古臭い刀が握られている。

「鬼姫は、この土地のものだ。昔も今も遠い未来も。下衆はこの土地の外に消えてくれ」

「君は黙っている」

円治がぴしゃりと言って、再び炎を造る。

「止めてください。兄さん」

意識せず妃の口から言葉が漏れた。

次に、体が勝手に草治の前に走り出した。妃の動揺した態度に円治がいやらしい笑みを浮かべる。

「どうして止めないといけないんだ」

「兄さんには、あんたには関係ありません。ただ、彼を傷つけるなら私も黙ってはいません」

草治と円治の間で妃は静かに言って、懷からナイフを取り出した。呆れるような顔を円治は見せる。

「お前の考えていることは分からない。しかし、この僕に刃を向ける気ならば容赦はしない。君たち二人とも消してあげるよ」

円治が炎を造り、妃が体全身を緊張させた時。

「お前たちは分かっている、魔法というものを。君たちの魔法は原始的すぎて魔法と呼ぶにはあまりに幼稚だ」

草治がため息混じりに言った。

それを聞いて円治の顔が歪む。「どういう意味だ」

「説明は難しい。俺も詳しくは知らない。でも、とにかく反射させればいいんだ。そうすれば魔法が反応してくれる」

草治は足元に右手をつけた。瞬く間に、彼を中心とした巨大な魔法陣が膨れ上がった。この魔法は結界だ。赤井神社と外界を切り離す魔法。

妃と円治は驚愕するなか草治が静かに告げる。

「この神社は俺を歓迎しているようだ。いや、待てよ。俺も君たちを歓迎しないといけないな」

赤井草治は立ち上がる。彼の瞳はよく見ると紫色を宿していた。

「ようこそ赤井の神社に」

赤井神社の魔法具

時は少し遡る。

炎の蛇にとり憑かれ、意識を失った草治は一人の少女と会っていた。

そこは、桜が雪のようにしんと舞う彼の夢の中。

「楽しくなってきましたね。ご主人様」

紅の薄絹の頭を隠した少女は本当に嬉しそうな声を出す。幼いころはこの少女に会うことも、夢を視ることも本当に少なかったが、近頃はよく彼女に会う。だが、少女のことを彼は何も知らない。覚えていない。

「そういえば、君は誰だい？」

「長い付き合いですけど名乗ったことはありませんでしたね。私は赤蓮と言います」

「それで、赤蓮は何の用？」

「はい、実は貴方を止めようと思って」

「止める？」

「そうですよ」

「貴方は、あの鬼をどうしたいのですか？あの鬼を手伝って私を払いたいのですか？」

少女は少し悲しそうな声を出す。それに草治は首を振った。それに少女も首を傾げる。

「てつきり貴方は私が邪魔だと思っていたのですが」

どちらかと言えば、彼女には草治を呪おうとすることは嫌ではあるが。

「邪魔というか、呪うのは止めてほしいだけだ。君の性格は嫌いじゃない。むしろ悪霊なのにその明るさは羨ましくある」

「あは。でも私は貴方を呪うのを止めるのは出来ませんよ」

「何故？」

「貴方を愛しているからです」

「愛している？嫌いじゃないのか？」

草治が尋ねると少女は頷いた。

「ええ、嫌いですよ。でも、同時に愛してもいるんです」

そして頭を覆う薄絹に手を乗せる。

「かつて、忌子として捨てられた私を貴方は拾ってくれました。そして私に貴方の側に仕えさせてくれました。私は嬉しかったです。でも、私を二工とするためだけに貴方は私を拾った。そして私を二工として殺した。アナタにも貴方の理由があつたことは知っています。だけれどやっぱり私は貴方を許せないのです」

少女の声は相変わらず邪気がなく、歌うような声音である。

「でも、それ以上に私は貴方を愛しています。だから、私は決めました。アナタをこの手で不幸のどん底に落として、でも私は貴方の側に付き添って、最後に貴方に理解してもらいます。貴方には私しか無いということを。そうすれば、貴方は私を最も愛するのでしょうか？」

少女から薄絹が外れた。桜と共に風に揺らめく絹から見知った少女の顔が現れ、草治は驚いた。

肩まで伸びた癖毛の髪とそこからチヨコリと飛び出る二本の角。そして紅い瞳。その顔は鬼姫に瓜二つである。

幼き頃の鬼姫、そんなことを草治は思った。

赤蓮は微笑む。

「私は赤蓮。かつて鬼と忌み嫌われ、前世の貴方に拾われ、裏切られ、殺されてこの神社に祀られた鬼姫の半身」

言い聞かせるように、けれども軽やかに赤蓮は草治に告げる。

「けれども、私は鬼姫ではないのです。鬼姫は私が殺された後に私から分かれた私の一部。鬼姫はこの土地の神として職務を遂行するための存在。そして、私は鬼姫が何の気負いもなくこの地にあり続けるために生まれた鬼姫の持った負の感情を司る存在。だから私は

ずっと貴方の末裔にとり憑いていました。とはいえ、別に貴方にしたように呪っていたわけじゃないですよ。本当は崇りたかったんですけど、鬼姫が仕事しろって煩かったんですよ。一応、本体は向こうですから私じゃ敵わないんですよ。だから今までは大人しくしてたんです。でも貴方への感情が強すぎて、貴方をめちやくちやにしたいと願うほどなんかチカラが湧いて来ていつの間にか鬼姫のチカラに対抗できるようになっていたんですよ」少し恥ずかしそうに言う、少女からは暗い感情は欠片も見えない。本当に楽しそうな顔をしている。

「だから貴方以外のことは私にはどでもいいのです。この土地もね。逆に、鬼姫はこの土地のことしか興味が無くて、貴方への感情は全くない、はずなんだけどね」

ここで困った母親のような笑みを見せた。

それは置いといて、と赤蓮は言う。

「さて、本題に入ると私にとって、あの子はどうでもいいのです。けれども私は貴方があの子のために、そして生意気な天竜寺妃のために危険にさらわれることは嫌なのですよ」

それを聞いて草治は不思議そうな顔をした。

「俺が不幸になることがお前の望みだろ？それなら、俺の好きさせてくれても」

「それは嫌なのですよ。私は私の手で不幸に落とすことが楽しみなんですよ。それに、下手をしたら貴方は殺されますよ。彼らは理を守るためには容赦が無いですから」

「本当は、やりたくないよ。面倒くさい。でもね」

喋る草治に赤蓮は眼を細める。

「俺が人を救うことが出来るなら、他の人のために出来るなら、俺は頑張りたい。今までは俺に出来ることなんてなかったから。何をしても、失敗したり、逆に迷惑をかけたりしてきた」

「私が、貴方の縁をそういう風にしたんです。私は貴方の邪魔をして、貴方を人から遠ざけようと思いました。貴方の心根は優しいから、

誰にでも優しくしようとするから、それを諦めてもらいたかったのです」

赤蓮がふつと笑う。

「それでもやっぱり、貴方の優しさは消えないのですか。そういう情けない所が昔の貴方にそっくりです。良いでしょう。私は忠告しました。後は好きにして下さい。仕方が無いから貴方を神主と私も認めます。貴方に少しだけ私も協力することにします。さあ頑張ってください」

そして草治の意識は強引に引っ張られた。

眼を開いて草治は驚いた。彼は居間で寝ころんでいた。時間もさほど立っていない。

しかし今までと景色が違う。

赤色の砂が草治の下にいつの間にあつてそれに草治は足元まで浸かっていた。そしてその赤いモノは草治の周りにしかない。草治が何歩か動くそれは影のように点き従い、そして動いた振動の所為か赤色のモノが舞い上がった。それは水槽の中を揺らした時の砂のような光景で草治は見とれる。

と、草治はゆっくりと登ってくる赤を見て再び驚く。その赤は文字で構成されていた。小説の中の文字よりも小さく砂粒程度の文字の集団が草治を取り巻いていた。

『視えましたか？その文字の集団が所謂、魔法の因子です』

頭の中で赤蓮の声が届いた。草治は驚き、首を回して辺りを確認する。

しかし当然の如く誰もいない。

『今は私が貴方の中に入って魔法が視える状態にしているんですよ。これは妃さん達で言う魔眼と同じようなものです。この力は貴方の母親の麻美も持っていました。しかしながら鬼姫のよりも高性能なものではなく、あくまで貴方の周りのモノしか見えません。つまり、これが貴方の魔法の元です。ちなみに、この自分に取り巻く文字の

集団の羅列を造って魔法が出来あがるんですよ」

その説明を啞然としながら聞き、草治は目の前の魔法の元に手を伸ばす。少し触れただけで赤が煙の如く浮き上がる。しかしながら感触はない。

『ちなみにその赤い文字は貴方が命令すればその通りに動きますよ
お』

赤蓮に言われ、草治は頭の中で赤に向かって舞えと念じる。すると瞬く間に草治の足元にあった赤が噴き上がり草治を取り巻く。なかなか面白いと思ったが、赤色の文字達が蠢く光景は若干不気味でもあった。さすがは魔と言っただけのことはある。

『それと、大抵の人の魔法の文字はその所有者の性格というか縁に深く結びつきますからね』

楽しげな声を聞きながら、自分の文字を視て草治は憂鬱な気分になっていくのを感じた。ほとんどは読めない漢字のような単語であったが、中には草治にも読めるのもあり、アルファベットもちらほらとあるのだが。

「というか、呪、死みたいな不吉な文字がけっこうな頻度であるんだけど」

『ああ、それは私が頑張って書き帰しました。不幸になれて強い気持ちを含めて。その所為か魔法もこんなに汚れたんですよ』

満点のテストを自慢をするような赤蓮の声がした。
「俺って、いつもこんなの憑けて歩いてるのかよ」

げんなりとした声を草治は出した。とはいえ、草治はいくつかの命令を赤い文字に出しながらそれらを躍らせる。（これを上手く並び替えれば自分も魔法とやらが使えるのかな）

『ああ、それは無理ですよ』

頭の中を読んだかのような声だった。

『同化してるから貴方の考えは何となくわかるんですよ。ところで貴方は妃さん達のように魔法への体質が強いわけではありません。少しだけ体質があるだけです。でも、最低限の体質があるので魔道

具を使えばそれなりに使えますよ。たとえば、かつて鬼姫を封印した刀とか』

言われて草治は押し入れの戸を引いた。そしてそこにどっしりと居座る刀を手にとった。

しかしながら使い方が分からない。

『使い方は、簡単です。反射させればよいのです』

「そうだな」

自然と草治は呟いた。

いつか、彼の母も言った。反射させればよいのだと。

反射とは、光や音などの波がある面で跳ね返る反応のことである。そして、生物学では動物の生理作用のうち、特定の刺激に対する反応として意識されることなく起こるものを指す。

草治はじつと刀を見詰てから、赤い文字を操作した。彼の魔法の元はあたかも新しい手足のように自由に動かせる。彼は、刀に特定の刺激を打ち込む。

刀のツバの周りに赤い文字の羅列が大きな円を作った。その瞬間、刀から怪しい紋様を浮かしてた。

その紋様は鞘の先から、次第に刀に広がっていく。そして、その紋様は草治にまで広がっていく。

『その刀は、赤井神社第2位の魔法具です。能力は単純明快、魔法歸し、です』

鬼の目覚め

神というモノは果てしない力を有している。

だからこそ、畏怖を感じた神主もとい魔術師に神は封じられる。けれども、神に非があるわけではないのだ。そのため、神主もとい魔術師は神の手助けをする義務がある。

魔術師は時に神を制御する。

魔術師は時に神の手助けをする。

それが彼らの関係。

赤井神社の境内。

倒れた鬼姫を見て草治は胸に苛立ちを覚えた。だから挑発するように円治に言ったのだ、お前の魔法は原始的だと。実のところ、草治自身も魔法についてはよくしらなかったのだが何となく感じたのだ。円治の使う魔法は、原則に則っていないと。

「魔法ってのは微生物と同じだ」

草治が告げる。

「そうだな、原始的な生物なんだ。意思を持たず、ただ外界に反射して反応するだけ。視覚的には完全に視えない世界を漂うアメーバ達に餌を与える。魔法使いはただ餌を与えればよいだけ」

草治は言う。その正面で円治は冷めた表情をしていた。だが、彼の周囲に魔法陣がいくつもいくつも浮かぶのを草治は視ることができた。

「知ったようなことを」

さげすむように彼はぼそりと呟き、魔法陣から炎の魔法が姿を現す。細長い炎の弾丸が5つ。

それを視て、草治は神社に伝わる名剣を引き抜く。

「帰れ」

そう叫び、炎の魔法に向かって剣を上段から振り下ろす。

空気を斬る乾いた音がして、剣が通過した空間に真っ赤なヒビが入る。そのヒビは口をあけるようにばかりと割れた。割れ目の中からは純度の高い黒い風景が顔をのぞかせる。

その黒い風景こそ魔法の世界だ。全ての色の魔法が混ざった黒色の、魔法が帰るべき世界。

草治に襲いかかろうと迫ってきた炎の魔法は真っ赤な割れ目に引き寄せられるように方向を変化させた。炎の魔法は草治の前に控える割れ目に吸い込まれ、魔法も赤い割れ目も瞬く間に消えた。

己の魔法を消され、円治がわずかに驚きを見せた。

「分解、か」

『違いますね、この剣は魔法をもとあった世界にかえす力があるのです。でも、攻撃は出来ません』

赤蓮の声が草治の頭に響いた。

そのことは草治も分かっていた。

これの剣が斬ることが出来るのは、世界だけ。一時的に現の世界を斬り、目に見えない世界をつなげるのだ。

とりあえず、不利なことには変わらない。

草治が剣を構えなおしたときだ。

彼の横に立っていた妃が眉をしかめた。奇しくも己の魔法で身体を高めた彼女は前を金色の文字が蛍のように飛んでいることに一番に気がついたのだ。それはかつて視た鬼姫の光。

円治と草治は睨みあったままでそれに気がつかない。

『嫌な予感がしますね』

赤蓮の声を合図とするかのように、赤井神社一帯から黄金色の光が蛍のように一斉に飛び上がり神社を黄金色に染めた。

突然の出来事に円治は驚愕した。草治も己の視界が金色に塗り替えられ困惑をみせた。

「これは」

『私がご主人様を神主に認めたため、彼女の枷が外れました』

「あああはははははははははは。やっと自由になれたあ」

耳をつんざく咆哮。

黄金色の光の中心で、鬼姫が立ち上がった。凄惨な笑みを浮かべて。「これで、私も神になれる。いや、私こそが神。だから、異端を喰わないと」

そう言つて鬼姫は円治を見詰めた。癖のある髪を逆立て、瞳は鈍く光る。

円治は後ずさりながら、手を突き出し魔法陣を作ろうとする。

だが、魔法陣を作る前に鬼姫の光達が群がり彼の魔法を食らい、分解していく。

「バカな。何だ、この魔法」

円治が叫ぶのを鬼姫は愉快そうに眺める。

「人間ごときが理解できる魔法と私の魔法とは次元が違うよ」

犬歯をむき出しにして鬼姫が笑う。それから燃やされた神社を一瞥した。

「そういえばお前、私の神社を焼いたね。天罰を与えなくてはな」

鬼姫は瞳を細め、円治をにらむ。鬼姫の異様な圧力と神々しさに円治が顔を蒼白にした。

「だけどお前は、うまそうではないから」

鬼姫の口元がつりあがった。

そして鬼姫が足元に力を溜め、大地を蹴った。あまりの踏み込みに大地が震えた。

それからの鬼姫の動きは草治の眼ではとらえきれなかった。

妃は鬼姫の尋常ではない速さを目で追い、鬼姫が円治を吹き飛ばすのを見た。円治の顔面に鬼姫の拳が突き刺さり、彼の首が不自然に曲がった。死んだかもしれない。だが、彼女は何も感じない。

（これは、凄いわね）

金色の光の文字は、妃の体内に回る魔法が小さすぎるせいか、それとも外に出てないからか反応してこなかったため、身体能力は普通の人間よりは高いが、とてもではないが地面を震わせるような馬力は無

い。

円治を吹き飛ばし、鬼姫が妃のほうを視た。彼女の瞳が妖しく光る。

「お前も、うまそうではないな」

「どういうこと」

鬼姫の言わんとすることをなんとなく理解し、妃は震えた。だが、妃は魔法で感情も抑制する。

「あんたも、異端なのよ。勝手に血の構造を造り変えて、虫唾が走るわ」

「だから？」

「消してあげる」

鬼は笑って言った。

先ほど、円治を吹き飛ばした鬼姫の動きを視る限り、妃に勝ち目はない。

（ここで、死ぬわね）

妃の心は冷めていた。

彼女の心はいつも冷めていた。

天竜寺の家では出来の良い兄弟たちに下僕のように従った。

天竜寺家の外では、お嬢様を演じた。

演じるように言われたから。彼女は人形なのだ。言われたことを最低限やるだけの人生だった。

人生を楽しいと思ったことなど無い気がする。

だからだろうか、彼女は死ぬのが怖くない。

彼女の死を悲しむ人間もいない。

だから、まあいいのだ。どうしても。

「待てよ」

声が響いた。

自然と、妃はその声の方を向く。

赤井草治が剣を構えて、妃と鬼姫の間に割って入ってきた。よく分からない男の子だ、と妃は呆れた。

「何だ、草治」

鬼姫が楽しそうに言った。

「私は今から、その娘を消してあげようと思っているところだ。そこをどけ」

「駄目だ。ふざけるのもいい加減にしろ」

草治が即答する。草治の答えを受け、鬼姫の顔が歪んだ。

「調子に乗るなよ。小僧。赤蓮の呪縛から解放された今、お前がどうなろうと私は一向に構わないのだぞ」

「調子に乗っているのはお前だ。人を殺すのは神様の所業ではない。鬼の所業だ」

叫び声をあげて草治が必死に鬼姫を説得しようとしていた。

でも、おそらく無理だ。妃は鬼姫を視て思った。彼女も少しは神を称するモノに会ったことがある。彼らに弱い者の言葉は届かない。

「はっ。何が鬼だ。草治、私はこの土地の汚物を取り除こうとしているだけだ。遺伝子操作は土地の縁をこじらせるんだよ」

「でも」

草治が呻いた。

妃はそんな草治を見詰めた。

どうして、こんなに必死になるのだろうか。

妃が知る限り草治はいつも楽しそうにしていることはない。やる気が無い。学校でも、家でも。

だから、妃は草治と自分は似たもの同士だと思っていた。おそらく彼も、周りから言われたから学校に行き、従うざるを得ないから鬼姫に従っている。

彼も、きっと人生を楽しんでいると思えてないのだろう。

しかし、今の彼の行動が理解できない。

どうでもいいではないか。天竜寺妃が死のうと、死なないと。

鬼姫に睨まれながらも、言葉を探す草治の背中に妃は尋ねたかった。

「でも、天竜寺は俺の友達だ。友達を殺すことを俺は許さない」

草治が言った。

その言葉を聞き、妃が目丸くした。

思わず、嘔き出しそうにもなった。

こんな、こんな理由でこの鬼の前に立っていたのか。まるつきり違う。天竜寺妃と赤井草治は違う。少なくとも彼女はそんな理由で動かない。

「お前はやつぱ、バカだね」

鬼姫が呆れるように言った。いつしか、彼女から険しさも消えていた。

「バカじゃないわ。ご主人様は純粋なだけですよ」

元気のよい声が飛んできた。いつの間にか赤い着物を着こんだ幼い少女が草治の隣りに立っていた。鬼姫が鬱陶しげな顔を造る。

「何だ、赤蓮」

「言っておきますけど、私は一時的にご主人様を神主に認めたただけだから貴方の力も一時的なものですよ。だからご主人様が死んだから貴方のチカラはずっと戻らなくなります」

あつけらカランと少女は言った。鬼姫は目を剥いた。

「姑息なことを」

「だって、ご主人様は私だけのものですから。貴方には渡しません」
「ったく」

舌打ちをし、鬼姫がそつぱを向く。草治がおずおずとした調子で口を開いた。

「それで、どうするんだ」

「私に聞くな。いずれにしろ天竜寺妃は敵だ。円治のこともあるしこいつがヤオヨロズに帰れば私の情報が漏れる。」

鬼姫がぶっきらぼうに言う。

それを聞き、草治が頭を掻きなら妃を視た。草治自身、どうすれば良いか分からない。

赤蓮と呼ばれた少女はかわいらしく手を打ち、鈴の鳴るような声を出す。

「私、いいこと思いつきました。魔法を使いましょう」

「魔法？」

妃と草治が首が傾げた。

「そうです。魔法です。魔法を使って悪い縁を変えるんです」

少年の日常

守巢湖と呼ばれるそこそこ大きな湖では毎年、花火大会が二日間行われている。

黒い夜空に、多様な花火が上がる様は見事であり、湖畔に近づき体内すらも震わせるような音を楽しむのも一興であるが、赤井草治はこの花火大会を湖から少し離れ、比較的高い場所にある赤井神社から視るのを楽しみにしていた。

長い石段の一番上にある鳥居の下に座り、草治はぼんやりと花火に見とれた。その隣りには赤蓮が座っていた。神社でのいざこざの後、彼女は頻繁に草治の前に現れるようになった。

赤蓮が石段の下を指差した。

「お客さんですよ」

花火から目をそらし、彼は少しだけ驚いた表情を見せた。

人影が神社に上がってきた。

草治と赤蓮は立ち上がることにした。

「赤井神社に何か用ですか」

近づく少女に草治が尋ねた。

「用なんて無いわよ。ただなんとなく来ただけよ」

天竜寺妃がきつぱりと言った。

「あんた、どこかで視たことがあるわね。もしかして聖葉学園の生徒？」

「そうだよ。俺は赤井草治だよ。天竜寺さん。はじめまして」

「ああ、そうだったわ。2組の根暗でしょ」

妃が高飛車に言い、草治は苦笑した。

「その子は？妹？」

赤蓮を指し、妃が尋ねた。草治が答えるよりも先に、赤蓮が一步前に出る。

「そうですよー。私は妹なのですよー」

能天気な声を赤蓮が出す。

「質問を繰り返すけど、どうしてこの神社に来たの？」

草治が妃に聞いた。妃は鼻を鳴らし、草治から顔を背けて湖に視線を移した。

遠くから花火の音と、光が届いてくる。

「ここから見る花火が綺麗だと思ったのよ」

「そうなんだ」

「でも、私は近くで見るほうが好きだわ。ここからの花火は何か迫力が足りないもの」

「そうかな。俺は情緒があつていいと思うけど」

草治と妃は黙りこむ。

「そういえば、天竜寺さんは兄弟とは仲が良いの？」

「なんで、そんなこと聞くの？」

「いや、学園でうわさを聞いたから。天竜寺さんには円治って名前のホストをしている御兄さんがいるって。」

「円治兄さんとはそんなに仲良くないわ。まあ昔ほどでもないけど」
妃が呟くように言った。

花火が終わり、妃が言った。

「帰るわね」

「そうだね。そうれがいい」

そう言つて草治は立ち上がった。

妃が神社の石段を下りて行くのを見ながら赤蓮が草治の腕を引っ張

った。

「妃さんの記憶、きちんと変更されているみたいですね」

「みたいだね。凄いな鬼姫のチカラは。円治についても傷を治して
いたみたいだし、焼けた神社も直したし」

「そりゃあ、鬼姫も曲がりなりにも神様ですから。制限が無ければ、
この地域の中ではなんでも出来るんですよ」
得意そうに赤蓮が答えた。

昨日、赤蓮が提案した申し出は妃と円治の記憶を操作することだった。

記憶を操作すれば、一応は鬼姫を狩ろうとは思わないだろうとのとだ。

草治としては記憶を変えられるなんて、と気味悪く思ったが、妃はそれに同意した。

「私は、どうでもいいわ。本当は、死んでもよかったんだけど」
彼女はそう言っていた。

人形のように虚ろな目で。

その姿はいつも学園で見かける澆刺として天竜寺妃と似ても似つか
なかった。

記憶を変えられる直前、彼女は草治に聞いた。

「貴方の人生は、楽しいの？」

「楽しいとは思わないけど、楽しくないとは思わないかな」

草治がそう言うと、妃は不思議そうに首をかしげたのだった。

神社を降りていく妃は今どう思っているのだろうか。

人生を楽しんでいるのだろうか。

「楽しかった？」

思わず、草治は妃に声をかけた。

妃は目を瞬かせて振り向いてきた。

「何が？」

「いや、その、花火」

「そうね。最初は寂れすぎて、どうかと思ったけど意外と綺麗だったし、ええ、きつと楽しかったのね」

人ごとのように妃が呟いた。その表情は昨日見せた人形のような顔だった。

それから人形のような顔で、軽く微笑んだ。

「何か、赤井神社って変なうわさばかり聞くけど、以外と風情があつて良い場所ね。また、この神社に来ていいかしら」

「ああ、もちろん」

それを最後に天竜寺妃は神社を離れて行った。

「妃さんは、一応ヤオヨロズの一員ですから、この神社に頻繁に来られると鬼姫が怒りますよ」

赤蓮がたしなめるように言った。草治は肩をすくめてから神社の中に戻ることにした。

新しく造られた神社では鬼姫と草治の祖父が酒を飲んでいる。

草治はため息をついて二人から酒をむしり取る。

「いい加減にしてくれ、二人とも。というか家は財政難だから酒なんて買わない」

「飲まないとやってられないわよ」

「そうだ、そうだ」

鬼姫は昨日から機嫌が悪く、祖父はそれを楽しんでいる。

鬼姫はどんよりとして目つきを草治に向けてきた。

「ああ、もうくそ。イラつく、気持ち悪い。全部草治のせいだ」

「気持ち悪いのは酒のせいだ」

草治が言つと、鬼姫は草治をにらむことを止めてくれない。

「分かった。水を持ってきてやるよ」

そう言つて草治が振り向いた時だった。

「ごめんなさい」

小さな声が鬼姫から聞こえてきた。啞然とした顔で草治が振り向くと鬼姫は酒とはまた別の赤みが顔にさしていた。

俯いたまま、鬼姫が口を開く。

「その、昨日はちよつと言い過ぎた。少し調子に乗ってた」

昨日、という喰うとか殺す発言だろうか。

草治は苦笑してから、鬼姫のあまたに手を伸ばした。

「分かってくれればそれでいいよ」

「って、角を引っ張るな。変態」

鬼姫が叫び、びんたをする音が神社に響いた。

二人の様子を見て源蔵は上機嫌だ。

「何ていうか、仲が良いというか。悪いというか。麻美は今の草治を視てどう思っかねえ」

「そうですね。喜ぶと思いますよ。麻美さんは、鬼姫を助けて赤井神社を再興したいと昔言っていましたからね」

赤蓮がしみじみと答えて、言い争う草治と鬼姫を見詰めた。

少年の友達

一応、学園に草治の友達はいる。

とても変わった男だが。

彼は入学した後、宣言した。

「俺は有馬辰巳と言います。趣味は目立たないことです。絶対に目立たない、それが俺の高校生活での目標です。ですからみなさんは俺に話かけないでください」

そんなことを言った。

そんな目立つことを言えば、逆に目立ってしまう。

おまけに、有馬辰巳は顔もよく、勉強もよくできた。

だから彼はなるべく人を避けるように行動することにした。なるべく人通りの少ない道を通る。なるべく人とも話さない。

ただ、有馬は草治とはしばしば話をする事があった。

彼は言った。

「俺は、欠陥品なんだよ。たくさんの人に見られていると思うと頭が真っ白になって気持ち悪くなるんだ。病気や障害レベルでな」

お互いに目立たないようにしていたところに同族意識を持たれたから有馬はそのことを草治に言ったのかもしれない。だが、実際のところ草治には有馬が何を考えているか分からない。昔も。そして彼が家に引き籠るようになった今も。

ある日、けたたましい呼び鈴が草治の家で何度も鳴り響いた。

草治は苦虫を噛むような顔を見せながらも玄関に歩を進めていた。

早朝に迷惑を考えずに呼び鈴を連打する奴に一言浴びせてやろうと

いう気構えで扉を開けた草治は迷惑な客を見てきよとした表情を見せた。

草治の前には彼よりも少しだけ背の高い少年が顔を蒼白にして立っていた。

「有馬？」

声を上げる草治に構わず、有馬辰巳は彼の肩をがしりとつかみ詰め寄ってきた。

「おい、どうした」

「草治、助けてくれ」

有馬の切羽詰まった表情に草治はため息を吐いた。彼のことは本当によく分らない。

有馬を居間にあげると鬼姫と赤蓮が物珍し顔でやってきた。鬼姫は頭に帽子をかぶって角を隠している。草治は有馬に二人は従弟だと簡単な説明をしてから言った。

「久しぶり。どうかしたのか」

「ああ、大変なことになった。最近の俺は目立っている気がするんだ」

「ああ、またそれか」

呆れたように草治が言う。

しかし有馬はその声が聞こえないのか頭を抱え出した。

「絶対、おかしい。俺は目立たないようにしているはずなのに、最近視線を感じるんだ。どうすればいいんだ」

それを冷めた瞳で鬼姫が見下ろしている。

「何だ、こいつ。もしかして変な薬でもやっているのか」
「違うよ」

草治はげんなりとため息を吐いた。

「有馬も親から遺伝子教育を受けているんだ。まあ簡単なものらしいけど。だから頭も良いんだけど、遺伝子操作に失敗があったらしく、先天的に少しだけ情緒が不安定なんだよ。特に、他者の視線

を感じるとパニックに陥るらしい。だから、ときどきよく分からないことを言う」

「ふん、下手な欲をみるからだ」

「有馬には非は無いよ。とにかく、こいつはいつも変なことに怯えててね。今度は、何があった」

草治が尋ねると、有馬が飛び起きた。目を剥いて、吠えるように言う。

「ストーカーだ。俺はストーカーに後をつけられているんだ」

「へえ」

「何だ、そのかわいそうなものを見る目は。確かに俺は少し精神的に変なところはあるが、妄想の類は一切ないことは草治も知っているだろ」

「そうだけど、証拠が」

肩をすくめて草治が言う。しかし有馬は諦めない。

「証拠ならある」

有馬は強い口調で言って懐から桃色の封筒を取り出した。花柄模様の中に有馬辰巳様と書かれていた。

「これは、いわゆる恋文か」

「おそらく違う。とにかく中身を見てくれ」

言われ、草治は封筒を受け取った。

何やら甘い香りがした。

丁寧に草治が封筒を開くと一枚の紙が出てきた。そしてその紙に一言。

好きです。白井美香

「恋文だろ」

「だが、俺は白井なんて女知らない。きっとこれは罠だ。絶対罠だ。俺みたいなバカな男から金をもぎ取ろうとしているんだ」

「お前は考えすぎだよ。いつも」

「いや、この手紙が昨日送られてきた。それに、数日ほど視線を感じていたんだ。きつとこの女だ。俺はどうすればいい」

「どうすればいいと言われても、お前の言うことも信じがたいし」
そう言つて草治が困つたように頭を掻く。

とはいえ、草治は知っていた。有馬辰巳は思慮深い。人の視線を感じてパニックに陥るのも、ただ彼は人見知りが過ぎるだけと判断することもできる。おそらく、草治のどこに來たのも草治が有馬を理解していることを彼が知っているからだ。つまり、草治なら有馬を妄想男だと判断せず、協力してくれると。

しかし、ストーカーなどに草治は対応できるわけがない。それにその女がどこにいるかもわからない。

「名案があります」

赤蓮が両手を元気に鳴らし声を張つた。

「どうにもこうにも、有馬さんに付きまといつていう女性の存在が明らかにならなければなりません」

「しかし、どうやってそのストーカーを探す」

「簡単です。探すのではなく、出てきてもらうのです」

「それは簡単ではないぞ」

「いいえ、そうでもありません。見たところストーカーさんは有馬さんに首つただけです。そんな有馬さんに別の彼女がいたらストーカーさんはどう思うでしょうか」

それを聞き草治は一理あると思つた。しかし

「その彼女役はどうする」

草治に女性の友達はいない。おそらく有馬も。

ところが、赤蓮は楽しそうに人差し指を向けながら言つてきた。

「ここに彼女役に適任な人がいるではないですか」

金色の長い髪の少女と、茶髪の垢ぬけた少年。二人はとても絵になつていた。

少女は無愛想な顔で少年を引っ張っていた。

「有馬、あまり俺の手を煩わせるな」

ぼそりとして声で少女の格好をして草治が後ろの少年に言った。

「いや、でも、恥ずかしい。これだと、何か俺、目立つんじゃないか。そんなこと考えてたら気持ち悪くなってきた」

「俺の方が恥ずかしい」

結局草治は赤蓮に言いくるめられ、女装をさせられた。

もともと小柄で容姿の整っている彼なのだが、化粧をして女物の格好をしていると本当に女にしか見えなかった。

「とにかく、お前の家まで行ってみよう」

ストーカーさんとやらが本当にいるのなら有馬の家の周辺に行けばきつと草治と有馬の姿を見ることになる。少し危険な気もするが。

しかし、二人は何事もなく有馬の借りているアパートに着くことになった。

有馬辰巳は一人暮らしだ。精神的に未熟なところがある彼を両親は鍛えたかったらしいのだが。

部屋を開けると、いつかも来たことがある、殺風景な部屋。

勉強机と、本棚に詰められた大量の本とベット。綺麗に整えられた部屋。

「あ」

突然有馬が声を漏らして机に駆け寄った。

そこには一枚の桃色の封筒。

「行く前は、なかったのに」

上ずった声を出しながらも有馬は封筒に手を伸ばす。

その横に草治も近づき、有馬が封筒を開いていくのを覗いた。そして恋文と同じように一枚の紙が有馬の手を滑って落ちた。

死ね 白井美香

その紙にはそう一言だけ書いてあった。

少年の友達 2

有馬辰巳と女装の格好をした草治はアパートに誰かが侵入した後がないかどうかをくまなく調べた。

ところが窓も開いていないし、ドアもカギがかかっていた。

「この白井って子は合鍵とか使ったのかな」

冷静に言った草治の前で有馬は顔をこわばらせる。

「どうしよう。俺はどうすればいい？ ねえどうすればいい？ ねえ俺はどうすればいい？」

死ねと書かれた紙を握りながら有馬は草治に尋ねてきた。彼は想定外の出来ごとにも非常に弱い。慌てふためく有馬を横目に草治は手紙を取り上げてをれをじっくりと見つめた。

有馬の字ではない。丸みを帯びていていわゆる女の字であるように草治にも思えた。

「有馬の自作自演という線は、低いのかな」

「あ、当たり前だろ。俺が自分宛に死ねって手紙書いてお前に見せて得なことはない」

呟いた草治に向けて有馬が怒鳴るように言ってきた。かなり怒っているようだ。

しかし草治自身も有馬を疑っているわけではない。彼は少し神経質なだけで基本的に人畜無害な良い奴だ。

ただ、彼の精神構造上、他人よりもストレスを抱えやすまっているため無意識にこのような自分宛の手紙を書いてしまうという可能性もありえた。多重人格というやつだ。

「それでも、文字の雰囲気まで変わる可能性はあるのだろうか」

「何か言ったか」

「いや」

有馬が怪訝な顔をしているのに気付く草治は思考を中断した。いずれにしろ、今考えても答えは出ない。彼の頭の回転はさほど良くないのだ。それよりは情報を集めるのが重要だろう。

「そう言えば、この白井さんからはいつから手紙が来ているんだ」

「そうだね、ここ3日くらい前から、いつも何故か密室状態の部屋の机の中に置いてある。手紙は机の引き出しにある」

少しは気の動転が治まったのか、落ち着きのある挙動で桃色の手紙を机から出してきた。

草治もそれを眺めてから口を開く。

「それで、3日よりも前でそれっぽい女の子にあたりしかったか」

「ここ一カ月ほど女と話をしたことはない」

有馬は胸を張って断言する。

一方で草治は有馬の言葉に呆れるでも同情するでもなく、手紙をめぐっていた。全て同じ文面で、好きだという言葉と名前だけしか書いていない。会いたいとも書いていない。それに有馬はこの少女の名前に覚えが無いと言っていた。この少女が何をしたいのか見当つかない。

草治は先ほど机の上に置いてあった手紙を確認する。愛の言葉が無い紙。

「いずれにしろ、死ねと送ってきたわけだ。手紙の中身が変わったのは女装した俺と有馬の姿を見てカップルだと思って嫉妬したのかな」

「やつぱりそうなのか。っていうか俺は大丈夫なのか。たまに聞くぞ、好きな女に刺されるって記事」

有馬が肩を震わせた。確かに言い知れぬ恐怖を草治も感じていた。

「それは怖いな。頑張れ有馬。俺はそろそろ帰るわ」

「ちよつと待てよ！俺を一人にしないで。ストーカーは俺のこと死ねって宣言したんだよ。それに部屋に侵入できる技術もある。だからしばらくお前の神社で暮らさせてくれよ」

「えー。家財政ピンチだから」

「もちろん金は払うから、頼む」

「仕方ない」

あまりに真剣な有馬の様子に草治が折れた。

現実問題、草治にとって問題なのは金銭問題のみ。ストーカーなど彼の神社にいる鬼と比べれば何て事は無いのだ。

「それなら、まずはここを出て神社に戻るぞ。あそこはたぶん安全だ」

他者に出入りされた痕跡のある部屋にいるのは草治も不気味だった。それに一刻も早く部屋を出たいが、再び女装で外を歩くのも嫌なので人が少ない朝が良い。

だが、有馬は困ったように頭を掻いて口を開けていた。草治は訝しげな視線を送った。

「おーい、早くしてくれ」

「あー、その。実は今から病院に行かなくちゃいけないんだ」

「病院？ああ、あれか前も言っていたな。精神安定剤だっけか。でもまだ6時だぞ」

以前、草治は有馬から彼が遺伝子による不出来を薬で補っていることを聞いたことがあった。

草治は部屋の壁に飾ってある黒と白の簡素な時計に目を向けた。普通の病院が営業するまでまだまだ時間がかかる。

目を点にするような草治に有馬は苦笑を浮かべた。

「俺は他人と話したり見られたりするのが苦痛なのを話したら、その病院の先生が6時くらいに来てくれれば薬を渡すって言うてくれたんだ」

「それなら俺は先に帰らせてもらっ。お前は病院によってから神社に来いよ」

草治が告げると有馬の眼が大きく見開かれた。まるで絶望するようなその迫力に草治も後ずさる。

「俺はストーカーに追われてるかもしれないんだよ。頼むから病院

まで来てくれよ」

「いや、この格好だと恥ずかしい」

「だったら俺の服貸すから」

「それだと俺の命にかかわる」

神社を出る前に赤蓮は微笑みながら言っていた。神社に戻るまで女装すれば下手に呪うのを軽減してくれると。逆にそれが出来なければ呪いを重くするとも。

頑なに神社に戻ることを主張する草治に有馬はため息を吐いた。

「分かった。病院まで付いてきてくれれば何でも言うこと聞くから」

「なんでも？」

「ああ、そうだ」

その言葉を聞いて草治は少し考えてからうなずいた。

「分かった。いいよ」

心なし草治の声は明るいものだった。

とりあえず今夜の食費は有馬に持ってもらって焼き肉でも食べに行こうかなどと考える。

有馬に連れてかれたのはそこそこ大きな総合病院だった。

清潔感のある白く新しい西洋風の建物。草治と有馬は病院の裏手に回り、裏口から入ることになった。

病院の裏手は閑散としていた。無造作に樹や雑草が生い茂っているが、赤井神社のように荒れたという印象を草治は感じなかった。むしろ敵かな雰囲気。

「そういえば、病院の裏手の土地にはもとは何かの祠があったらしいよ。でも病院を作るために祠を削ったって聞いた」

突然有馬がそんなことを呟いた。どうやら草治が病院の正面と裏で違和感を持ったのを察したようだった。それを聞いて草治もつまらなそうに呟くことにした。

「それは、罰あたりな話だ」

「そうかな。罰なんて非科学的な話を気にするよりもこうして病院を建てるほうがみんなのためになると思うけどね」

有馬が気楽に答えた。

草治は無言で有馬の顔を一瞥した。

しばらくして、二人は早朝も出入りが可能という裏口に着いた。

有馬がドアノブに手を伸ばす。

ところが、彼の手が届く前にドアが開かれた。

有馬がビクリと驚く。彼らしい反応だと草治は思った。ストーカー騒ぎなんかもありいつも以上に神経質になっているのかもしれない。ところがドアからは小柄な少年が出てきた。

帽子をかぶっているため、顔はよく視えない。

その少年を見て有馬からこわばったものが落ちたように草治は思えた。

「やあ、また会ったね」

有馬が柔らかい口調で少年に声をかけた。人見知りの有馬にしては親しげな様子に草治はわずかに感心した。

だが少年は帽子の間からわずかに有馬をにらむように見てからドアから出て、何も言わずに駆けて行った。

とてもじゃないが仲が良い風には視えない。

「あの子とはどういう関係だ」

「ああ、ずいぶん前にここで会ってね。迷っていたから病院の案内をしたことがあったんだ。それからもちろちら彼を見かける程度であまり話はしないけど、多分俺と同じような症状があると思うんだよね」

有馬は少年の後ろ姿を眺めていた。

早朝に病院に出入りをしているのならば、それなりの理由があるのだろう。

つまりは、有馬は同族意識を感じているのかもしれない、草治はそ

んなことを思った。

ふっと、草治は昔、有馬との話を思い出した。
彼は言っていた。

「人間はさ、遺伝子で全部決まるのが今のご時世の常識だろ。能力も性格もだいたいなら測ることができるといっての研究は高まっている。だから、優秀な遺伝子とそうでない遺伝子で試験をするって学校や遺伝子調査で適正を判断する会社もあるわけだ。そうになると、俺みたいな出来ない遺伝子を持つ奴は、どうすればいいんだろうな。できることならさ、今からでも遺伝子を変える技術を施してもらいたいよ」

悲しそうに彼はそう言っていた。

病院に美食う神

有馬が薬を貰うのを待合室で草治は待つことにした。営業前ということもあり、病院の中はとても静かだ。

深淵な海そこにいるのかのような光景。

草治は一人、待合室で何度も何度も時計を確認していた。

有馬の帰りが遅い。かれこれ30分以上も待っているのだ。10分くらい待っていてと有馬は言っていた。何かあったのかもしれないと思い至った頃だ。

ポン、と軽く草治の肩が叩かれた。

「似合ってますよその格好」

いつの間にか赤蓮が笑顔で草治の後ろに控えていた。ため息をつき草治が赤蓮から視線をそらす。

「何か、用か」

「ええ。一応、忠告をしに来ました。ここは危険です」
「危険？」

赤蓮のいつになく真剣な様子に草治は眉をあげた。

帰りが遅い有馬のことと関係があるのだろうか。

赤蓮は天真爛漫な笑顔を深めていく。

「そうです。危険です。ここにも神様が棲んでいます。ここにあった祠から出た神様が」

「神様って鬼姫みたいな？」

「まあ、そんなようなもんかもしれません」

草治の問いに赤蓮は曖昧に答えた。

まだ草治には神様と言われてもピンとこない。

だが、赤蓮の楽しそうな顔を見ると草治は胸を締め付けるような不安を感じた。

「その神様は、どんな性格をしているんだ」

「えーっと、私もよくは知りませんが、多分そこそ頭が良い神

様だと思います。だって、病院を隠れ蓑にして信者を増やしてますから。まあ人間を洗脳して神様のいいなりにするのはよくあることです」

いつもの調子で赤蓮が言うのを聞き草治は絶句した。

普段表情が変わらない草治の狼狽を見て赤蓮がくすくすと笑いだす。

「この病院は、言わば一つの宗教の総本山なのです。ここに通う患者の何割かはここの神様にだまされた信徒ですよ」

草治の身体に電撃が走ったかのような不安に立ち上がった。

有馬はどこにいる？

有馬を探そうと走り出そうと足を踏み出す。彼がどこに薬を貰いに行ったかは知っている。

おそらく埃一つ無い、真新しい廊下。だが、何故か息苦しさを草治は感じた。

ドアを吹き飛ばすように開け、有馬がいるはずの部屋に草治は入った。

だが、その部屋には有馬の姿は無く、変わりに髪の白い男が一人。

「待ってたよ。赤井の神社の魔術師」

白い男が草治を見て言った。

魔術師といった。つまり、彼も普通の人間ではない。草治は警戒を混ぜた声を出す。

「アンタがここの神様か？」

「そう、名はアララギ。他に質問があるかね」

アララギと名乗った神は不躰な視線を草治に向けてきた。その瞳はランランと輝いて草治を射抜く。

妙な圧力にしり込みしないように草治は拳を握りしめた。

「有馬辰巳を知っているか」

「知っている。彼は面白い子だ」

「有馬とアンタの関係は？」

「医者と患者の関係だ」

アララギの即答に草治は拍子抜けした表情になった。

赤蓮はこの患者はアララギにだまされているかもしれないと言っていた。

油断してはいけない。

「アンタは有馬に薬を渡しているらしいな」

草治が詰め寄るように言う。するとアララギの泰然とした様子から一転、子供のように自慢げな笑みを浮かべた。

「あはは。君は鋭いね。実は普通の薬ではないんだ」

その言葉を聞き、草治の顔がみるみる青くなる。

（もしかして有馬は麻薬の類の薬を使わされたのか）

薬の副作用のせいでストーカーなどの幻覚を感じていたのかもしれない。

草治は目の前の男をきつくにらむ。

「有馬にどんな薬を渡した。まさかヤバイものじゃないだろうな」

「ああ、ただのビタミン剤だよ。」

アララギはからかうような口調で言った。

草治はアララギの真意を見破ろうとするようにスツと目を細める。

「本当に、ビタミン剤だよ。俺の魔法を練りこんだビタミン剤だけど。その魔法もただ神経質を軽くするものだから、本当に心配無いよ」

アララギがそんなことを言ってきたが、草治には信用できなかった。現に、有馬の行方が分からない。

「彼が言っていることは本当ですよ」

草治が文句を言う前に、赤蓮の声が後ろから聞こえてきた。

彼女は先ほどのように笑顔を浮かべていたが、その右手には赤井に伝わる剣を握っている。

「アララギさんは、悪い神様ではありません」

「それなら、有馬はどこにいる」

草治が怒鳴るような声を出した。

しかし赤蓮が焦らすように口元に手を当てるだけ。

「有馬君は、私の魔術師と一緒にいる」

今度はアララギが苦笑交じりに言った。草治は神様のもとには魔術師が集まるということを以前鬼姫から聞いていた。時に魔術師は神の手伝いをし、時に神を制御する。そして鬼姫という神には赤井の魔術師がついている。

「アンタの魔術師が有馬に何の用だ」

「それは、本人に聞いてくれ。ちょうどこちらに来たみたいだからアララギが不敵な笑みを見せ、天井を指差した。

彼の指先の虚空から突如、数枚の紙が現れた。大きさは折り紙程度。どの折り紙にも少しだけ文字が書いてある。

色とりどりの折り紙に草治が唖然と立ち尽くす。その後ろから赤蓮は草治の右手を引いて叫んだ。

「斬ってください」

赤蓮の姿が溶けるように消えていく。草治の中に溶け込むように消えていく。

同時、草治の視界が変化した。

彼の瞳が紫へと変わり、周囲の魔法陣が視界に入る。

折り紙に刻まれた小さな魔法陣。その中心に文字が入っていた。火と書かれた赤い折り紙は火花を散らして炎を生んだ。他にも水、雷と書かれた文字達が発動を開始しようとしていた。

草治はすぐさま剣を抜いた。

それはあらゆる魔法を別の世界に帰す剣。

「帰れ」

一言叫び、草治は目の前の空間を一刀両断した。

剣は虚空を斬り赤いヒビが入るのを草治は見た。血の色にも似た赤いヒビは飢えた野犬が口を開くように大きく割れ、周囲の魔法を全て呑み込んだ。

アララギはほうつと感心したような声をあげた。

「アンタは有馬の何なの」

少女のような高い声が響いた。

草治が振り返った先には帽子をかぶった少年が近づいてきていた。先ほど裏口で会った少年だ。

少年は厳しい目つきで草治をにらんでいる。その瞳は殺気を宿していて彼がアララギの魔術師であろうことは明白だった。

「ねえ、アンタは有馬の彼女なの？」

少年が突然そんなことを聞いてきた。

それを聞いて草治は心底嫌そうな顔を見せた。そして今の自分は女の格好をしていることを思い出した。

とりあえず、少年の質問を否定しようと声を出そうとして気がついた。口が上手く動かない。

その替わり、彼の中から妙な声が出た。

「そうですよ。私は有馬さんの彼女ですよ」

赤蓮の声だ。

突然の発言に草治は違うと叫ぼうとしたが、声が出ない。

（赤蓮に声を封じられた）

げんなりとした気分を草治が味わっている、その正面で少年は一層剣呑な表情を作って口を開いた。

「そう。アンタが有馬の彼女ね」

呟いてから、少年は帽子を取った。肩まで伸びる茶髪があらわになる。

それを見て草治は目を丸くした。

（女だ）

「ボクは白井美香。アララギの魔術師だよ。許可なくボク達の領域に来るなんてどういいうつもりかな、魔術師のお嬢さん」

白井美香、有馬のストーカーをしていた少女の名だ。

魔術師の戦い

神と認められたモノたちにはいくつかの決まりがある。どれも明確な決まりではない。暗黙の決まりだ。

その一つ、それぞれの神が棲む領域に他の神は入ってはいけない、というものがある。

そのことを草治は鬼姫から聞いていた。だから、一応は魔術師の草治がアララギの土地に入るのには問題は無い。

だが、アララギの棲む場所に入った草治はその神の相方である白井美香にきつく睨まれていた。

「さて、君は何の用かな？それと、さっきの小さな神はどこに行ったの？」

白井が厳しい口調で問う。小さな神とは赤蓮のことだ。彼女は今、草治の中に入っている。いや、とり憑いている。

赤蓮は事実上、鬼姫の半身。神という括りに入るらしい。

なにはともあれ、草治達には敵対心は無い。それを伝えようと声を出そうとするが、その声が全く出ない。赤蓮が草治の喉を乗っ取っているのだ。

そして草治の中から赤蓮が己の声を出す。

「私達は赤井神社の魔術師なのです。ここには特に用は無いんですよ。ただ、有馬さんとデートしてただけで。それで有馬さんとはここに行ったのですか？」

「デート？」

赤蓮の言葉に白井は不快そうに呟いた。ちなみに今の草治は長い金髪のカツラを被り、誰がどのように見ても女の格好をしている。

ともかくにも白井美香は有馬辰巳の家に恋文を送っていたようだから今の赤蓮の、というか目の前の金髪女の言葉は許せるものではなかったのだろう。

（どういいうつもりだ。赤蓮）

『まあまあ、ご主人様の声は低いですから男であることがばれてしまいます。ここは私に任せてください』

唐突に草治の頭に赤蓮の声が響いた。別に、男だとばれて問題が無いのだが。

下手に白井を刺激してはいけないと草治は思ったが彼の中から赤蓮が無神経な声音を出してくる。

「白井さんは有馬さんのことが好きなんですか」

「好きじゃないわ」

白井は上ずった声で叫び声をあげた。白井の返答に草治は目を瞬かせる。

彼女は有馬辰巳のことが好きなのではないのか。

草治の疑問を彼の替わりに赤蓮が声を出す。

「好きじゃないなら、どうして好きです、なんて手紙送っていたのですか」

「は？ボクはそんな手紙、送ったことないよ」

白井がきっぱりと答えた。それを聞いて草治は頭の中で疑問符を浮かべる。

その後ろでアララギがため息を吐くのを草治は聞いた。

「まあ、みんな落ち着こう」

アララギが立ち上がり落ち着いた声を出す。

草治も視線だけアララギを移す。アララギは草治と赤蓮が勝手に彼の土地に入ってきたことに怒っている様子は無い。草治と赤蓮を敵意しているのは白井だけだ。嫉妬なのだろうか。

「美香、有馬君をどこにやったんだ？」

「結界に閉じ込めたよ。有馬はきつとこいつのスパイだったんだよ」
白井は人さし指を草治に向けかみ殺さんとするような目つきを向けてくる。

草治は彼女の話の方向に絶句する。もともと声は出せないのだから。どうやら白井は有馬を赤井神社の者と勘違いしているようだった。とにかくそれを否定しないと有馬が危ない。今も彼はよく分からん

結界に閉じ込められている。

「そうですよ。有馬さんにはアララギさんのスパイを頼んでいました」

「またもや赤蓮が楽しそうに偽りを口にした。草治には赤蓮の口を防ぐすべはない。」

「やつぱり、やつぱり、有馬は敵だったんだね。おかしいと思ったんだ。ボクみたいのに不必要に近づいてくるし、いっぱい話かけてくれたし」

そう言つて白井は歯を食いしばる。その様子はまるで友達に裏切られた子供のようにだ。

悔しがる白井の目元にはうつすらと涙も浮かんでいる。

と、白井は右手を真上に振りかざした。

「死ねよ」

逆切れした子供のように怒鳴り声をあげるとともに、周囲に魔法陣が書き込まれた折り紙がいくつも、会いあがった。

山のようなプリントをバラまけばこんな光景が見れるのかもしれない、そんなことを頭の隅で考えながら草治は魔法を帰す剣を振り切った。剣は虚空に真つ赤な亀裂を残し、亀裂が大きく広がっていく。そして全ての魔法を紅の亀裂が吸い込んでいく。

それは全ての埃を吸いつくす力強い掃除機のように。

「私に魔法は効きません。そして私たちは貴方達に害を与えるつもりはありません。有馬さんを返してください。さもないと、斬りますよ」

赤蓮が楽しそうにまるで遊びに行こうと誘うように物騒なことを言った。

（ちなみに、魔法を消したのは赤蓮ではなく俺だけだ）

自ずと鈍い光を放つ、魔法を無効化する得体のしれない剣に白井の視線が移る。

彼女の表情に現れたのは、明らかな怯え。

白井美香からは『ヤオヨロズ』のメンバーであつた天竜寺兄妹のよ

うな威圧感が無い。つまりは戦闘慣れしていないことも明白だった。だが、少女の意思は草治の想像の上を超えていた。

突如、白井は踵を返し、逃げるように部屋を飛び出した。少し遅れて草治も部屋を出て廊下に出た。

「あれえー、誰もいませんね」

赤蓮が能天気な声で言った。

草治も周囲を確認するが、彼の視界に入るのはどこまでも続くような真新しい廊下だけ。

「ああ、そんなに驚くことではないよ。ここは美香が貼った結界の中だから」

草治の後ろからアララギが彼の肩を叩いてきた。驚いて草治が振り返ると少しげんなりとした顔でアララギは頬を掻いている。

「私みたいな神様が人間世界で営業するには、現から離れたところがいいのさ」

「病院の裏手に結界で簡易な異界を造ったわけですか。まあそのほうが神としては営業しやすいですね。異界、というか結界の中なら何をやっても『ヤオヨロズ』どころか他の神にも分かりませんから」

何故か赤蓮が草治の替わりに答える。

「それで、貴方の魔術師はどこに行ったのですか」

「うーん、有馬君のとこだと思うよ。美香は有馬君のことが好きだったみたいだからね。本人は気がついてないのか、否定しているのか分からないけど、毎日無意識だけど魔法で「好き」と書かれた折り紙を送っていたようだからね。有馬君にだまされたと知って悔しかったんだね。下手したら有馬君を殺してしまうかもしれないね」

「さもありなんとアララギがとんでもないことを言った。アララギの話聞いて有馬のストーカー騒ぎの原因が分かったが、今の有馬の状態はかなり悪くなっているように草治には思えた。」

（赤蓮、どうするんだよ。お前のせいだぞ。どうにかしろ。そうじゃないと今回ばかりは怒るよ）

『大丈夫ですよ。私はご主人様が苦しむ姿にしか興味はありませんから』

（何が大丈夫だよ。お前のせいで有馬が誤解されて大変なことになってるっばいんだぞ）

『大丈夫ですつてば。むしろこうしたほうが、有馬さんと白井さんはお互いのことを理解できると思いますよ。だって』

「だって、魔法を使える者は己の魔法でしか自己を表現できませんから。私たちににとっては言葉で語るよりも魔法で語るほうが楽なんです」

赤蓮が草治の頭の中ではなく外にも聞こえるような声を出していた。その横でアララギは赤蓮が興味深いといわんばかりの視線をよこしてきた。

「なるほど、一理あるな。魔法の方が言葉などよりも伝えられるものが多い。しかし」

アララギは一度言葉を区切った。それから、誰もいない廊下の先を指差した。白井が現れる直前と同じように、彼の示した方向から何枚もの折り紙が蝶のようにひらひら寄ってきていた。それらの紙は廊下を埋め尽くす勢いで増えてきている。

「どうやら、美香はかなり動揺しているようだ。このままだと、この結界が爆発するよ」

アララギの冷静な声が響いた。

白い魔法の一族

どこを歩いても見慣れた廊下が続いていた。

いつまで歩いても草治が待つ場所に辿りつけず有馬辰巳は不気味なものを感じていた。

迷ったというわけでは無いはずなのだ。なぜなら廊下は一直線なのだから。

焦りすら辰巳が感じた時だった。彼の前に人影が現れた。

ショートヘアでボーイッシュな少女だ。

「よくも騙したな」

少女の剣呑な声に辰巳は訝しげな表情を作った。目の前の少女にとんと覚えが無いのだ。

「許さない。殺してやる」

突如少女は手を振り、瞬く間に大量の紙が蝶のように溢れるのを辰巳は視た。

辰巳は息をのみ、後ずさりするしかできなかった。

状況は理解できないが、確実に危険だということだけは彼には分かった。

大量の紙達はみるみるうちに増え続け、ほんのわずかな間に辰巳のもとにもたどり着いてしまった。

紙のいくつからは静電気が弾けているもの、煙が上がったりしているものがあるが、一番に辰巳の眼を引いたのは火花が飛び散り、病院の廊下に引火しているところだった。今はまだ大事に至っていないが、間もなく火は燃え上がるだろう。だが、出口が分からない。「その君、ここは危ないから逃げよう」

辰巳が声を張り上げるが少女は彼をにらむだけだった。少女の周りでは引火した炎が膨れ上がっていた。

仕方なく辰巳は少女めがけて走った。どこからともなく現れた何枚もの紙を踏みつけて。

5歩目くらいだろうか。

走り出した辰巳の頭に衝撃が走った。

バットで脳の中を直接殴られたのような重たい一撃だったが、衝撃と一緒に大量の声が辰巳の中で反響した。

『君と僕は友達だから』

優しい声音が辰巳の中で何度も流れる。

遅れて、彼の脳に見知らぬ光景が映り、様々な情報が駆け巡った。

幼いころから、少女は魔法を知っていた。

魔法はいつでも人間のすぐそばで眠っている。人間の世界と少しだけ離れた世界で魔法は寝ているのだ。別の世界にある魔法を自分の下に持つてこれる人間が魔術師なのだ。

魔法と近い人間は、普通の生活を送ることは出来ない。何故なら魔法は簡単に目を覚ましてしまうから。

彼らはすぐに感じてしまうのだ。どこをどう触れて、呼びかければ魔法が起きてしまうのか。

だから、いつも魔法が一般人の前で起きてしまわないように気をつけていないといけないのだ。

少女は学校でも、油断なく過ごした。

その所為だろうか、彼女に親しい人間は出来ない。誰もが少女と距離を取っていた。

時には無口の少女に対して悪口も聞こえてきた。

それを聞いて胸が締め付けられたけど彼女は聞こえないふりをすることにした。

その替わり彼女は白い魔法の使い手が祀るアララギ様を祀る役目に没頭した。

アララギ様は頭の良い神様だった。信者を造るために病院を隠れ蓑にすることにしたのだから。

神様は信者が多ければ多いほど力を増していく。

だから様々な神様が信者を増やそうと躍起になっているのだ。

しかし、アカラサマに魔法を使って奇跡を人間に見せびらかして信者を作るのは暗黙の禁止事項だ。

そんなことをすれば、他の神様達からハブにされてしまう。

だからどの神様もコツコツこっそりと奇跡を人間たちに見せて信者を作るのが常なのだ。

そしてアララギ様と少女も同じだ。病院で患者のために良く効く薬をコツコツと魔法で作って信頼を高めていくことを繰り返すのだ。

ある日、少女はアララギ様を訪れた少年に出会った。

裏口で結界の準備をしていた少女が明らかに挙動不審だったようで少年が遠慮がちに声をかけてきたのだ。

とても優しい声だと少女は思った。

少女はあわてて「迷った」と嘘を吐くと人のよさそうな少年はわざわざ病院を案内してくれた。

それが二人の出会いだ。

それから、少年は少女に会う度声をかけてくれた。

少女は少年を邪険に扱ったがそれでも少年はいつも話かけてくれた。

『何で付きまとうんだよ』

少女が尋ねたことがあった。

『君と僕は友達だから』

少年はおずおずと答えた。

それからだ。少女が少年のことしか考えられなくなったのは。

でも今日の朝、彼女は知ってしまった。その少年がどのだれかも知らない金髪の女と仲良く歩いているのを。

それを見て少女の胸がグチャグチャに掻きまわされた。少女にこの感情は理解できなかった。

だから白井美香は、決意した。あの少年を見つけたら。

様々な情報が過ぎ去った後、辰巳は自分の身体が倒れていることに気がついた。

すぐさま起き上がると、周囲の炎が一層ひどくなり黒い煙が立ち込めている。

口元に手を当て目を凝らすと先ほどの情報の中の少女、白井美香が頭を抱えてうずくまっているのに気がついた。

辰巳が駆け寄ると美香は震えていた。

「魔法が止まんない。どうしてどうしてどうして」

美香は苦しげに呻いている。

どうやら感情のままに魔法を発動させすぎたらしい。

「聞こえる？美香」

辰巳がそつと美香の肩に手をかけると美香の震えが止まった。

ゆっくりと美香の体重が辰巳に預けられていく。

「辰巳？どうして」

うるんだ瞳で美香は辰巳の瞳を真直ぐに見詰めた。

二人の周りでは黒煙と炎が膨れ上がっている。

辰巳は弱々しいけれども、穏やかな笑みを返した。

「俺はね。俺みたいないな人間の力になりたいんだ。先天的な問題で普通の生活が出来ない人の助けになりたいんだ」

それから少し頬を掻いた。

「いや、そんな理由じゃないかもしれない。単に、俺は君のことが好きなのかもしれない」

恥ずかしそうに言つて辰巳は美香を抱えようとした。

しかし美香は悲しそうに首を振り、辰巳の胸板を軽く押して距離を取った。

「有難う。でも、ボクの魔法はもう止まらない。だから逃げて」

美香の言葉が言い終わると同時に、彼女の周りから再びいくつもの紙の束が噴水のように舞いあがった。

しかも、その全てが爆発の魔法。紙から火花が飛び散り、魔法が展開しようとする刹那、美香の叫びが響き渡った。

「速く、逃げてええええええええ」

だが、辰巳は足を踏み出した。美香に向けて。そして辰巳は美香を爆発から守るように抱きしめる。

爆炎が辰巳を焼く前に、一筋の閃光が辰巳の胸を貫いた。

眩しくて目を閉じなくなるほどの光でありながら血の色にも似た鈍い閃光だ。

その閃光は音も無く、痛みもなく、ただ辰巳の身体を通過して一直線の軌跡を廊下に残していた。

空間そのものに赤いボールペンを引いたようなその光は、ゆっくりとその幅を広げていた。

まるで生き物が口を開くように。

その口の中は真っ黒だった。今まで見たことが無い暗黒の色は閃光が通過した有馬辰巳の中にも横たわっている。身体に痛みは無いが辰巳の視線は暗黒に引き込まれる。それは、先ほど彼が知った魔法の世界だ。全ての色の魔法が混ざり、真っ黒になった魔法の世界の光景。

彼の視線と同じく、周囲でうごめく紙も、燃え盛る炎と黒煙、更には病院の廊下も天井も風景全てがものすごい速さで暗黒に引き込まれていった。

数秒で全てを暗黒は吸い込み、暗黒の空間はゆっくりと閉じて行った。

まるで何も無かったかのように。

そして辰巳は自分がいるのは建物の中ではなく外であることに気がついた。

「疲れた」

辰巳の後ろから聞きなれたため息交じりの声が聞こえてきた。

すぐさま振り向くと彼の友達の赤井草治が陰気な顔をして立っていた。未だ女装の姿をしているが。

彼の横には辰巳の主治医のアララギと、草治の親戚だと紹介された赤蓮が立っていた。

草治と対照的な元気な顔の赤蓮が草治が持っている剣をぺちぺち叩いている。

「赤井の剣の効果範囲は刃の届く範囲のみなのです。だけど、病院にかかっていた結界という連続したモノになら例外的に魔法を帰す亀裂を入れることができるんです」

「ああ、そう」

赤蓮が何か説明しているが、草治は気のない返事をよこすだけだった。

それから彼は辰巳に視線を投げかけた。

「悪かったな。変なことに巻き込んで」

謝罪するような口調で草治が言った。

それだけで辰巳には分かった。草治も魔法に関わる人間なのだと。

「いや、巻き込んだのは俺だ。それに、いろいろなことが分かった」
そう言つて辰巳は彼にしな垂れかかるように眠りこむ美香の頭を撫でた。

アララギは微笑を浮かべて辰巳の前にやってきた。

「いやはや、辰巳君。君は恋の魔法にかかったようだね」

爽やかな笑顔を振りまいてアララギが言った。彼の隣りで草治はひきつった表情でアララギを見詰めている。その視線に気付きアララギは苦笑を見せた。

「あはは。これは比喻では無いよ。美香の使う白い魔法はどんな魔

法も使えるところが利点なんだ。火の魔法も風の魔法も千里眼の魔法も、そして人の心に影響させる魔法もね」

そう言つてアララギはウインクまでしてきた。

辰巳は苦笑いをしながら口を開く。

「それって、俺の家に届いていた「好きです」って手紙のことですか」

「どうだろうね。それは微妙かな。美香は辰巳君を無意識のうちに千里眼で捉えてからさらには魔法を送っていたみたいだけど、物理的に距離が遠いほど効果は薄いから。それよりも、さっきの騒ぎで変な紙を踏んだりしなかったかい？」

アララギが尋てきた。

しかし辰巳には踏みつけた紙を確認している暇は無かった。

必死に先ほどの状況を思い出そうとする辰巳にアララギはもう一つ質問した。

「それでは、頭にガツンとした衝撃はなかったかい？」

「あー、そういうえはあったかも」

辰巳は美香に近づく時、突如美香の情報が頭に流れてきたのを思い出した。

「きつとその時に変な魔法にかけられたんだよ。白い魔法使いは大人になるまで魔法を暴走させることが多いから。そこで提案なんだが、その魔法を私が取つてあげよう」

「あーいいです」

アララギの申し出を辰巳は断つた。アララギだけでなく草治も驚きの表情を見せるなかで辰巳は頭を掻いた。

「下手に心を動かされるのはちょっと怖いから」

辰巳があははと笑いながら答えるのを草治は無言で見詰っていた。

有馬辰巳のごたごたから早くも一週間が経過した頃、久しぶりに辰巳は学園に登校してきた。

たいてい学園で一人で休み時間も昼も過ごしている草治としては数少ない友達の辰巳がいれば学園で孤立できると喜んだりもした。教室で落ちあつた辰巳に草治は茶化すように言った。

「一か月ぶりの登校はどうだ？」

「ヤバイ。何か、注目されている気がする。もう帰りたい」

青い顔で答える有馬を見て草治は苦笑した。

「前も言ったけど、お前はもつと堂々としていて良いと思うぞ。顔も悪くないし勉強出来るんだから」

「いや、駄目だ。たとえば、今日の授業で当てられた場合、頭が真っ白になつてきちんと発言できるきがしない。そしてテンパル俺をクラスのみんなは笑ひ者にするに相違ない」

極端なネガティブな言葉だが、草治にもその心理的動きが分かるので神妙に頷く。

「ちよつと、ちよつと、辛気臭いよそこ」

草治と辰巳が黙りこんでいると、彼らの間に少女の声が割り込んできた。

その声に辰巳が顔をあげた。

「あれ？美香」

ぽかんと辰巳が口を開いているのを白井が笑顔で見下ろしていた。それを横目に草治は肩を竦めた。

「こいつ、お前を追つて転向してきたみたいだぞ」

「べ、べつに追つてきたわけじゃないよ」

白井があわてて手を振って否定している。

相変わらず、素直じゃない。草治がため息を吐く。

白井は辰巳に彼女がいないと知ってから、にこにこした表情で辰巳に近づくようになった。

「ボクは、友達の辰巳が学校をさぼらないように確認しにきたんだ」

胸を張って白井が宣言した。

それを聞いて有馬が勢いよく立ちあがる。

「嫌だよ。毎日学校なんて来たら、精神的に死んじゃう」

「うるさいなあ。そんな後ろ向きでどうするんだよ」

有馬と白井がぎゃあぎゃあ言い合っている。

白井美香は今もアララギと病院で働いている。そして有馬の白井に対する気持ちは、草治にはよく分らない。アララギの言ったように本当に恋愛感情なのかもしれないし、そうでは無いのかもしれない。いずれにしても有馬はよく喋るようになった。

草治は二人をいつものように陰気な瞳で眺める。

と、思わず息が漏れた。

それはいつものようなため息にも似ているが、見ようによって赤井草治が笑ったようでもあった。

竜の娘

赤井神社の参拝者は今日もゼロ。

赤蓮は祖父と買物に行き、赤井草治と鬼姫は二人だけ。

鬼姫は面白い番組が無いのかテレビのチャンネルを頻繁に変えている。

そんな時だった。

チャイムの音が家の中に鳴り響いた。

そこにいたのはスミレ色の髪を持つ中学生くらいの少女だった。眠たげな瞳もスミレ色だ。

少女はペコリと頭を下げたから、その両手でぶら下げた紙袋を草治にのばしてきた。

「どうぞ。お土産です」

その声は聞き逃してしまいそうなほどにか細い。草治も一応お辞儀を返す。

「ああ、どうも。それで君は？」

「初めまして、ツヅリと申します」

「俺は赤井草治。よろしくねツヅリ」

草治も自己紹介するとツヅリと名乗った少女はじとつとした視線を草治に向けてきた。それから黙りこみ草治を観察するように視るだけだった。

粘っこい視線に戸惑っているとツヅリがため息を吐いた。

「貴方のような陰気な男、ツヅリは嫌いです」

ツヅリの失礼極まりない発言をしたが草治の顔色は変わらない。このような暴言、彼はもう慣れっこだ。それでも年下に駄目だしされるのは傷つくが。

無然とした表情の草治から視線を外しツヅリは靴を脱いだ。

「お邪魔しますね」

眠そうな顔にも関わらずきつちりと靴を揃えてツヅリは草治の家に上がりこんだ。

説明の無いツヅリの行動に草治も眉を顰める。

「おい、どういう用件だ」

「大したことはありません」

そう言ってツヅリはトコトコと家の中に入っていった。

テレビに釘付けになっている鬼姫の横にツヅリは座り、彼女は頭を下げた。

「初めまして。鬼姫様。ツヅリはつい最近生まれた天竜の娘です」
ツヅリが名乗りを上げるが鬼姫は興味が無いのか、簡単に相槌を打っただけ。

ツヅリはツヅリで鬼姫の態度が気にならないのか、自己紹介を続けようと小さなお口を開いていく。

「先日、父上と大喧嘩をしてしまい、ツヅリは屋敷を出てきてしまったのです。それで行くあてが無くて困っているのです」

顔の筋肉を全く動かさずツヅリが言う。全く困っているように見えない。

とはいえ鬼姫はテレビに夢中なのかツヅリに一瞥すらよこさない。

草治も視るに見かねて、テレビの電源を消すことにした。というか、コンセントごと抜いてやった。

すると鬼姫から怒声が上がった。

「おい、草治。何をする」

「お前のお仲間が助けを求めているんだ。話くらい聞いてやれ」
「いや」

鬼姫はプイッと横を向く。子供のような態度に草治がため息を吐いた。

「話くらい聞いてやれ」

「嫌。第一、神様同士のなれ合いは暗黙の了解で禁止されているの」
「また、神様の決まりか」

草治はげんなりとした調子で呟いていからツヅリを見た。

ツヅリは今にも寝てしまいそうな眼差しを草治に向けている。

「そういえば、ツヅリはどうしてここに赤井神社に来たんだ？」

「この神社には『ヤオヨロズ』にもケンカを売る力の強い魔術師がいると聞きました。それは誰ですか」

『ヤオヨロズ』にケンカを売ったというのは天竜寺兄妹のことだろう。強い魔術師というのはピンとこないがその噂はおそらく草治のことだ。

おずおずと草治は手を挙げた。

すると顔の形を変えないままツヅリはため息を吐いた。

「まさか、貴方のような残念な男が期待していた赤い魔法の使い手とは」

やれやれとツヅリは首を振る。

「残念な男で悪かったな。それで、要するにはお前は家出して帰る家が無いということか？」

「まあそうです」

「それなら、ここにとまればいい」

草治が言くとツヅリの顔の筋肉がはじめて動いた。

目を丸くして、きょとんと草治を見上げる。

「良いのですか？」

「はあ？何言い出すんだよ。草治」

露骨に嫌そうな声を出したのは鬼姫だ。鬼姫は目を見開いて草治に喰ってかかる。

「草治、アンタ分かってないな。そんな簡単に他の神を、ましてや竜をすまわせるものじゃないんだよ」

「そう言っな。誰しも困った時はお互い様だ」

草治は諭すように言ってから鬼姫の角をぐいぐいと引っ張った。鬼姫はこの行為に弱い。

「分かった、分かったから角は引つ張るな」

鬼姫が顔を真つ赤にして草治を引き離そうとしてくる。

「うん、そういうことでしばらくここにいいよ。ツツリ」

草治が相変わらず疲れた声音でそう言った。

こうして赤井神社は天竜の娘を預かることを簡単に決めたのだった。

少年と竜

そこは海の底。

この星を照らす太陽の光が一切届くことのない暗黒の世界。

漆黒の風景に一人の男が浮かんでいる。

彼が魔法を知らぬタダビトであつたのなら、この闇に畏れを抱くだろう。

だが、彼は違う。むしろ彼はその場所が心地いといつも思っていた。なぜなら、ここは魔法の源流と色が似ているから。

広い意味で考えれば彼自身も魔法の源流から生誕していると考ええることも出来る。全ての竜族の母は魔法の源流だから。

魔法の源流。それは彼が現在存在する世界よりも上の次元に存在する魔法の母体。そして魔法の源流は純度の高い黒色をしている。

魔法の源流の在り方はある意味、彼が浮かぶ深海や宇宙の色と良く似ている。だから竜族は深海と宇宙に棲むのを好むのかもしれない。

しかし、今の彼は不快そうに眉を顰めていた。彼の瞳にはカマクラのような小さな祠と、その中で横たわる噛み切られた鎖が映っている。

「天竜の娘が逃げおつた」

吐き捨てるように呟いた。

彼はここの防人だ。

「ああ大変だ。海竜王様にこのことが知られたら大変だ。何としてもアレを連れ戻さないと」

防人は空を仰ぐように顔をあげた。

しかしそこには一切の光は無い。

鬱陶しいほどに照りつける太陽の光さんと降り注ぐ光景を赤井草治は聖葉学園の校舎からぼんやりと眺めていた。

もちろん今は授業中なのだが、彼はほとんど教壇に立つ教師を見ることは無い。

授業に出てもきちんと授業を聞かないから成績が悪いことを草治は理解している。

だが、彼にはそれらに対してほとんど興味を持てなかった。

彼の一番の問題として、興味関心の枯渇が著しいことがあげられる。好奇心などの心の動きは人間が向上してくために必要不可欠なものだが、彼の心の動きは乏しい。

一般的にみれば、この状態をうつ病というのかもしれないと草治はぼんやりと思った。

やる気の出ない草治の視線は自然と窓の外の風景を彷徨い、ほとんど頭を思考させることなく授業が終わるのが彼の日課だ。

ところが、草治の視線は一つの場所に固定されていた。

学園の中庭の隅のところに散らばるベンチの上、学園の中部の制服を着たツヅリという名の少女が座っていた。彼女は何の表情もうつさずにただ眩しそうに空をずっと仰いでいた。

そして授業の終わりを告げるチャイムが学園に響き、ツヅリは空を仰ぐのを止めた。

ツヅリが赤井神社に居候し始めて5日が立った。彼女は草治以上に感情を表に現さず口数も少ないが、数日前から草治の通う学園に見学に来ているようだった。一応、昼飯も作ってある。

「ねえ、草治。辰巳知らない？」

考え事をしていた草治の横から白井美香が声をかけてきた。

つい最近転校してきた白井はクールでかっこいいとクラスでも人気者だった。

白井の鋭い目つきに草治は肩を竦めた。

「有馬なら、授業が終わった直前早退したよ」

「はあ？あいつ何を考えてるんだよ。まだ昼だよ」

更に目を剣呑に光らせて白井は草治を睨みつけてきた。だが別に草治が悪いわけではないのだ。草治はげんなりとため息をはく。

「俺が知るわけないだろ」

「ふん。いいよ。今から連れ戻してくるから」

そう言つて彼女はものすごい勢いで教室から出て行つた。

その後ろ姿を草治はあきれ顔で眺める。

（あまり刺激するとまた、引きこもってしまうんじゃないか）

有馬辰巳はつい最近まで登校拒否をしていた。

だが最近は何日授業に出ている。もちろん今日のように途中で帰ってしまうことがほとんどだが、これは大きな進歩だと草治は思っている。

ツヅリは微動だにせずベンチに座っていた。

その横に草治も腰を下ろす。

「楽しいか？」

「はい、とても」

淡々とした調子でツヅリが言った。

この少女は表情は読めないが嘘を吐くことは無い。だから本当に楽しいのだろう。

草治はツヅリにお弁当を渡すと彼女はペコリと頭を下げた。受け取った。弁当を広げながらツヅリがしみじみと呟く。

「人間の世界というのは凄いですね。とても綺麗で、楽しいことがいっぱいあって」

「そんなに楽しいことばかりじゃないよ」

草治も苦笑交じりに答えた。するとツヅリがわずかに目を大きくして草治を見詰てきた。

「草治様はこの世界が楽しくないのですか？」

「そうでもないけど、出来れば学校とか行かないですと寝てたい

かな」

草治が何気なく言うとツツリは軽く首を動かして再び空を見上げた。

「ずっと何も無くて寝てるだけのもつまらないですよ」

「まあ、そうだね」

ツツリにつられて草治も鬱陶しいほどに眩しい空を仰ぐことにした。

ここは光で溢れすぎている。

海の底の竜

部屋のカーテンの隙間から白い光が入り込むころ草治は目を覚ました。

頭がずしりと枕の中にめり込んでいる、そんなことを思いながら布団からむくりと起き上がる。濁った瞳で恨めしそうに部屋に侵入してきた光をねめつけてから立ち上がる。カーテンを開くとム力つくの快晴が待っていた。嫌な一日の始まりだ。

ふらふらと草治は台所に向かう。鬼姫達に朝食を作ってやるためだ。特別料理が得意というわけではないが、鬼姫も赤蓮に言っても手伝ってくれない。そのため彼女たちには料理を作ってやるうとは思わないが、家の大黒柱である祖父の負担を減らすにはせめて家事くらいやらないといけないという草治なりの義務感だ。だが、何もしない赤蓮と鬼姫を見ているといらだたしいことこの上ない。どうしようもない不満をつらつらと考えて台所に入る。

「おはようございます」

草治が入るとエプロンを着たツヅリが台所でペコリとあいさつをしてきた。育ちの良さを感じさせるあいさつだった。少し呆気にとられていた草治にツヅリは事務的な口調で聞く。

「今日は料理というものを体験してみたいと思ったのですがよろしいでしょうか」

「ああいいよ。むしろ嬉しいくらいだ」

心持ち穏やかな声音を作った了承した。

ツヅリは黙礼した。

何の感情も無いような少女だが、意外とこの少女は好奇心が旺盛だった。学園にも見学に来るし、それだけでなく掃除や洗濯などの家事まで手伝ってくれる。更には家事を行っている時、彼女は「楽しいですね」と言って鼻歌を歌うこともある。

はじめは無表情のツヅリを天竜寺妃と同じような性格だと思ってい

たが中身はとても異なっているように感じた。

「どうかしましたか？」

考え事をしていた草治にツヅリがガラス玉のような瞳を向けてきた。こうして見ると、本性を出した妃とよく似ているのだが。

「どうもしない。それよりも、ツヅリは味噌汁を作ってくれ」

苦笑交じりに草治が言うつと、ツヅリはパタパタと鍋を持ってくる。このようにツヅリが手伝ってくれるため彼の日常はささやかな変化をもたらした。

ツヅリは包丁の使い方もままならないド素人だった。だが一人で料理をするよりも二人のほうが効率が良くて楽しい。ツヅリには危険が少ない味噌汁の管理を頼んでいた。草治が言ったように野菜や味噌を入れるという単調な作業だったがツヅリは鼻歌交じりに味噌汁をかき混ぜては香りを楽しんでいた。どうやら退屈ではなさそうだった。

妹がいたらこんな感じかもしれないと草治は思った。

「そろそろ味見してみな」

そう言つて味見用の皿をツヅリに渡す。

ツヅリは頷いてから皿を受け取り味噌汁を掬い少し呑み込んだ。料理への反応は無いが、草治に視線を移してきた。

「草治様はどう思いますか」

抑揚のない声でそう言つて皿を草治にかえしてきた。

香りも悪くない。草治もツヅリの作った汁を一口。

「ああ、なかなか美味しいよ。ツヅリは料理が上手だね」

そう言つてツヅリの頭を草治は撫でた。するとツヅリは胡乱な瞳で草治を見返した。

「本当ですか？」

「ああ、本当だ」

疑わしそうなツヅリを見返して草治も頷く。彼としては力の入った声を出したつもりだったが何分声が低すぎて「美味しかったよ」と

いうニュアンスが伝わらなかったのかもしれない。

ツヅリは憮然とした表情のままだが、彼女の頭の上に乗っている草治の手を振り払おうとはしなかった。

「この朝っぱらから何をやっているんだよ」

草治達の後ろから、冷たい声が飛んできた。背中に悪寒を感じて首を動かす。

そこには鬼姫が眉間にしわを寄せて立っていた。

何故かいつもに増して機嫌が悪い。鬼姫は口をとがらせて言う。

「草治のバーカ。変態」

それだけ言って鬼姫は踵を返した。わけが分からず草治は首を傾げる。その横でいつの間にかツヅリが黙々と白米を盛っていた。

鬼姫と赤蓮とツヅリと祖父と草治、家族全員がそろった朝食。おかずは昨日の残り物であるが、どの料理も美味しそうに湯気を出している。家族団欒の時間。

だが、その空気は張り詰めたもので満ちているように草治には感じた。

先ほどから鬼姫は草治とは目も合わせようとせずそっぽを向いている。

ツヅリは無表情。

そして赤蓮はツヅリを赤井神社に上げてから口を聞いてくれない。

勝手に他の神を領地に入れたからなのか草治が話しかけようとしても冷めた笑顔を向けてくるだけだ。

それから鈍感な祖父はそんな空気に気がつかないのか上手そうに味噌汁を啜っている。

「おお、うまいうまい」

「そうか。今日はツヅリが味噌汁を作ってくれたんだ」

祖父の声に草治が頷き、ツヅリに視線を移す。彼女の表情は変わら

ない。ここで少しでも照れ笑いでもしてくれたらこの空気が良くなるのだが。

それから何故かツツリの横に座っていた鬼姫は獣のような形相で草治を睨みつけている。その横では鬼姫と対照的な乾いた笑顔が赤蓮の顔に張り付いていた。

二人の様子がおかしくなったのは丁度、ツツリが来てからだ。二人はツツリに対して出てけとは言わない。むしろ一定の敬意すら払っているようにも草治には見えた。

「ところで草ちゃん」

「何だ。じいちゃん」

祖父の声に草治はツツリ達から視線を外した。

草治とは違う生気に満ちた目をした祖父が珍しく言いにくそうに口ごもっていた。

「あーその、来週に何があるか覚えているか」

「覚えているよ。母さんの命日だろ」

「覚えているならいいが」

バツが悪そうに祖父が頭を掻く。

草治の母、祖父の娘の麻美が死んだのは随分も前だ。草治は良く知らないが飛行機での事故が原因だったらしい。

「いずれにしろ、麻美の部屋は片付けたほうがいいぞ。あいつなら、化けて出てきてもおかしくない」

珍しく祖父がため息混じりにそんなことを言った。とてもではないが娘に対する評価では無い。

だが、赤蓮も祖父の言葉に何度も首を縦に振っている。

「それほどに、母親とはおっかないものなのですか？」

しみじみとした空気の中、意外にもツツリがそんなことを聞いてきた。真摯な瞳を草治に向けてきた。

あまり母親の記憶は草治には無いが、化けて出てくるようなおっかない人ではなかったように感じる。

「あまり、覚えてないよ」

「そうですか」

草治が肩をすくめて言うのと、ツヅリは若干肩を落としたように見えた。気のせいかもしれない。

ツヅリから祖父に顔を戻して草治は尋ねた。

「じいちゃん、今日は夕飯はいるの？」

「ああ、今日はいらない」

祖父はたいいてい大学での考古学でのフィールドワークとかで家にはいない。時には海外にまで足を伸ばし遺跡などを歩きまわっているようだ。本当に体力がある。

草治が呆れたような眼差しで祖父を眺めていると、赤井神社の呼び鈴が家に響いた。

「「お客さん」」

鬼姫と赤蓮が同時に呟いた。二人の反応に草治は嫌な予感がした。

家のドアを開く。草治は目の前の男を見て顔をひきつらせた。

「相変わらず何のひねりもなく芸術性が皆無の神社だ」

白髪の男、アララギが堂々と立っていた。アララギは遠慮が無い視線で草治をじろじろと眺める。

「相変わらず貴様からは邪気を感じるな」

「邪な気、と言われたのは初めてだ。それで？何の用だアララギ様。確か、許可なく神が他神の土地に出入りしちゃいけないんだろ。とつとと出てかないと払うよ」

草治は草治で乱暴な言葉使いで土地神にケンカを売る。

不倶戴天な人間の言葉にアララギは目を細め草治の後ろへと視線を動かした。

「貴様の魔術師は教育がなっていないな。言葉も悪いし、勉学の成績も悪く、社交性も低いそうではないか。鬼姫」

「それは、私の魔術師ではない。一時的な魔術師代理だ。草治の子供ができるまでのな」

草治の後ろから渋い顔で鬼姫が歩いてきた。

鬼姫は草治とは目を合わせずアララギに近づいていく。

「今日はよく来てくれた、アララギの神よ。まずは上がってくれ」

「ああ、御邪魔する」

「ちよつと待て！」

さくさくと話が進んでいく2つの神に草治が割り込んだ。

じとつとした瞳で草治はアララギと鬼姫を睨む。

「なんでアララギ様を簡単に家に入れてるんだよ。勝手に他の神をここに入れてはいけないってツツリの時にあれだけ反対していただろ」

「そうだけど、アララギは別にいいのよ。どうでも」

「そうだぞ、草治君。私は昨日、鬼姫に呼ばれたのだよ。電話で」

「電話？」

神様が電話をつかっていたことに驚き、草治が大げさなりアクションをしてしまった。

だが、よく考えてみれば鬼姫は力が弱っているらしいので人間の機器に頼ってしまうのも仕方がないかもしれない。

コホン、と咳払いをして草治は尋ねた。

「それで、どうしてアララギ様は呼ばれたの？」

「この娘のことですよ」

奥から、赤蓮がツツリを連れて顔を出してきた。その顔はとても楽しそうだった。二人に続き、祖父も何事かとやってきた。

赤蓮はツツリの手を引つ張り鬼姫の横に並ぶ。

「この娘は、とても嫌な縁を持っています」

また鬼姫と赤蓮が言葉を重ねた。

赤蓮は心底嬉しそうに。鬼姫は心底腹立たしそうに。こつして見ると二人は姉妹にも見えた。

啞然とする草治を一瞥してからアララギはツツリに不躰な視線をぶつけた。ツツリは口を閉じて何も言わない。ただ眠そうで誰とも目を合わせようとしない。

「ああ、これは初めてみる魔法の色の竜だ」

アララギが感心するような声を出した。

草治はアララギの言葉に目を瞬かせる。

魔法の色、それは真つ黒の色をした魔法の源流から人間の世界へと取り出した時に成す種類のことだ。

ちなみに赤井家の神主の使う魔法の種類は赤。俗に赤い魔法と呼ばれるものだ。これは視覚的に赤色の魔法を使うというわけではない。とはいえ、このことは草治もよく知らない。魔法の色がいくつあるのか、赤い魔法とはどんなものなのか。また、アララギが言うツツリの魔法の色のことも。

しかし、アララギは魔法の色のことは説明しようとはしなかった。ただ、笑みを深めていく。

「これは凄い、凄いよ。これはどに邪な竜を初めてみた」

目を見開きアララギは狂人のようにツツリを観察していく。

人格が変わったかのような土地神の様子に草治は君の悪さを感じた。

草治の祖父も若干引いている。

鬼姫と赤蓮だけが呆れたような視線を投げかけている。

「それで、その娘は何だ？」

今度は鬼姫だけがアララギに向けて口を開いた。

アララギはツツリから目を離さない。

「私もよくは知らない。だが風のうわさで聞いたことがある。少し前、天竜王が海竜王に娘の竜を人質に送ったと。そしてその天竜王の娘は酷く面白い魔法の色を備えているとか」

「その通りです」

ここでツツリが眠そうな顔を上げて言った。次にツツリは草治を真直ぐに見つめる。

「その通りです。ツツリは家出をしてきたものではありません。逃げてきたのです。海の竜達から」

ツツリが淡々と告げた。彼女の眠そうだった瞳が細められた。

「ツツリは人質として海の底に幽閉されていました。あそこは何も

することがありませんでした。だから夢を視ることが唯一の楽しみでした。その中で一番楽しかった夢は父上と母上に抱きあげてもらった夢です。幸せな夢でした。ツツリは幼いころから人質と育ったのでよく父上と母上のことは覚えていません。だから一度でいいから父上と母上に会いたいと思うようになりました」

ツツリは言葉を切った。一息の間、沈黙が訪れた。

「草治様、どうかツツリを父上と母上のもとまで連れて行つてはくれませんか」

「ああ、いいよ」

「絶対に駄目です」

嘆願するようなツツリの声の後、草治が了承する言葉と鬼姫と赤蓮の拒否を示す言葉が交錯した。

「草治！お前は竜のことを何も知らない癖に安請け合いをするな。

今までの相手は全て人間だったからよかったのよ。でも今度はヤバイ。下手をしたら海竜王と天竜王を同時に敵にまわすことになる！」
悲鳴に近い声で鬼姫が叫んだ。必死な鬼姫の態度に草治も言葉も詰まる。

鬼姫は突き刺さすように草治を睨んでいた。

「まあ、そのくらいにしてはくれませんか。鬼姫様」

呑気な声で祖父である源蔵が鬼姫に歩み寄っていく。

「貴方も分かっているでしょう？草治は麻美の息子なのです。あの子に似てオツムが弱いのです。だから何を言っても無駄ですよ」

「知っている！赤井の一族はいつでもこいつも無知な癖に危ないことに手を出そうとする。私はいつもそのしりぬぐいをさせられてきた。だが今回は危なすぎる」

「そう言わないでください。赤井神社のもっとうは困ったモノが来たら全力で手を伸ばすことなのではないですか」

「しかし、明らかに無理なことをするのは馬鹿げてる」

「ええ、ですから天竜王がどうのこうとは置いておいて、とりあ

えずもうち少し様子を見てみましょう」

源蔵は慣れた調子で鬼姫に語りかけた。

鬼姫は不承不承といったぐあいで頷いた。

鬼姫の横で赤蓮が笑顔を源蔵に向ける。

「さすがは、赤井神社の神主を4代に渡って過ごしただけはありますね」

赤井神社の神主の4代、草治とその母である麻美と源蔵の妻とその親のことだ。

赤井の血を継いではいないが赤井神社について最も詳しい人間は源蔵だ。

「君たちもそれで良いかな？」

源蔵は草治とアララギとツヅリに聞いてきた。

ツヅリはうなずいた。

「要するに海竜王の追ってがここに来るのが早いかな、もしくは天竜王の迎えがここに来るのが早いかなということですね」

賭けごとをしているようで面白いです、ツヅリは最後に呟いた。

青き竜の訪問

最初は、まだ夜なんだと思った。

それほどに眼の前は真っ暗だった。

いつもならカーテンの隙間から少しくらいなら光が入ってくるのに。ただ、ただ黒い景色しかない。彼はこの色を知っていた。

「魔法の源流の色と似ているな」

呟いた途端、背筋にぞつと冷たいものを感じた。それほどに眼の前の光景は畏怖を彼に感じさせた。

死を表現した景色。無を体現したかのような景色。いくらでも言い方は在るが、とにかく分かるとこは彼はここに居て良い存在では無い。

「そうですね。ここは魔法の本体に近い場所ですから」

声がした。ビクリと身体を震わせて声の主を探す。彼の横にツヅリが寝転んでいた。ツヅリは仰向けのまま彼を一瞥した。

「ようこそ、ツヅリの家に。旅のお方。何もおもてなし出来ませんが」

ツヅリは右手を掴み草治の腕を引っ張った。

良く見ると彼女の首には物々しい首輪がはめられていた。鎖から伸びた長い長い灰色の鎖は地面へと繋がっていた。寝むそんな瞳を細めてツヅリは草治を見つめてきた。

ツヅリは、監禁されていた。これが彼女がいつか言っていた海の底なのだろうか。

「お前は、どうしてここで鎖を繋がれているんだ？」

「それは、父上と母上のためです。天竜族と海竜族が友好に暮らしていくために、ツヅリは海竜王の人質としてここにいます」

珍しく、ツヅリは自慢するような口調で言った。

天竜だの、海竜の関係は云々は草治はよく知らない。だが、今のツ

ツリの監禁状態を見ると二つの龍族は仲が良くないことだけは分かった。おそらく、天竜王とやらが天竜達に何かをしようとした場合、ツツリに危害を加えるのだろう。

「一人で寂しくは無いのか？」

「ええ、寂しくはありません。だってツツリがこうすることで天竜族の皆が幸せになるのだから」

きっぱりとした口調でツツリは言った。その健気な様子に草治は胸に迫るものを感じた。

何としてもこの少女を父親と母親のどこまで連れて行ってあげよう。草治の口が自然と動く。

「君はとても、」

「君はとても立派だな」

そう言った時、眼の前は真つ暗ではなかった。

いつの間にか見慣れた、草治の部屋の夜の光景だった。天井から視線をずらしていきカーテンから電灯の光がわずかだが差し込むのを眺める。

「父上、母上」

突然、草治の腕がぐいつと引つ張られた。驚いて腕を引つ張ってくる主を見る。ツツリが布団の中で穏やかな顔で目を閉じて草治の腕を掴んでいる。ツツリは草治の部屋の隣を宛がってあるのだが、いつの間にか彼女は時々草治の横に来ては寝ているときが多い。

その所為で鬼姫からはロリコンと蔑まれていたのだが。

「ツツリは、一人でも寂しくありませんよ。だから安心して下さい、父上、母上」

寝言だろうか、ツツリの口から言葉が漏れた。

草治はツツリの頭を軽く撫でた。

「お前も安心するといい。俺達がお前を両親に会わせてやるから」

先日からツツリをどうするかについては赤井神社では頻繁に議論さ

れている。

ツヅリが言うには、彼女は天竜王に人質として過ごしていたところ、突然その拘束が解けた。理由は分からなかったらしい。本当は天竜達に告げなければいけないところだが、父親と母親に会える機会はこれからずつと先も今しかない。だから、彼女は逃げたと話した。ひとまず、アララギが天竜王にツヅリと会うために動いてもらっている。その間、ツヅリは目立つ行動は控えようという方針だ。

「仲がよろしいですねえ」

フワリと、赤蓮が草治の前に姿を現した。この少女は実体があるのに幽霊を名乗っている不思議な少女だった。

赤蓮が少しむっとした顔で草治を見下ろしている。だが、不機嫌そうな顔もすぐに一転し笑顔へと変わる。ツヅリと違い表情豊かな少女だ。

「お客さんですよ、ご主人様。赤井神社の神主様、いえ赤井神社の魔術師としてお出迎えしなければいけませんよ」

赤蓮が歌うように言って草治に赤井の剣を差しだしてきた。

草治の中でこれから起こることへの不安が広がった。

赤井神社の鳥居へと続く長い石の階段を、一人の男が登っていた。異様な風体の男だ。青い髪に鱗で覆われた肌。そして狐のように吊りあがった瞳は鳥居の下で立っている一人の少年を向いている。

少年、赤井草治の手元には物々しい剣が握られている。

「アンタは何者だ？」

少年に聞かれ、男は顔が裂けるほど口元を吊りあげた。

「俺は海竜族のレンメイというものだ。夜分遅くにわりいが、御邪魔させてもらうぜ」

レンメイの自己紹介に草治は眉を顰めた。海竜、つまりはツヅリを監禁している一族。

「今日は遅い。また今度にしてくれないか」

「そもいかねえよ。ここに居るんだろ？天竜王の娘が。俺はアレの見張りをやってたから分かるんだよ。アレの魔法の痕跡がここにある」

男が嫌らしい笑みを浮かべてきた。

草治はその笑みに嫌悪の印象を抱いた。それでも落ち付いて草治は頭を整理する。まずは友好的に話しをするのがよいだろう。

「そうだ。ここにツヅリは居る。でも、少し待つてはくれないか。ツヅリは両親と会いたがっている。女の子がずっと海の底にいるのは可哀そうだろ。だから、」

「はあ？」

草治の切実な説得をレンメイは遮った。男は顔を怒りに歪ませていた。

「アレを天竜王に会わせるだと？そしたら、見張り役の俺はどうなる？下手したら殺されるんだぞ」

「でも、」

「うっぜえ。お前は人間で俺は竜。竜が人間に従う道理がどこにある？」

そう言つてレンメイは不気味な笑みを浮かべた。

草治は男の笑みを視て、剣を握る手に力を込めた。

彼は知っている。神の性格を。竜も神と似た性格なのだろう。だから分かった。男は草治を虫けらほどにしか思っていない。そして虫けらが彼の道を塞いだのだ、次にレンメイがどうするかは明白。

レンメイの髪が逆立っていく。

草治は剣を抜いた。

『結局、こうなりますか。勝ち目があるとは思えないんですけどね』

すでに赤蓮は草治の中に溶け込んでいた。

その時、草治の首筋に冷たいものが落ちてきた。雨だ。

『魔法の雨です』

「この雨は、俺の魔法で生み出しこの街を覆っている。この魔法があるかぎり俺は何をしても人間達には気がつかれない」

レンメイが残忍な笑みを浮かべているのを見て、草治は慄然とした。今までも様々な魔法を視てきたが、これほどの規模の魔法は初めてだった。

雨の勢いが増していく。バケツをひっくり返したという表現が相應しいほどの大雨へと変化していく。

「少しは楽しませろよ、赤い魔法の使い手」

レンメイの手元へと周囲の雨が集まり出した。集まった水はまるで生き物のようになくねと動きながら伸びていく。そうして彼の手元へと電柱の如き大きな水の槍が出来あがるのを草治は茫然として眺めた。

竜と人の戦い

雨の音は真夜中の全ての音をかき消す勢いで周囲を満たしている。これほどの雨では外に出ようと思う者は少ないだろう。そんな中、傘もささずに対峙する二つの人影があつた。

レンメイと名乗った青い鱗を持った男は水柱を軽々と持ち上げて、ニタリと気色の悪い笑みを浮かべた。水柱を天高く掲げ、男は振り下ろした。しかしそれは草治に向けられたものではなかった。階段の両脇の急斜面に叩き落とされた。

水柱によって斜面から大量の土が抉られた。

レンメイは薄笑いで草治の様子を見て楽しんでいる。

あんなものを人間が喰らえばひとたまりもない。

『あの水柱も魔法なので、赤井の剣には効きません。ですが』
「分かつている。この剣の能力は奥の手だ。ここぞという時に使うべきだな」

草治が軽く頷く。その瞳に恐れは無い。剣が人の姿をした竜の喉元へと向けられる。

「神話の世に近い時代の勇者や英雄ならばともかく、人が竜に剣を向けるとは。愚かだなあ」

叩きつけた水柱をレンメイは再び持ち上げた。

巨大な魔法に目を逸らさずに草治は剣に力を込める。

草治の退く意思が無い瞳を受けて、レンメイは笑みを深める。

「だが、嬉しいねえ。面白いねえ。お前は面白い人間だ。今の御時世、人間も神も全員話合いでしか物事を決めようとしなない。神も他の神から疎外されるのを恐れて大っぴらには暴れることはしない、そんなお利口さんばかりだ。やっぱり、分かりあうためにはお互いの魔法をぶつけて命を取り合うのが一番だよなあ」
レンメイが陶醉した口調で語りかける。

力のあるモノ達は戦いに飢えている。鬼姫もそうだった。草治は言葉で語るのが上手では無い。だから、彼も己を伝えるために剣を構えている。

二つの殺気が頂点に達した時、レンメイが水柱を草治に振り下ろした。

車など軽々と粉碎できるほどの魔法の槍に対して、草治は剣の先端を掲げた。

そして迫りくる水柱が草治の剣の間合いに入った刹那。細長い水の棒の右横に剣を滑り込ませ、そのまま巧みに剣を左に引いて水柱の軌道を流した。

水柱は草治の左に落ち、石の階段を粉碎した。石の破片が飛び散ることを歯牙にもかけず、雨によって足場の悪さも気にせずレンメイへと向かって草治は階段を飛び降りた。

リーチが長い武器を相手にする場合、そのリーチに入ってしまったえばいい。それならばカウンターを狙われる危険も少ない。

竜の力のほどは草治には分からないからこそ相手の底がある程度知れるまでは剣の機能は使わないほうがいい。そして、そうすると草治に残された戦術は魔法無しの剣技しか無い。

レンメイは不敵な笑みで落ちてきた草治を見ていた。彼は水柱から手を離し、また別の武器を作る為か再び周囲の水を集め出している。『竜族は少し斬られても死ぬことはありません。だから斬って下さい』

「分かっている」

草治は上段から剣を叩きこんだ。時を同じくして、レンメイも右手を掲げ現在進行中で作成されている水の魔法を草治へと伸ばす。水の魔法は細長く、鋭利に尖っていきこちらも剣が完成する。

二つの剣がぶつかり、鉄と鉄がぶつかる音が雨の音を吹き飛ばす。

刀身も柄も青い西洋風の剣がレンメイの右手に握られている。

レンメイが腕を振るい、草治を吹き飛ばす。

音もなく草治は鳥居の下へと着地する。

『もとは水とはいえ、硬度は下手したら普通の鉄よりも硬いかもしれませんよ』

「だが、まだ大丈夫だ」

言いながら息を整えようとする。

しかし、レンメイはその時間すらも与えない。レンメイは階段を駆け上がり草治に向かって剣を振るう。

たまらず草治は後退しながらレンメイの剣の嵐を防いでいく。

「これが人間の戦の仕方なのだろう？」

嘲笑い、レンメイは剣を浴びせかける。竜の怪力のためか、その一つ一つはとんでもなく重たい。

草治はレンメイの動きを視界に収め、時に斬撃を受け流し、時に剣の閃光から身をずらす。

『ああ、結局赤井神社へと入ってしまいましたかー』

赤蓮が間の抜けた声を出す。が後退を続ける草治にはそんな余裕は一切ない。

レンメイと草治の周囲で水しぶきを上げる。

その戦いは神々しいものがあつた。

竜と人間は踊るように剣を振るい続ける。

「は、はははははははは」

竜が笑い声を上げていた。

だがそこには隙は無い。

「なあ、昔話で言うなら、俺は悪い竜でお前は捕えられた姫を助ける勇敢な魔術師というところか？」

レンメイの質問に草治は答えない。答えている暇が無い。もう、彼には本当に余裕が無かつた。それほどに竜の剣技は凄まじい。

水の剣が真横から草治の胴体を狙い定める。すかさず草治が上半身を捻って飛び上がった。直後足元すれすれの位置を青き刀身が通過した。

草治は空中で見事な一回転を魅せる。

草治と共に赤井の剣も見事な弧を描く。赤い軌跡を空間に残して。赤井の剣が空間を切り裂き、そこから黒い世界が姿を僅かに見せていく。

「魔法の源流、だと？」

レンメイは目を見開き、その光景を見ていた。

草治の近くを満たす雨の魔法も水の剣の魔法もその全てが草治の剣によって広げられた魔法の源流へと一瞬で吸い込まれていく。

驚愕したレンメイに訪れる僅かな隙。

それを見逃さずに空中で勢いをつけた草治は剣でレンメイを真横に斬りつけた。

まるで水を斬ったかのような感触。ぱしゃりという音がしてレンメイから水しぶきが舞い上がった。

「え？」

驚きの声を上げる草治。そしてそれを見て気味の悪い笑みを受けべるレンメイ。

レンメイは拳を固め、草治へと向かって叩きつけた。

草治はまたもや吹き飛ばされ赤井神社の境内で受け身を取って転がる。

せき込み、草治は息を切らす。

それでも剣を強く握り締める。

はやく立たないと、殺される。

「そこまでだ」

突如、この神社の主を自称する鬼姫の声が響き渡った。

鬼姫は神社の前に立っていた。その横ではツヅリも立っている。

「そこまでだ。天竜が来る前に海竜に見つかった。私達いできることはもう無い。この茶番も終わりだ」

厳しい口調で鬼姫がそう言った。草治は反論できない。

草治とツヅリは鬼姫たちと一つの約束していた。

「竜族のうちどちらか一方でもこの神社に入ったほうにツヅリを引き渡す、そういう約束でしたよね」

ツヅリが肩をすくめて言った。少しも落胆しているようには見えな
いが、その心は深い悲しみがあるのだらうと草治は感じた。思わず
歯を食いしばる。

『別に、貴方にとってもツヅリさんにとっても今までどりの生活
に戻るだけです。ご主人様が悔やむことではありません』

赤蓮が慰めるようなことを言ってきた。だが草治はその言葉に納得
できなかった。

ツヅリはこれからずっと一人であの暗い世界に閉じ込められるのだ
ろうか。

『竜族と人間の感覚は違います。むしろ、魔法の源流に近い世界
は竜族にとっては望ましいとかんじるモノの方が多いと思いますよ』
草治の頭でまたもや赤蓮の言葉が聞こえてきた。草治は何も言わず
剣から力を抜いた。

赤蓮の言葉をうのみにするわけではないが、今の彼にはどうしうも
できない。

ツヅリがゆっくりとレンメイへと歩き出す姿を黙って見届ける。

「なんだ、意外に従順だな」

毒気を抜かれたと言わんばかりにレンメイは呆れたように言った。
近づいてくるツヅリにレンメイは不思議そうな顔すら向ける。

「俺はお前が海の底から逃げたことが分かった時、お前が天竜族に
復讐にでもしにいくとも思っていたんだが、どうやらお前は天竜
族にはそれほど恨みが無いようだな」

レンメイの言葉をツヅリは鼻で笑った。

草治にも彼女の言わんとすることは理解できた。何故なら彼女は天
竜族を愛しているから。

毅然とした態度でツヅリが口を開く。

「確かにツヅリが海底で天竜王の人質となることは楽しいことでは
ありません。しかしそうすることで天竜と海竜は友好的に過ごすこ

とができるのです。むしろ私はこの役目に誇りすら持っています」

ツツリの答えに対してレンメイは目を丸くした。
じろじろとツツリを見まし、次の瞬間、腹を抱えた。

「くっははははははははははははははは」

再びレンメイが笑いだした。

今の話のどこに笑いの要素があったのかと呆れた視線を草治は向ける。先ほども草治との剣と剣のぶつかり合いで大笑いしていたし。ところがレンメイは周囲の視線が気にならないのか爆笑を続ける。

「あ、ははははは。お前とは話をしたことがなかったが、ずっと不思議だったんだ。どうしておとなしく捕まっているのかと」

「だから、ツヅリはこの役目を誇りに思っていると言っています。ツヅリの他にこの役目は務まらないとみんな言っていました」

少し語気を強めてツヅリが言った。

それからレンメイはひとときしり笑い終えたのか顔を上げる。

半笑いのまま彼はツツリへと細められた瞳を向けた。

「お前は勘違いしているぞ。お前は、人質として天竜王へと預けられたのではない。ただ、邪魔だから天竜王はすてただけだ」

その時、ツヅリの表情がこわばるのを草治は見た。

黒き竜

場所は移り替わり、豪勢な間。天竜寺財閥の会長である天竜寺明久は風格のある男だ。切れめの瞳に張りのある髪をオールバックにして整えている。巨大な窓ガラスの向こうに広がる雨の景色をみていた。

「これは、雨じゃないな」

明久は一人呟いた。

彼は『ヤオヨロズ』という魔人搜索のメンバーの一人でもあるため、不自然な現象については鼻が利く。

「魔法の雨、というところか。しかし、並の魔人では無いな。規模が巨大すぎるぞ。また面倒なことになっているんじゃないだろうな」
明久は後に立つ、ここには居てはいけない男に話しかけた。

「ああ、とてつもなく面倒なことになっている。我ら神々と、お前達『ヤオヨロズ』の存在すら揺るがすような事態だ」

白髪の男、アララギは厳めしい口調で答えた。

アララギも一応は『ヤオヨロズ』から視れば魔人の分類に分けられる。つまりはアララギも標的の一人なのだが、彼には危機感はない。ない。

その様子に明久は軽く息を吐いた。

「君がここに来ること事態が、面倒なのだがね」

「大丈夫さ。私も並の神では無いからね」

「それは知っているさ。そうでもなければ、私は君と密かに癒着しないさ」

「ああ、そうだね。私達、神々はお前達『ヤオヨロズ』の上層部には感謝しているよ。何だかんだで時に神を保護し、時に神の存在を隠してくれる」

「感謝される覚えはないさ。力のある神に手を出せば私達『ヤオヨロズ』もタダではすまないからね」

『ヤオヨロズ』の多くの者は、全ての異質な存在を集めることを目的としている。だが、手を出してよい異質な存在と手を出してはいけない存在があることを知っている。だからこそ、その分別がある『ヤオヨロズ』の上層部の者は手を出してはいけない異質な存在と裏で通じている。

このことは部下であり、戸籍上は養子となっている天竜寺妃達は知らない。

明久は彼女達が手を出してはいけないモノと鉢合わせしないようにも注意している。

「それで？ 結局、この雨は何なのだ？」

「まあ、人払いの魔法の一種だよ。私もよく知らないが、おそらく明久殿、お前にはまた工面してもらうことになりそうだ」
アララギは申し訳なさそうな顔を浮かべた。

雨は降り続く。

「ツヅリが、父上達に捨てられた？ そんなことがあるものか！」
吠えるような勢いでツヅリが叫んだ。

ツヅリの声は草治の心へと入り込む。彼はツヅリがどれほど両親のことを思っているのかを知っていたから。

レンメイはツヅリの反応に口元を吊り上げた。

「本当だぜ。だってお前の存在は異常すぎるんだよ」
「異常？」

「お前は魔法の源流の色を濃く受けすぎた。魔法の源流は全知全能を所有し、我らの母なる存在でもあるが、その存在自体は忌み嫌われた「死」を意味する力だ。だからお前は捨てられたんだ」

高笑いするレンメイは吐き捨てる。

ツヅリはそれを受け入れるのを拒むように首を振る。
ところがツヅリに向かって鬼姫が首を振る。

「その青い竜の言葉は間違っていない。ツヅリは、魔法の源流の一部と言っても良い。魔法はある程度ろ過されないとこの世界にとつては危険すぎるんだ」

鬼姫も容赦なく言った。

ツヅリは更に青ざめ、首を振るのを止めた。

敵対しているはずの海竜族に言われるのならまだしも、神である鬼姫の言葉はツヅリに重たく響いたようだった。

草治も鬼姫の言葉を否定できなかった。彼自身も魔法の源流というもの垣間見ているから知っていた。魔法の全て、それはあらゆる知識、力、命、存在の全てがゴチャゴチャにグチャグチャに混ざりあい全知全能でありながら死の気配を含んでいるのだ。

草治も、魔法の源流が怖ろしいと思った。

「そんな、父上と母上はそんなこと一言も言っていなかった」

「それはお前を不憫に思ったからだろ」

鬼姫がいくらか険を顰めた。

彼女は彼女でツヅリのことに同情しているようではあった。けれどもその優しさはツヅリには届かない。そして、更に彼女の心を切り刻む言葉が飛んでくる。

「いいや、違うよ。天竜族達はお前が怒り狂うのが怖かったからだよ。お前が恐ろしかったんだよ。だから、天竜はみんな優しい顔を張り着けてお前に接していたんだよ」

嘲笑い、嘲笑し、レンメイが言った。

レンメイは雨が降り続く曇り空へと両手を広げた。

「でも、海竜族は違う。ただ魔法の量が巨大な一族では無い。俺達は、どんな呪いも魔法をも撥ね退ける巧みな魔法の技術がある。だから、天竜王は海竜王にお前というイカレタ竜を殺すのを頼み込んだんだ」

不気味な笑みが顔に広がっていく。

「でも、お前の魔法は俺達にとつても危険すぎたんだよ。だから、お前みたいなのは海底で永遠を生きているのが正しいんだよ」

暗い笑みでレンメイが言った。

そしてその顔を視て、ツツリの顔にも暗い笑みが生まれた。まるでレンメイの表情が伝染したかのように。

息を殺し、ツツリが俯いて笑い声を漏らし出した。

「ああ、よかった。そうですね、ツツリは皆にとって邪魔だったのですね。人質ではなかったのですね」

声も暗い。

「それではもう、我慢する必要はありません。もう、何をしても父上にも母上にも天竜族のみんなにも迷惑はかからないのですね」

今までずっと眠そうな顔をしていたツツリであつたが、壊れたような、妖しい笑みで彼女は言う。

レンメイはツツリの言葉に怪訝そうな顔を作った。

鬼姫も眉を顰める。

ツツリの身体を真黒の魔法陣が取り巻いた。

その魔法の色と構成を視て、鬼姫と草治は絶句し、レンメイは顔を引きつらせた。

「どうして、お前は魔法が使えるんだ？封じられているはずじゃないのか？」

「っは。まさか、貴方達の魔法でツツリの力を封じることが出来ていたと思つてたのですか？」

ツツリが噴き出しながら言うと同時に、彼女を取り巻いていた魔法陣から黒い火が溢れだした。黒い炎はツツリに引火し、彼女に燃え盛った。

炎はツツリの色を黒色に変えていく。

黒い炎はのびあがり、天へと登る。

炎の先が二つに裂け、巨大な竜の頭が生まれ、次第に黒い竜の姿を造っていく。

あらゆる魔法の流派においても、竜を模倣した魔法は最高位のものとして崇められている。以前も、天竜寺円治という青年が竜に近い

炎の蛇の魔法を使ったことがあった。竜という存在自体が魔法から生まれ、意思を得た超精密構成の魔法的存在だ。だからこそ、人間達も竜の魔法を真似しやすいのかもしれない。

その中でも黒い竜の魔法は人が生まれて以来、数人の魔術師しか使える者はいなかった。そして眼の前で、黒き竜の魔法の原型が赤井神社の上空で咆哮を上げた。

黒き竜はそこのおぞましいアギトから黒い炎の塊を吐きだした。いや、黒い炎では無い。魔法の源流そのものの塊が赤井神社めがけて放たれた。

耳をつんざく爆撃音が神社に落ちる前。鬼姫から黄金の粉が飛び散る。

鬼姫は化け物染みた跳躍で草治を抱え、空高く飛び上がった。雨音をかき消す黒い爆音の中、とり残されたレンメイの悲鳴が草治の耳に聞こえてきた。

空を駆ける鬼姫に抱えられ、草治が真下を俯瞰すると神社にポカリと大きく深い穴が空いていた。最初からそこに何も無かったように大地が消えている。草治は慄然として身体を強張らせる。

鬼姫は鬼姫で己の寢床を壊され、怒りで顔を強張らせる。

「よくも、よくも私の神社を」

目を蘭欄と光らせ、鬼姫が黒き竜へと成ったツヅリを睨む。

鬼姫の怒気を受け、赤井神社とその背後に佇む赤井の山から一斉に黄金の光の粒が飛び立った。赤井神社の景色が黄金に染まる。その光の粒の一つ一つは小説の文字ほどの大きさの魔法の文字。魔法を良く知る者ならばこの魔法を視ておののくだろう。黄金の魔法が未だに生きているのだから。

黒い竜からはツヅリのような静かな気配は無かった。むしろその瞳は知性の欠片すら感じられない。飢えた瞳で草治と鬼姫を睨んでいる。

黒き竜は禍々しき魔法の身体を携え、鬼の姫は黄金の魔法を纏い対

峙する。

前代未聞、互いに異端の中の異端な竜と鬼の闘いが幕を開けた。

黄金の魔法と暗黒の魔法

赤井神社の上空。

雨雲を突き破り、竜と鬼は澄みわたる夜空へと舞い上がる。

黒き竜は雨雲の上にどしりと座した。

草治は鬼姫の背に負ぶさり、彼女の角を掴んで態勢を整える。いつもなら角を掴むと騒ぎ出すのだがさすがに今は何も言わずに竜を睨んでいる。

「あの娘、だんだん魔法の量が増している。暴走しているのか」
鬼姫が舌打ちをした。

黒い竜は時間が立つにつれて大きくなっているということは草治も感じていた。つまり、あまり時間をかけて闘うのは上策では無いのだろう。

暗黒を纏う竜が獰猛な口を開いた。周囲に黒い、黒い球体が造られていく。その魔法の球を見て草治は息を飲む。

「あの魔法はやばいです。かなり源流に近い構成になっていますよ」
「」

赤蓮の能天気な声が救いだった。

それほどに竜の口から禍々しい気配が漂っている。

そして竜は上空を飛来する鬼姫に照準を合わせ、その黒い魔法を発射した。

その様は竜の形をした砲のようでもあった。爆音と共に黒い弾丸が迫る。黒い砲弾自体がそこらへんに聳えるビルよりも大きい。

「純粋な黒い魔法に少しでも触れば、人間の身体は消えてしまうでしょう。ですから気をつけて下さいねー」

切羽詰まらない赤蓮の言葉。

だが、これほど大きく速く高精度な魔法は赤井の剣で対処できる気がしない。

「ええ、実際のところ本当に大きな亀裂を剣で造らないと吸い込め

ないですよ』

「役に立たないね。アンタ達」

赤蓮と草治が頭の中で会話をしていると、鬼姫が声をはさんだ。彼女にも赤蓮の声が聞えるらしかった。さすがは半身同士というところか。

目前に迫った暗黒の弾丸に対して黄金の光の壁を鬼姫は造る。鬼姫は暗黒の方へと両手を開く。

「バラバラにしてやるわ」

鬼姫も、鬼の名に相応しく妖しい笑みを見せて己の魔法を振るった。暗黒と黄金がぶつかり合った。

二つの魔法を眼の前で感じ、草治は対照的だと思った。

鬼姫が使役する黄金の光は魔法という存在を極限まで分解した力。竜が司る暗黒は魔法という存在を極限まで組み合わせた力。

理論的に考えると、鬼姫にとって暗黒の魔法は最も分解する量が多い魔法だ。

つまり、鬼姫の方が不利なのではないか。

だが、以外にも暗黒と黄金の魔法は触れ合った途端、反発し合ったのかお互いに消しとんだ。どちらも同等分の魔法量が、痛み分けするように消えている。

魔法のレベルとしては同じなのかもしれない。

『いえ、私達が不利です』

「ああ、私達に勝ち目は無い。ツヅリを視ろ」

鬼姫が黒き竜を指し示す。竜のアギトからは再び暗黒の球が造られつつあった。

「あいつはいとも簡単に暗黒を造れるが、私は自分の鬼火を呼び出すのにけっこうな時間がかかる。先ほど消された鬼火を復活させようとするにも数時間はかかる」

鬼姫は自分の光を鬼火と表現しているが、眩い光は神々しく美しい。今も彼女の周りには赤井神社の敷地を覆い尽くせるほどの膨大な光が付き従っている。

しかし、その光も簡単に暗黒に消されてしまうとなると。

「結論を言っと、長期戦だと本当に勝ち目は無いということだな。でも、どうやって倒す」

草治が聞く。黒い竜の本体も純度は低いのかもしいないが巨大な暗黒の魔法なのだ。近付くことすら危険だ。

すると赤蓮がそれに答えた。

『それは大丈夫です。赤井の剣でツツリさんが纏う暗黒を吸い取るのです』

「あんな大量の暗黒をどうやって吸い込むんだ？」

『あの竜を構成する核に剣を当てれば、あるいは』

「核？」

『そうです。核というか魔法陣のことですけど、それを壊せばたいていの魔法は壊れます。あの、アララギさんが居た異空間のように』

以前、草治は巨大な異空間を造っていた魔法の全てを壊したことがあった。その決め手となったのは異空間を生み出していた魔法陣という核を壊しからに他ならない。

妙に納得するのを感じた。

「それで核ってどこだ？」

『さて、私的には彼女の頭を構成する魔法が偏っているように感じられるので多分そこかと』

赤蓮に言われ草治は竜の額を視たが特に変化があるようには感じなかった。草治の魔法を視る力はそれほど高くはないため彼女を信じてみるしかないのだが。

問題はもうやって近付くか。

草治はひとまず思考を止めた。なぜなら、黒い竜の口から再び砲弾が完成していたから。しかも4つも。その替わり、一発の大きさはそれほど大きくない。

「来るぞ」

草治が声を張った。

鬼はすぐさま空中で身を横に滑らせる。鬼姫は足元に黄金の波紋を残して水平に移動して離れる。

龍から黒い球が一発ずつ発射されていく。一発目の弾丸は鬼姫のすれすれを掠める。黒い魔法を身近で感じた草治の心臓が跳ね上がった。あまりにも禍々しい力を感じたのだ。

鬼姫も速度を上げて空を飛来する。あまりの速さに草治は息すら出ない。

空を縦横無尽に鬼姫は駆け、2発目、3発目の弾丸を巧みに避けていく。

だが、草治達の前に4発目の黒い弾丸が目前まで迫り来るのに気がついた。空のどこに動いても避けることが出来ない。

『この大きさなら問題ありません。斬って下さい』

草治は剣を振るった。血と同じ色の亀裂が空間に入り、その亀裂から黒い世界が現れる。

すれすれまで迫っていた丸太のような大きさの弾丸を草治の暗黒は口を開けて暗黒を吸い込もうとした。

ところが暗黒の魔法の威力、速さと量は赤蓮の予想を上回っていた。およそ半分もの暗黒は亀裂に吸い込まれることなく、鬼姫と草治に襲いかかった。

「ああ、っもう」

鬼姫が舌唇を噛み、黄金の光で残りの暗黒を相殺した。

「また、減ったじゃん。どうするのよ」

相殺された鬼火に目を細めて鬼姫が不平を言ってくる。

再び、龍から無数の弾丸の壁が放たれた。鬼は空を掛けながら弾丸をすれすれでかわす。時には大きい雲に隠れ、その雲も弾丸に吹き飛ばされる。鬼姫は自身の鬼火を浪費して直撃コースの弾丸を防ぐ。まさに防戦一方。

「何か遠距離から出来る攻撃ないの？」

草治が怒鳴る。

「アホが。鬼の私は基本的に肉弾戦しかない」

鬼も怒鳴り返した。逃げるしかできない所為か二人とも機嫌が悪い。
『いやいや、一つだけありますよお』

赤蓮の声に鬼姫は訝しげな顔を造りながら空を蹴って暗黒から逃げる。どうやら彼女にも心当たりが無いようだった。

『ほら、アレですよ。ご主人様との連携プレーにして一発限りの最強最大の一撃必殺』

そんなことを言われて草治も首を傾げた。だが今度は鬼姫も得心がいったのか、ああと頷いた。

「なるほど。そういうことか」

「何かあるか？あるならすぐにやってくれ。弾丸が掠めていくのは本当に心臓に悪い」

草治が切羽詰まった声で言った。鬼姫は空で一度静止して黒龍を見下ろした。

「分かった。やるよ」

そう言つて鬼姫は竜に向けて急転直下し出した。

空を金色へと変えるほどの光の群れは鬼姫を包みこむ。

対して黒き竜は迎え撃たんとばかりに巨大な暗黒の塊を打ち出した。大量に光を纏った鬼姫とそれと同等のスケールの暗黒がぶつかり合う。

暗黒は全てを無にするために、黄金の群れは全てを分解するために。結果、暗黒と黄金は相殺し合い消えていった。

黄金の光が剥がれた鬼姫はそれでも竜に向けて直進する。黒き竜も再び砲弾を造らんと口を顎がはずれているのではと思えるほど開いていた。

竜との距離まであと数秒。

というところで竜から再び巨大な暗黒が吐き出された。

だが鬼姫のもとに集まり出した黄金の光は彼女の付近を取り巻く程

度で本当に微小しか残っていない。

その時、鬼姫が草治の腕を掴んできた。

ん？

草治が何をするのか尋ねる時間は無かった。

鬼姫は撃ち出された暗黒から逃れようと真横に軌道をかえようと空を蹴った。

見事に垂直に曲がることに成功し、黒い弾丸の半径よりも遠くへと鬼姫は空を駆ける。しかし、暗黒の有効範囲の外に出ることは出来なかつた。

あと、一蹴りというところで暗黒に捕まったのだ。

それでも。

「なめるなああ」

鬼姫が叫び、黄金を纏う右拳で暗黒を殴りつけた。暗黒の端っこに人一人分の穴が生まれた。もともと端の方の厚みが少なかったのだ。そして鬼姫は左手に力を込める。

「いっけええええええええええええええ」

鬼姫の怒声と共に暗黒の隙間へと草治は空の中、投げ捨てられた。

「きやははははははははははは」

鬼の怒声と赤蓮の爆笑が草治の頭の中で重なる。

「意味分かんねええええええええええええええええ」

草治も叫び声を上げながら暗黒の魔法を通過した。

鬼姫の怪力によつて加速落下している草治へと、竜が暗黒を吐きだす時間は無かった。

理性の欠片も感じられない竜の瞳。この中にツヅリがいる。

彼女は今何を思っているのだろうか。

悲しんでいるのか。怒り狂っているのか。

今は、分からない。言葉では届かない。異形な存在と対話するには魔法を使うのが一番効率良い。

竜の頭と草治の距離はおおよそ刀身一つ分。

完璧な間合いまで近づき、

草治は竜の額へと剣を突き刺した。どぶ沼へと剣が入るような感触のあと、何か硬いものを突き破ったのを感じた。

『ビンゴです。核を壊しました』

黒い鱗から血がにじみ出る様に、赤い亀裂が入っていく。

『この竜の身体を一つの魔法と考えて下さい』

赤蓮の助言に従い、草治は頭の中で強くイメージする。黒い竜がもとの世界に帰されるように。

亀裂は竜の身体中に広がっていき、その幅を広げていく。

そして、暗黒の竜の身体が、ぐにやりと音を立て粘土のように崩れ出した。

膨大な暗黒が悲鳴を上げるような音を立て、亀裂へと吸い込まれ出した。しかし、その吸引力はいつもよりも高くない。吸い込まれるのを拒み、暗黒の魔法が草治の前で暴れまわっている。

もともと暗黒の魔法は人間にとっては不気味で怖い。普通の神経に、この光景はかなりきついものがある。

眼の前で暗黒が駄々をこねる様に亀裂からの引力に逆らうのを見て、草治は己の意識が遠くなるのを感じた。

『繋がりましたか』

赤蓮の声が遠くから聞えてきた気がした。何を意図していったのかは分からなかったが。

『本当に魔法を感じやすい体質ですね。そのくせ、魔法への免疫が少ない。だから他者の魔法も伝染しやすい、今も昔も、その前も』
嘆くような声だった。

『あとは、貴方次第です。これ以上暗黒の魔法が暴れると貴方の肉体が持ちません。だから、何としてもツヅリさんの意識を取り戻してくださいね』

赤井少年と竜の姫

赤蓮は草治とツヅリが繋がったと言った。

いつか夢で見た、ツヅリが監禁されていた世界に草治は立っていた。その暗い世界にツヅリもいた。彼女は小さくうずくまり丸くなっていた。

「草治様、聞いて下さい。今日は変わった夢を視たのです。いつもは父上と母上の夢しか視ないのに。今日はツヅリが人間の世で変な少年と出会う夢なのです。あまり、よく覚えてないのですが凄く楽しかったのです」

そこでツヅリは俯いた顔を見せた。

「でも、その夢の中でツヅリは父上と母上に嫌われているのだと言われました。それを聞いてとても悲しかったです。でも、夢で良かった」

ツヅリは眠そうな瞳で草治に言った。

彼女は、ただ悲しんでいたのだ。

信じていたモノに裏切られたから。そして彼女は結論を出した。全て夢だったと。

彼女は閉じこもり、外では暗黒の竜が暴れまわっている。

草治は首を振る。

「それは夢じゃないよ」

「え？」

「ずっと夢を視ているのもつまらないだろう。だから、俺はお前を起こしに来たんだ。ツヅリ、お前を夢から覚ましに来たんだ」

「夢から、覚ます？」

「そうだよ。ツヅリもこんな暗い世界は嫌だろう」

草治が断言すると、ツヅリは再び俯いた。

「いえ、それでもありません。これが夢でもツヅリはこの場所が好

きです」

「でも、お前は言っただろ。何も無いのはつまらないと。何も無いってのは、この世界のことだろ？」

「そうですね、この夢から覚めてどうしろと言うのですか。夢でいいじゃないですか。父上と母上に嫌われていたのは夢だったのです」

狂気染みた声でツヅリが叫んだ。

その言葉を聞いて、草治の顔が引きつった。自然と声が出た。

「それは逃げているだけだ。今は、逃げるべき時じゃない」

「貴方にツヅリの状況は理解できません。貴方は逃げるしかない状況にいないからそんなことが言えるのです」

「いや、分かる。だって俺はお前の魔法に伝染してしまったから。お前の心情がおおよそ理解できる」

草治は強い口調で言った。

草治は魔法について詳しくは知らないが、少なくとも2つのことを知っていた。

魔法の使用方法は、魔法の源泉という生き物が魔術師という餌に釣られて反応した分を使用するということだ。これは生物学的な意味での反射。

そしてもう一つ。

魔法の使用方法は、魔法の源流という全てを包含するモノのほんの一部をこちらの世界に持つてくることで使うことができる。そしてこちらに持つてくるができる魔法量と魔法の使い手の存在は対応している。この決まりを、赤い魔法では反射させると表現する。自分という存在を魔法の源泉に反射させ、そこからこちらの世界に跳ねかえってきた分を使用することができるとののだ。

どちらの理論も反射させることが原則だ。

ツヅリが暴走させている魔法の場合、後者の理論に基づいている。そのため、ツヅリの魔法に触れたことで草治は彼女の心が流れてくるのを感じていた。

「お前は、悲しみで我を失っているから周りが見えていないだけだ。よく見てみる。お前の周りには俺が居る。お前だけじゃどうしようもないかもしれないけれど、誰かと力を合わせれば、何とかなるかもしれないだろ。まだまだ逃げる状況なんかじゃない」

ツヅリが息をのみ草治を凝視する。

ツヅリの変化を感じ取り、草治は手を伸ばした。

「悪い夢は終わりにしよう」

草治へとツヅリも手を伸ばし始めた。

いつしか、真っ暗だった空が白み始める。

「相変わらず、細い神経ね」

呆れたような鬼姫の声を聞き、草治は我に帰った。

少しばかり意識を失っていたようだ。

周囲の暗黒は消えていた。

草治は星が瞬く夜空で鬼姫に抱きかかえられている。

そして、草治の腕の中にはツヅリの小さな体があった。どうやら鬼姫が草治とツヅリを抱えてくれたようだった。

ツヅリは力を使い果たしたため目を閉じて眠っている。安らかな寝顔だった。どんな夢を視ているのだろうか。

「ねえ、草治。その子は、どうするの？」

鬼姫が草治に尋ねてきた。

ツヅリの暴走は終わったようだが、考えてみれば天竜族と海竜族とのいざこざについては何一つ解決していない。

「悪いけどレンメイとかいう海竜に引き渡すのが無難だと思うわ」

「いや、ダメだ。俺はツヅリに協力すると約束してしまった」

「まるで、ツヅリの魔術師になったみたいなセリフね。草治は私のモノなのに」

不機嫌そうな声で鬼姫が言った。

見上げると鬼姫は頬を膨らませている。

『嫉妬はよくありませんよー鬼姫』

茶化すような赤蓮の声が聞こえてきた。

鬼姫は鼻を鳴らしてそっぽを向いて黙り込んだ。

『まあそんなに心配する必要はないと思いますよ。話は終わったみたいですから。下を視て下さい』

赤蓮の言葉が意図することが分からなかったが草治は彼女に従って視線を下にずらした。

守巢市を覆っていた雨雲は消えていた。

鬼姫は赤井神社へとゆつくりと降りている。

近付きつつある赤井神社では暴走して竜となったツツリが暴れた痕跡は無くなり、暗黒の魔法で空けられた穴ももった状態に戻っている。

そして、赤井神社の境内では三人の男が草治達を見上げていた。

一人は、両手が肘のところから消えているレンメイだ。

その隣には白髪のアラragiが薄笑いを浮かべ、彼の横には草治が見知らぬ男が厳めしい表情で立っていた。

草治達が赤井神社に降り立った頃、ツツリは眼を覚ました。

「少し眠りすぎました」

「ああ。お前を起こすのは大変だった」

草治は肩を竦めてから眠そうな瞳のツツリを下ろした。ツツリの手を引いて草治はアラragi達のもとに向かう。

アラragiは軽薄な笑みで口を開く。

「もう、大丈夫だ。全て解決した。彼のおかげで」

そう言つてアラragiはオールバックの男を顎で示した。

男は切れ長の眼で草治を見つめてきた。

「初めまして。草治君。私は天竜寺明久という」

落ち付いた口調だったが草治は天竜寺の名を聞いて訝しげな顔にな

った。

草治は彼の名前を知っていた。天竜寺財団の長。ひいては天竜寺妃の父親だ。そして神を捕まえるのを生業としている『ヤオヨロズ』のメンバーだ。つまりは鬼姫達の敵。

「ああ、そういえば娘の妃がお世話になっているそうで」

「いえ、それほど大した交流はありません」

草治の疑わしげな視線が気にならないのか、明久が声を立てて笑った。

「いやいや、アララギ様に噂は聞いているよ。妃と円治がそちらに厄介になったそうじゃないか」

「どうして、それを？」

魔法によって秘匿されているはずの事実を敵である明久が知っていたことに草治は驚きの声を上げたのだ。

「驚くことはないよ。私は力のある神についての情報はよく理解しているのだから。そして、力のある神と私の部下が鉢合わせしないようにも気をつけているのだよ」

「どうしてそんなことを？『ヤオヨロズ』は神を見つけるのが仕事なのでは？」

「いや、『ヤオヨロズ』上層部の考え方は違う。上層部は、人間の世界では生きていけない神を保護しようと考えている。特に力のない神にとって科学の発達した世の中は、身を狭くして暮らすしか選択がないからね」

「どうして、そのことを妃達には教えなのですか？」

「選別のためさ」

「選別？」

「そうだよ。人工の魔術師に見つかるくらいの神は、人の世でも暮らすのが大変だろうからね。見つかってしまった神は保護の対象となるわけだ。それ以外の神は、まだ人の世でもやっていけるわけの問題はないわけだ」

明久は不敵な笑みを浮かべた。底の知れない笑みだ。

アララギもこの男の力を認めたからこそ密かに繋がっているのだらう。

「さて、本題に戻ろうか」

明久は視線をツヅリへと落とした。

ツヅリはただその視線を眠そうな眼で受け止める。

「アララギ様に頼まれてね。私達『ヤオヨロズ』がツヅリ君を預かることが決まったのだ」

明久が言った。

草治は言われたことが理解出来ず啞然とした表情を浮かべた。

「なるほど、それならば誰の厄介にもなりませんね。いいでしょう」
ツヅリも軽く息を吐いて口を開いた。

「ちよつと待て」

草治が声を荒げて叫んだ。

「ちよつと待て。どうしてツヅリが『ヤオヨロズ』に行かないといけない」

「それは、『ヤオヨロズ』が一番、神や竜などの魔法的存在を封じる手段に優れているからだ」

鬼姫が草治の疑問に答える。

彼女は厳しい眼で草治を見つめる。

「これが、一番の妥協だ。いや、全員が納得いく答えだ。明久も言ったし前も言ったろ？『ヤオヨロズ』は基本的には弱き神を保護する善良な機関だ。ツヅリは弱いわけではなく強すぎるため竜族としても人の世でも生きられない。だからそこツヅリは保護してもらう必要がある」

「しかし、そんなわけのわからない組織にツヅリを引き渡さなくても俺達が護ってやればいいだろ？」

草治が強い口調で言った。

だが、草治の主張に誰もが顔を顰めた。その理由を以外な人物が述べた。

「小僧、今日は何とかなったが、本来暗黒の魔法はこんなものでは

ない。本当に暴走した場合、一瞬でこの街を消しさることができる」
レンメイが厳しい声で草治に言い聞かせるように言った。彼は今、
暗黒の魔法をもろに味わい、両手を失った。だから暗黒の魔法の恐
ろしさが分かるのだろう。

「まあ。俺の腕は時間が経過すれば治るが、本来ツツリが使うこと
ができる暗黒の魔法は消したものは必ずもとに戻すことができない」
全てを無にする力だ。竜にも人の手にも負えない、レンメイが顔を
引きつらせていった。もしかしたらツツリに海竜族の封印が破られ
たことへの恐れがあるのかもしれない。

それでも草治は異議を唱えようとした。
ツツリを『ヤオヨロズ』に引き渡すことは逃げているように感じた
から。

「いえ、良いのです。ツツリは、『ヤオヨロズ』で頑張ってみよう
と思います」

草治に向かってツツリが言った。

「貴方に言われました。まだ、逃げるべき時ではないと」

ツツリは表情を和らげた。とてもすっきりとした顔だった。

その表情には嘘があるようには思えない。

「『ヤオヨロズ』にツツリの魔法を制御してくれる可能性があるの
ならば、何としても行きたいのです。この力のせいで、誰かに迷惑
はかけたくありません」

力強い声だった。

その声を聞いて鬼姫がツツリ向かって一歩足を踏み出した。

「お前の心は清らかだな」

そう言っただけで鬼姫はツツリの頭を撫でる。

初めてだった。鬼姫がツツリに触れたのは。

「もしも、『ヤオヨロズ』の島に着いたら、奈菜霧という狸に会う
といい。アレはなかなか気の良い奴だ」

「ありがとうございます。鬼の姫。貴方の魔術師と末長く幸せに」

「何、礼には及ばぬよ。竜の姫」

言葉を交わし、鬼姫とツヅリは握手した。

魔法をぶつけ合い、お互い何かを感じたのだろう。

「それでは、ツヅリ君私と共に来てもらおうか」

明久の言葉にツヅリは黙って頷いた。

その眼は相変わらず眠そうだが、揺らぐことは無く毅然と明久を見つめていた。

ツヅリは最後に草治へと手を振り、明久と共に神社を後にした。

アララギは神社を去る前に、半笑いを浮かべながら草治に言った。

「お前の思考は竜によく似ている」

「竜に？」

竜について詳しく知らない草治は首を傾げるだけだった。

というか、ツヅリの思考と草治が似ているようには思えない。

その反応をアララギは観察するように眺めた。

「竜という存在は、基本的に世界に興味を示さない。こと無かれ主義で面倒事を好まない。そして草治君はこの世界に興味と呼べるような関心ことも無いのだろう？そしてお前は世界で起こることよりも、寝ているほうが好きらしいじゃないか。まるで人間の身体を持つていながら竜の心を持っているようではないか」

愉快そうに、アララギが言ったが草治はそれを複雑な気持ちで聞いていた。

アララギが例にあげた草治のものぐさなダメ人間的思考が竜と似ているのならば、今まで彼が抱いてきた竜へのイメージが崩れつつあった。

言いたいことだけ言ってアララギが帰り、草治と鬼姫が神社に残された。

「ツヅリは、あの竜は草治と違う。普通の竜とも違う」

鬼姫がいう。

「あの子は、この世界に強い関心を示して、いろんなものを感じて成長しようとしていた。だから、大丈夫。ツヅリはどんな世界でもやっていける」

どうやら、鬼姫なりにツヅリの無事を伝えようとしているようだった。それにしては草治をけなしているようでもある。

「俺は、そんなに頼りないかな」

「ああ、頼りないわ」

草治の呟きに鬼姫が即答した。

それから草治から目を背け、社へと踵をかえす。

「でも、草治の隣りには私がいるから、アンタも大丈夫なのよ」

鬼姫からそんな声が聞こえてきた。これも気のせいかもしれない。

草治は頭を掻き、夜空を見上げた。もうすぐ朝になるのか、赤井神社の鳥居から夜の景色が消えゆく街の姿が見えてくる。

なんとも忙しい夜だった。

少年の縁の行方

今日は、草治にとっても特別な日だ。

彼の母親である麻美の誕生日なのだ。

あとで、墓参りをしないといけないと考えながら赤井神社の掃除をすることにした。

そんなときだ。彼女が赤井神社に尋ねてきたのは、本当に久しぶりだった。

「元気？」

早朝。境内の落ち葉をはいている草治に向かって一人の少女が手を振っている。

草治もだるそうではあるが、手を上げてこたえた。

「もうっ。せつかく久しぶり会ったんだから少しは楽しそうにないよ」

両手を腰に当てて少女は頬を膨らませた。

少女の名前は仙石早苗。草治の中学の同級生だ。

「無愛想で悪かったな」

草治が慚然とした様子で答えると、仙石は少しだけ暗い表情を見せた。

「もしかして、まだ怒ってる？」

上目遣いで仙石が聞いてきた。

何が、とは言わなかったが草治にはそれだけで理解できた。

「怒ってはいないが、思いたしたくない」

そう言つて草治はため息を吐いた。

中学の最初。

まだ、赤蓮の影響力が少なかった頃、今よりは若々しかった草治は幼馴染だった仙石に告白したことがあった。

結果は、振られてしまったが。

初恋は甘酸っぱいとか言う奴もいるが、彼にとっては苦々しい思い出だ。

「ま、そうよね。4年も前の話だし、それよりも、」

今度は笑顔を湛え、仙石は右手に握られた紙袋を草治に突き出してきた。気持ちの入れ替えが早い少女だった。

「私の爺ちゃんが、もってけてさ。源蔵さんが欲しがってた骨董品だって」

早苗の祖父と源蔵は友人どうしだ。祖父同士が仲良しということで草治も早苗もよく遊んだ。

「また爺ちゃん、変なものを買って」

草治が呆れたような口調で言った。

「草治。腹減ったー」

と、神社の方から鬼姫の声が聞こえてきた。

頭に帽子を被った鬼姫は仙石の姿を見て眼を細めた。

仙石はきよとした顔で鬼姫を見つめた。

「彼女は俺の従妹のレンだ」

草治が適当な嘘で誤魔化した。一般人に鬼姫のことを一から説明するのは面倒くさいのだ。ちなみにレンという偽名は鬼姫が自分で付けたものだ。

仙石はレンと呼ばれた鬼姫に微笑んだ。

「へえ。草治にこんな綺麗な従妹がいたんだ」

「実はいたんだよ。それで？何をしに来たの？」

鬼姫の話題を草治は無理やり変えた。鬼姫がどここの出身だとかこの学校に通っているかなどを聞かれると対応できない。

草治の心配をよそに仙石は鬼姫から視線を外して照れたような顔を草治に向けて言った。

「恋愛成就を祈願しにきたの」

「実は私、好きな人がいるの。私野球部のマネージャーしているんだけど、部長に惚れちゃったみたいなの。日に日に思いが強くなっちゃって、そこで今日の大会が終わったら告白しようと思っているのよ」

恥ずかしそうに顔を赤らめる仙石。

草治は呆れた顔をみせた。わざわざ俺に報告するなよ、と彼の顔が言っているようだった。

「普通、大会が終わってから告白するのは男のほうだと思うけどな。第一、その大会でお前の好きな奴がミスをしたら告白なんてできなくなるぞ。もう少し告白の計画をたてたほうがいい」

「馬鹿ねえ。草治は。彼は絶対今日の大会で優勝するわ。というか、恋愛に計画とかそんなものは必要ないわ。感情のままに動くべきなの」

仙石が言った。何だか草治の恋愛の考えが間違っていると言われているように感じた。

草治が苦々しい顔を造ると仙石は苦笑した。

「別に、草治の恋愛観が悪いって言っているわけじゃないわ」

仙石が励ますように草治の肩を叩いてきた。

草治は憮然とした顔を返すだけ。

何だか、中学の時もこんなやり取りをしたような気がした。

「草治、言ってたわよね？赤井神社は縁結びの神様でもあるって。さすがの私も、初めての告白だから少しだけ心配になってきたの。それでお爺ちゃんのお使いのついでにこの神社に恋愛成就を祈願しに来たの」

仙石の話を聞いて草治の顔が曇る。

だからといって以前振った男にそんな報告はいらないと思うのだから、もちろん、彼女の気持ちは整理がついているのだが。

無言の草治の替わりに、鬼姫が拍手をしながら歩いてきた。

「素晴らしい考え方ね。この神社で祈れば恋愛成就間違いないわ」
珍しく、鬼姫が上機嫌で頷いた。

神というのは人間からの信仰を集めることで力を増すらしい。鬼姫の場合はより多くの人間がこの神社に祈願することが必要となるのだ。

鬼姫が続けた。

「そして告白が成功したら、赤井神社のおかげだって皆にも言っ
てね」

確かに、恋愛成就是非常に良い宣伝になる。

少し腹黒いが効果的な方法だけど。

「そうね。ありがとう」

神だの、信仰の世界からはほど遠い仙石は嬉しそうな顔で頷いた。

仙石が帰ってから、草治は麻美の墓参りへと向かった。

人が居なくなつた神社で鬼姫と赤蓮は二人で呑気にお茶を飲んでい
る。

鬼姫はポツリと呟いた。

「本当だったら、草治と仙石早苗は夫婦になる縁があつたのだからな。
お前が草治の縁を滅茶苦茶にしてくれた所為でそれもおじゃんだ」
じとつとした目で鬼姫は言つた。

もしかしたら、今日仙石早苗がこの神社に来たのも草治に思ふこと
があつたのだろうと鬼姫は思った。まあその縁も終わったことだか
ら愚痴つてもしかたないことだ。

赤蓮は鼻を鳴らす。

「あの女だけは、ダメですー」

机の上を両手で叩き、赤蓮が駄々をこねる様に言つ。鬼姫は軽く息
を吐いた。

「それは、前世の仙石と草治の前世が夫婦だつたからか」

「それもありますけど、あの女、前世で私にいつも意地悪してき

「たんですよー」

「仕方無いだろ。だって私達はあの娘にとって夫と仲が良い女だったのだから。少なくとも仲良くしたいとは、本妻なら思わないだろ。おまけに、私達はその夫に恋心を秘めていたんだからなおさらだ」

鬼姫が窘めるように言った。

赤蓮はむくれたような顔を見せた。

と、赤蓮と鬼姫が同時に眼を開いた。

「珍しいお客さんですね」

呟くと同時。

扉が開かれ一人の女性が入ってきた。

お札が貼りついた大きな旅行カバンを引いている。

その鞆から強い力を鬼姫は感じた。

鬼姫が険しい視線を浴びながら、女性は微笑みを浮かべた。

「赤蓮ちゃん、お久。それと鬼姫ちゃんは初めまして、かな」

「おやおや。死んでさらに異端となりましたね。お久しぶりです。麻美さん」

赤蓮が苦笑して女性に挨拶した。

その容姿に鬼姫が感嘆の声を上げた。

とても美しい女性だ。しかし鬼姫の注意を引いたのそこではない。

その女性があまりに、草治と似ていたからだ。

草治と異なるのは髪の長さと、その瞳から発せられる意志の強さ。

驚く鬼姫だが赤蓮は見慣れた様子だった。赤蓮は親しげな調子で死

んだはずの女性に声をかける。

「その身体はどうしたのですか？赤井麻美の肉体は死にますよね？

だからご主人様が神社に選ばれたのですから」

赤井神社の魔術師は世襲制だ。

麻美の血が動きを止めたから、草治が神社の魔術師となった。

今、赤蓮達の目の前にいるのは麻美の偽者ということになる。

麻美の姿をしたそれは、悪戯っ子のように舌を出した。

「お師匠様に生前とそっくりの身体を造って貰ったの」

「そうですか。相変わらずとんでもないことをしますねえ」

呆れました。赤蓮が呟いた。

鬼姫も啞然として呆けた顔を見せる。

赤蓮は麻美にもお茶を出し、ついでお茶うけも用意した。

「それで、ご主人様を待ちますか」

「草治に会いたいのは、やまやまなんだけど。まだ会う時じゃないかなー」

「本当に、麻美さんは変な人ですね」

「あはは。よく言われるわ。そう言えば、草治は元気？」

「元気ではありませんよ。私に取り憑いているんですからー」

赤蓮も微笑んで答えた。

鬼姫は醒めた視線を自分の半身に向けた。赤蓮が邪魔さえしなければもっと自由に動けるのだが、この少女の草治への歪んだ思いは計りしれない。

「でも、私の思い通りになっしてくれないですよー。この前も人助けならぬ命がけの竜助けなんかしたんですよ。私が元気を吸っているのにどこからあんな元気が湧いてくるのか、本当に不思議です」
嘆息するように赤蓮が言った。この少女の願いは、草治が少女だけのものになること。

この願いは、鬼姫と赤蓮の心が一緒であつた時からあつた願いだ。その時は、二つはレンと呼ばれていた。レンが抱いた、前世の草治への届かない恋心。そして前世の草治と夫婦となつた女からの執拗な苛め。

こんな低弱な人間の女と彼は不釣り合いだ。私こそが彼の隣にふさわしいなどなどのドロドロとした独占欲。

この記憶は鬼姫の中にはほとんどない。赤蓮が全て持っているから。今はもう、赤蓮の歪んだ愛がどんな形になったのかは視えない。それでも、麻美へと嘆息の声を上げる赤蓮を見ると少しは丸くなった気もした。

麻美が満面の笑みを浮かべる。

「私が教えたのよ。草治に助けを求めてくる人は何があっても助けをあげる努力をしるって。あの子は私の自慢の子だから、赤蓮ちゃんには負けないわ」

自信に満ちた声音だ。

「草治は強い子。だから私は私の目的を追い続けられるの」

そう言って麻美は自分が持っている鞆に視線を落とした。

「それはさておき。私が今日、ここに来た理由は、この鞆を赤井神社に預かってもらいたかったから」

麻美は大きな旅行カバンに付いていた御札をはがした。

中には、燃え上がるような赤い髪の少女が入っていた。

それを視て赤蓮と鬼姫が同時に眼を細めた。

「あははは。ちよつとね、友達が祀っている神様を誘拐してきたの。頭を掻きながら麻美が言う。」

鬼姫が噴き出した。彼女は狼狽した声を出す。

「ちよつと待て。誘拐してきた？他の土地の神を？なんでそんなことを？というかこの神を？」

「それは、本人が起きてから聞いて下さいな。鬼姫ちゃん」

麻美は意地の悪い笑みを浮かべてはぐらかした。

鬼姫は麻美の笑みに憤りを覚えた。

「ふざけるな。他の神を連れてくるなんて許されるはずがない」

「ああ。大丈夫、大丈夫。この子は正式には神じゃないから。というか人工的に造られた神なの」

「造られた神？」

怪訝な表情で鬼姫は聞きかえした。

『ヤオヨロズ』などでは人工的な魔術師を造っていることが有名だ

が神を造るなんて聞いたことがない。いや、あまりにおこがましい話だ。

「そうね。神を造るなんてとってもいけないことよね。でも、それが分からない人もいる。だから、ここにこの子を連れてきたのよ」
憐れみの混じった視線を麻美は小さな赤い神に落としていた。

「この子は、たぶん神としては生きられない。でも妖怪として生きるのも、可哀そうでしょう。そういうわけで、この子に人として生きることを教えてほしいの。それくらいできるでしょう」

麻美が爽やかな笑みを戻した。

鬼姫は難しい顔で紅い髪の少女を睨んでいた。

少女を視る限り、なかなかの力を秘めていることが分かった。だが、あくまでなかなかだ。神としては少し足りない。

力のない神が人間の世で神として生きるのは辛いものだ。

「『ヤオヨロズ』に保護してもらおうというのは、どうなの？」

「ああ。無理無理。この子の魔術師が凄いい『ヤオヨロズ』嫌いなもの。それにこの神のことも異常なくらい愛してるわ。だからこの子を『ヤオヨロズ』に引き渡したら、『ヤオヨロズ』と戦争しちゃうってこともあるの」

麻美があっけからんと答えた。

鬼姫は麻美の言った戦争という単語に引っかかりを覚えた。

現在、『ヤオヨロズ』と各地に散らばる土地神達は敵対しあっているわけでもないが友好的ではない。かなり微妙な関係だ。力のある魔術師が『ヤオヨロズ』に喧嘩を売ることです下手をしたらその関係を崩すことが考えられる。

「それほどに、力のある魔術師なのか？」

「ええ、そこらへんの土地神を退けるほどの力は在るわ」

「そんな魔術師から、神様を奪ってきて大丈夫なの？」

「うーん。多分、滅茶苦茶怒ってるわね。でも、あの魔術師は正気を失っている。彼女にこの小さな神は任せられない。だから、お願い」

麻美は真剣な眼差しを鬼姫に向けた。

場所は守巢湖近くの球技場で野球大会があると仙石は言っていた。麻美の墓参りの後、暇だったこともあり草治はそこに足を運んだ。最初は、関係ないことなので行く気がしなかったが、結果だけ視てみようかと思いなおしたのだ。

陽が傾きかけた夕刻。

丁度、表彰式も終り選手達は充実した笑みを浮かべている。

その脇でトーナメント表を草治は眺めていた。

聖葉学園も出場しているらしかった。草治の知り合いがいるわけでもないのに彼には関係ないことだが。

仙石の出場しているチームは優勝していた。彼女が自分の学校の野球部を自慢していただけはあるようだ。

観客席から視線を動かし、草治は仙石の姿を見つけた。

彼女の正面には野球帽を被った少年が一人。

二人は夕日のためか顔を紅くして話し合っている。

その姿をみてわずかに草治の胸が痛んだような気がした。

「赤井じゃない？」

観客席でぼーっとしていると後から声を掛けられた。

意外なことに、そこには天竜寺妃が立っていた。

妃は草治の隣に腰を下ろす。

「アンタがこんなところに居るなんて珍しいわね。野球が好きなの？」

確かに草治はあまりスポーツを楽しむような柄ではない。学園の体育の授業もかなり手を抜いて参加しているし。

「野球は好きでも嫌いでもないよ。ただ、案外俺も女々しいところがあるようだ」

草治はくわしい説明をせずにそう言った。

そんな草時に妃は怪訝そうな顔を向けてきた。

草治は彼女から視線を逸らした。

何となく、今の顔を他人に見られなくなかった。多分、いつも同じ仏頂面なのだろうけど。

「お前は何をしに来たんだ？」

「部活よ。吹奏楽部で応援だつて」

「部活？」

「そんな変な顔をしないでよ。昔から吹奏楽には興味があつたの。だから先日入ってみたの。」

妃に言われて、草治は驚いた。初めて彼女と出会った時は吹奏楽部に入っていなかった。何か、心境の変化があつたのだろうか。

草治の意外そうな顔を見て妃が少しだけ照れたように言った。

「本当は部活なんてしてられないくらい忙しいのだけど、こういうのも悪くないわ」

そう言つて妃が立ちあがつた。

「赤井。アンタもさあ、そんな陰気な顔してないで好きなことでもしてみたら？」

「そうだな。それがいいんだろうが、俺の好きなことってなんだろうな」

好きなこととはどういうことなのだろうか。

今の草治には進んでやりたいと思えることがない。相変わらず情けない考えた。

（ああ、こんな考えだからツマライ人間だと思われてしまうのか）

「だ」から、そういう顔をするからいけないのよ」

唐突に妃は草治の頭を叩いてきた。

「少しは、楽しそうな顔をしなさいよ」

「楽しい、か。天竜寺は、とても楽しそうだね」

草治は表情を和らげて言った。

妃は瞳をきょとんとさせた。

彼は知っている。この少女の心は下手をしたら草治以上に心が空っぽだった。

「昔の天竜寺の笑顔は、学園でも凄く嘘っぱかった。でも、今の顔には嘘が少ない。この変化は多分、お前が本当に楽しいと思えるからなんだと思う」

「おかしなことを言うわね」

妃の顔に驚いたような表情が現れた。この顔も嘘は少ない。全部が全部本心というわけでもないけれど、彼女も変わりつつあるのだ。

「ああ、俺は少しおかしいんだ。今はおかしいんだ。でも俺も変わるだろう？天竜寺のように」

真剣な草治の視線に天竜寺が噴き出した。

「私みたいにか。本当にアンタはおかしいわね。でも、嫌いじゃないわ。アンタのそういうところ」

天竜寺はバイトがあるということで球技場で別れることになった。

『ヤオヨロズ』の仕事なのだろう。草治は何も言わず天竜寺を見送った。

草治も神社に帰ることにした。

妙にすつきりとした気分だった。

天竜寺妃と話が出来たからかもしれない。

最後に、球技場を振り向いた。

そこには、仙石早苗と見知らぬ少年がいて、二人はとても楽しそう
で。

「赤井神社が結んだ縁。きっと幸せな縁となるだろう」

赤井草治は穏やかな表情で囁き、その場を後にした。

彼には、未来を見通す魔眼も無いし、鬼姫のようにそれぞれの縁の
相性も分からない。

だけど、あの二人は幸せになるだろう。

赤井神社の魔術師としての赤井草治の勘がそうつげていた。

神格を認められなかった神様

ある日の夕方、家に帰ると真赤な髪の少女が居間の隅に縮こまっていた。

歳は草治と変わらないくらいだろうか。

顔を覆い隠す長々しい髪から瞳をわずかに覗かし、草治を隠れ見ている。いささか不気味だ。

だるそうな瞳の草治と少女の眼が合った。

「ひああ」

何故か悲鳴を上げられた。

そして少女は完全に髪で顔を完全に隠した。髪にはこんな使い方もあるようだ。

草治の陰気な瞳を視て睨まれたと勘違いしたのだ。よくあることだ。悲しくなるけど。

「鬼姫か赤蓮の友達か？」

草治が抑揚のない声で尋ねた。

少女は黙ったままだがものすごい勢いで頭を左右に振った。真赤な髪も振り乱れる。

その反応は意外だった。

今まで何度か鬼や竜などの人外と会った所為か。少女の雰囲気は何となく人間じゃないような気がしたのだ。

鬼姫やツヅリという竜が持っていたどこか、人間と違い、決して人間とは相容れない感覚。それを眼の前の少女は持っていた。

だから、鬼姫に用が合ったのだと思ったのだが。

「もしかして、俺に用？」

草治が聞くと少女は頭が取れるくらいの勢い上下に髪を振り乱して何度も頷いた。

何だかため息をしたくなった。

鬼姫と赤蓮の話だが、草治のことは周囲に散らばる神々の間で噂に

なっているようだった。問題なのは、その噂に尾ひれが付いている
ようで。

ついこの間もツヅリという竜が草治を頼ってきた。彼女は草治を力
のある魔術師と勘違いしていた。

「俺に何の用？」

うんざりとした顔を表に出さないように言ったが、草治の低い声は
問い詰めているようでもある。草治の声に少女は身を竦ませた。

黙り込んで何もしゃべらない少女に、草治はどうしたもんかと頭を
掻いた。

（というか、鬼姫と赤蓮はいないのか）

「ここにいますよー」

沈黙した部屋に、草治の心の声に答えるような赤蓮の明るい声が入
ってきた。

鬼姫がドアを開け、その肩のあたりを赤蓮が浮かんでいる。この幼
い姿をした幽霊少女は本当に何でもありだ。おそらくさきほど草
治の心を読んでいたからこそこのタイミングで入ってきたのだろう。
「もー。そんな怖い顔しないでくださいよ」

無然とした表情の草治に赤蓮がからかうような笑みを向けてきた。

「怖い顔は生まれつきだ。それより、この子は何だ？」

「さあ？何でしょう」

赤蓮はそう言っただけで鬼姫に視線を向けた。鬼姫は呆れたように赤蓮を
一瞥してから、口を開いた。

「なりそこないの神様、かな」

「なにそれ」

「だから、まあ妖怪とか魔人とかそんな感じ、だと思っ
濁すように鬼姫が言った。

自信が無いなんて鬼姫には珍しかった。

草治の認識としては、力のある魔法を使える人外が神様で弱い魔法
しか使えない人外が妖怪だととらえている。

「あー。日本で神様を名乗る場合、『オノゴロ』という組織に認められ、神格を貰わないといけません。カガリさんは『オノゴロ』に神格を認められてないので神様というわけではないということです」再び草治の考えを読んだように赤蓮が説明してくれた。カガリというのは赤髪少女の名前だろう。

神格だの、かなり常識はずれなことを赤蓮が言ったが草治は驚かない。

（『オノゴロ』って組織も『ヤオヨロズ』と似たかんじなのかな）

「『ヤオヨロズ』は人間の神様ごっこ。『オノゴロ』は神が神を律する組織だ。全く違う」

今度は鬼姫が説明を入れてきた。

馬鹿にするような鬼姫の視線に気付き草治は顔を引きつらせる。

「もしかして、鬼姫は俺の思考が読めるの？」

草治がさりげなく聞いてみるが鬼姫は何も言わず、そっぽを向いた。赤蓮は草治の思考が読める。赤蓮と鬼姫は半身同士である。つまり、鬼姫は草治の思考が読めるのではないか。三段論法的に考えるとそんな不安が生まれてくる。

まあ今さらそんなことを気にしても仕方無いが。

草治は何もしゃべらずにそわそわとしている少女に視線を戻した。

「えーっと、カガリでいいんだよね」

そう言うとかガリと呼ばれた少女は頷いた。

ひとまず、イエスカノで答えられるクローズドクエスションならば意志の疎通は可能であるようだ。

カガリについて知っていることは少ないが状況を整理するために、気になったことをピックアップして質問を作るしかない。

「カガリは俺に助けてほしいことがあるんだよね」

草治が聞くとカガリは頷いた。

「カガリは神様になりたいの？」

草治の質問にカガリは首を左右に振った。

「そっか」

そう言つて草治は頭を掻いた。

（ほかに、何て質問すればいいんだ）

言葉がほいほいと出てこない口下手な自分に嫌気がさしながらも草治は鬼姫達に助けを求めるための視線を送った。

草治の救援の合図に気が付き鬼姫はあからさまなため息を吐いてきた。

もう少し頑張れよ、と蔑むような目を鬼姫はしているような気がした。

（仕方ないだろ。あまり人と会話しないから、こういう時に言葉が出てこないんだよ）

「カガリは神として暮らすのはキツイ。だからカガリに人間としての生き方を教えてあげてほしいと『ある人』から依頼を受けた」ため息混じりで鬼姫がそう言った。

その情報をもつと早く教えてほしかったが、草治は不満を抑えることにした。

「神として暮らすのがキツイなら『ヤオヨロズ』に保護してもらえばいいだろ？」

「まあ、依頼者にもいろいろあるそうだ。それに私が視ても、カガリは人間の世のほう縁が根ざしやすいと思うのよ」

鬼姫は髪を掻き上げながらそう言った。

一応、彼女は縁結びの神様でもあるようだから、そうなのだろう。

何はともかく、カガリもこの神社でしばらく預かるみたいだ。また食費がかかる。

草治が情報を整理していると突然後ろ髪が軽く引つ張られた。

驚いて振り向くとカガリが手を引つ込めるのが見えた。

「あ、あの」

初めて、カガリの声が聞こえてきた。鈴が鳴るような綺麗な声だと草治は思った。

「あ、あの、違う」

「何が、違うんだ？」

「その、えっと、私は人間になりたいわけでは、なくて」

カガリは俯いていて草治と目を合わせることはなく、両手の指もせわしく動いているが、その声ははっきりとしていた。

「私は、私は魔術師になりたい」

きっぱりとカガリは言った。

カガリの主張が予想外だったらしく鬼姫と赤蓮は互いに顔を見合わせて驚いている。何だかんだでこの二人は仲が良いのかもしれないとあまり驚いていない草治は思った。

草治にはカガリが魔術師になる意味が分かっていないからこそ淡々とした感情でカガリの主張を聞いた。他者である誰がどんな職業を希望しようが、その人の勝手であるのだから。

しかし、次に出たカガリの言葉に草治は驚き、呆れ、呆けた顔を見せることになる。

カガリの赤髪から両目が現れ、その瞳が草治を捕えた。

澄んだ紫色の瞳だった。

「だから私に、赤い魔法を教えて、くれますか」

少女は上目遣いでクローズドクエスチョンを出してきた。

神格を認められなかった神様（後書き）

試験期間ということもあり、かつこをつけて授業で習った単語を入れたりしてみました。が、なにぶんバカ学生なので単語の使い方と意味が間違っているかもしれないので気を付けてください。

赤井神社の弟子

赤井神社を囲む木々が紅葉を始めた頃の話だ。

魔法を教えてくださいか？

赤いもみじのような髪を持つ少女は、そんなことを赤井草治に言ってきた。

「私は、その、魔法が使えるのに、使えないのです。だから、いつもお母さんに怒られて。だから、」

赤い髪で顔を隠し、カガリは手で髪を弄っている。挙動不審だ。カガリの説明も要領を得ない。

魔法が使えるのか、使えないのか。

「だから、あの、その、お母さんに怒られないように魔法が使える様になりたくて。ですから、その、私を弟子にして、ください」

「何それ？意味分からないわ」

不機嫌な調子を隠さずに、何故か鬼姫がカガリを睨んでいた。

鬼姫は、人外に対して友好的ではない。

そして意志の弱そうなカガリは鬼姫の威圧によってすっかり怯えてしまっている。

赤蓮は苦笑を浮かべて鬼姫の裾を引っ張った。

「まあまあ。別に、ご主人様がカガリさんと契約するわけではないのですから」。嫉妬は止めて下さいね」

「別に、嫉妬はしてないわ。ただ、この馬鹿は、何も知らない癖にお節介をやくから、面倒なことになりそうで気が気でないのよ。そう言つて鬼姫は草治を一度睨んできた。

面倒事に巻き込まれやすい彼は鬼姫に反論できず、口ごもる。

「でも、今回のことはなかなか良い話だと思いますよー」

赤蓮が悪い空気を吹き飛ばすように両手を打ち鳴らして笑みを浮か

べて言った。

「カガリさんがご主人様の下僕になると解釈すれば、カガリさんが私達の下僕になることと同義ですから」

いつのまにか草治は鬼姫と赤蓮の下僕になっていたようだった。

確かに、そんな上下関係が無いわけではない。家事は全て草治が行い、鬼姫と赤蓮はごろごろしているだけだし。

赤蓮の提案に鬼姫は渋々とした感じだが頷いていた。

「そういうことなら、いいわ」

「ほ、本当ですか？ありがとうございます」

少しだけ嬉しそうな声がカガリから上がった。彼女は鬼姫に何度も頭を下げている。というか、この少女は大切なことを知らない。

（俺は、魔法なんて一つも使えないんだけど）

魔法具があれば多少は魔法が使うことができるが、それだけだ。魔法に關しての知識も乏しい。教えるなんて出来るはずが無い。

しかし、それを伝える機会というかタイミングを口下手な草治は掴めないでいた。

カガリは草治にも近付き頭を下げてきた。

「こ、これからよろしくお願いします。お師匠様」

「いや、俺は」

「よかったですねー。カガリさん。ご主人様は凄腕の魔術師なんです。特に赤い魔法にかけては人間にしておくのはもったいないくらいです。きつとすぐに赤い魔法を習得できますよー」

草治の言葉を赤蓮が遮った。

彼女は草治の手を握り、魔獣を倒したーだのあること無いことを喋り始めた。

赤蓮は悪戯っ子気味な笑みを浮かべてはしゃいでいる。草治が困った様子が面白いようだった。草治自信は赤い色の魔法と言われもよく知らない。まず、魔法の色の違いも分からない。

そして赤蓮の話を聞いてカガリから熱い視線を草治は感じた。

『考えがあるので、少し私に合わせて下さい』

頭の中で赤蓮の声が響いた。

この声はカガリには聞えてないようで、彼女は赤蓮の話に耳を傾けている。

怪訝な顔を草治はするが、赤蓮はこれ以上何も草治には言っただけだった。ひとまず草治も赤蓮に任せることにして、魔術師がなんたるかを抗議している赤蓮の話に集中する。

「魔術師になる場合、人間の生活というものを知らないといけませんねー」

「そ、そうなんですか？」

「そうですね。魔術師は皆魔法を使えることを隠して普通なふりをしているのです。亡国のスパイや忍者や隠れヲタクみたいなものです」

赤蓮はペラペラと変なことを言い、カガリは赤蓮の言葉をまに受けてしきりに頷いている。忍者やスパイと隠れヲタクが同じ分類ということをカガリが覚えないうるか？と草治は心配になってきた。

「つまり、魔術師になる場合、人間の生活も習得しなくてはなりません」

「え？でも、私、そういうのは良く分からない」

「そうですねー。でも大丈夫です。人間の生活なんて簡単に習得できますよ。学校に通えば」

「学校？」

「そうですねー。学校は人間の造った社会に適応するための人間を生産する場所ですからねー」

身も蓋もないことを赤蓮が言った。

学校にはそんな一面も無くはないが、社会に適応できない草治は複雑な気持ちだった。

何にせよ、赤蓮はカガリを学校に通わせたいようだった。

鬼姫と赤井神社の力を使えば、無理やりカガリを転入させることができるだろう。

「楽しい学校生活になりそうですねー」

赤蓮が楽しそうにそう言ったが、草治にはこれほどに内向的な少女が学校で上手くやっていけるのか疑問だった。

朝のホームルーム。

転入生が来るらしい、そんな話題が教室で飛び交っていた。

天竜寺妃は怪訝な顔でその話題を一人聞いていた。

（そんな情報は、私のところに来ていない）

妃は仕事柄、周囲の情報は『ヤオヨロズ』と言う機関の下っ端工作員を使ってほぼすべて把握するように心がけている。力の無い妃にとつて諜報活動こそが、最大の切り札と言ってもよい。妃の諜報力には彼女の兄弟達も舌を巻いているほどである。

彼女が通う聖葉学園の情報は特に。

だが、彼女の情報網も完璧ではなかったようだ。

（あとで、情報網の在り方を整える必要があるかしら？）

妃が思考している内に、件の転入生がホームルームで紹介された。教室に新しいクラスメートが入り、男子から歓声上がる。それは転入生が女だったからというよりも少女の容姿のせいだ。

遺伝子教育を受けたのか、印象的な真赤な髪が顔を隠しているが、スタイルはそれなりに良い。男子が騒ぐのも頷ける。

黒板には、赤城力ガリと書かれていた。

赤城力ガリは緊張しているのか何も喋らずに、もじもじとしている。その仕草も可愛げがあつて男子はニヤニヤとしている。ただ、女子の反応は微妙だ。

「それじゃー、赤城さんは天竜寺さんの横の席に座つてね」

教師が妃の左にあつた空席を差して言った。力ガリは周囲の視線から逃げるためか小動物のような素早さで早々と妃の隣に座った。

「はじめまして。私は天竜寺妃というの。よろしくね。赤城さん」

「あ、は、はい」

自信に満ちた笑顔を作り、妃は転入生に挨拶をすることにしたが力ガリは一言答えるだけで顔も合わせようとしない。いわゆる人見知りだろうか。妃は内心呆れ果てていた。

人見知りは三歳くらいまでで克服しないといけない発達課題だといふのに、遣伝子に問題があるのではないか、仕事柄そんなことさえ思ってしまった。

ホームルームが終わり、妃の周りに取り巻きの女たちが寄ってきた。この教室の中心は彼女なのだから当然なのだが。

赤城力ガリは男子に囲まれて質問攻めにされている。彼女はびくびくとした態度で、片言で質問に答えている。

（もつと堂々としていればいいのに）

妃はびくびくとしている赤城から視線を外し、男子に囲まれている赤城を剣呑な視線で見つめる数人の女子を眺めた。露骨に舌打ちをしている女子もいる。かなり険悪な空気だ。

（うざいわね。こういうの。でも、気持ちは分かるわ）

妃自身、はきはきとしていない人間はあまり好きではない。

だから、この新しいクラスメートとはそれほど話すことは無いだろう、そう思った。

彼女にとって学校は、普通の人間のふりをするただの力モフラージュだから必要最低限の交流だけでいいのだ。

これが、少女たちの出会い。

季節は秋。葉っぱの色が移り変わる頃の話だ。

体育祭

赤城カガリが転入してきて数日がたった。

カガリは自己主張が少ないためか、一人でいることが多かった。

天竜寺妃はカガリが教室で孤立しているのを横目に、カガリの位置が教室で定着しつつあるのを感じつつあった。

一人、寂しそうだと思わないでもないが。

（何か、きっかけがあれば少しは変わるのだろうけど）

「私には、関係無いことね」

そう呟いて、妃は転入生のことを頭から追い出した。

今は、もっと考えないといけないことがある。

妃は近くに生徒達がいなかったかをさりげなく確認した後、携帯を取り出した。

一通のメールが届いていた。

姉である天竜寺茉莉からだ。

茉莉とは兄弟の中では一番接点が多い。茉莉も妃も戦闘魔法よりも情報収集のほう得意という共通点がある。そして、情報量に関して妃は茉莉に及ばない。

茉莉からのメールを開き妃は絶句した。

天竜寺円治が何者かに襲われ、負傷した。

そんな簡潔な文章で始まっていた。

円治が襲われたのは守巢市からそれほど遠くない場所だった。

魔人狩りの探索中に襲われたようだった。

天竜寺円治、戦闘に関しては天竜寺兄弟の中ではトップクラスのチカラをもっている。そんな兄が負かすとは、襲撃者はかなりの強敵

だ。

しかも、襲撃者は円治に致命傷を与えず、遊んでいるかのように両脚を折られているらしい。

依然犯人は捕まっておらず、目星も付いていない。

茉莉は最後に、気をつけろという言葉を残していた。

（魔人から視れば、私達『ヤオヨロズ』は敵でしかない）

『ヤオヨロズ』が魔人に襲われるのは当然のことだが、兄を上回るほどの魔人には会ったことがなかった。これは、妃の上司である天竜寺明久が力のある魔人と彼女達が鉢合わせしないように工面しているのだが、このことは妃は知らない。

（いずれにしろ、力の強い魔人がこの近くにいる。それを捕まえれば、かなりの手柄になるわ）

妃は少しだけ胸が高鳴るのを感じた。

力の無い彼女はいつも、無能として蔑まれていた。彼女自身、弱い魔法しか使えないため、無能のレッテルは仕方が無いことだと受け入れていた。彼女が生まれた『島』では魔法の高さこそが全てだったから。力の在るモノに従うのが自然の原則だと思っていた。人形のように周りに従っていたら、気が付いたら心までも空っぽになっていることに最近気が付いた。

（でも、もしも、強い魔人を捕まえることができれば）

近頃、変わりたいと妃は思うようになっていた。

今年の夏、偶然奈菜霧という化け狸を捕まえた頃から、そんなことを考えている自分がいた。魔人というか魔狸を捕まえて自信が付いたのかもしれない。

つらつらとそんなことを考えていたが、彼女に近づいてくる人影に気が付き妃は携帯をしまった。

「あ、あの」

意外にも赤城力ガリだった。

彼女は、俯きながら妃に話かけてきた。

「何か用かしら？赤城さん」

妃は優雅な口調で尋ねた。

だが、内心は疑問で溢れていた。この内気な少女が自分に用があるとは考えにくかったのだ。それに、妃は途中でサボってきたが今はホームルームをしているはずではなかったか。

相変わらずカガリは拳動不審だったが声だけは綺麗だった。

「え、えつと、さつき体育祭の競技を決めていて」

「知っているわ。もしかして教えに来てくれたの？」

「そ、そう。天竜寺さんは、私とテニスをすることに決まったの」

「ふーん。そっか。ありがとう」

妃は一応礼を言ったが、体育祭になんか出るつもりなどなかった。今は、そんな時ではない。

見栄えのよい造り笑顔を浮かべていると、カガリが顔を上げてきた。口元にはわずかに笑みが浮かんでいる。妃に礼を言われたのが嬉しかったのかもしれない。

「う、うん。頑張ろうね。天竜寺さん」

カガリはそう言って教室に戻って行った。後ろ姿も少しだけ楽しそうに見えた。

確か、体育祭は来週。

（時間があつたら、出てあげようかしらね）

そんなことを妃は思った。

何だかんだで彼女もお人好しなのだ。

その後、妃の魔人捜査が始まった。

基本的には、情報収集と情報管理と情報整理の三点を行い、不自然な地域を徹底的に調べた。だが、一向に進展はない。そうこうするうちに、体育祭の時期が近づいてきた。

清々しい秋晴れの下、聖葉学園体育祭が始まった。

（本当は、サボリたかったわ）

心の中で愚痴をこぼしながら、妃は第一試合の会場に向かうことにした。

その後からはカガリが付いて来ている。

妃とカガリが出る試合は、テニスのダブルスだ。

指定された場所に行くとすでに相手チームが揃っている。

男子生徒と女子生徒のペアだ。

「君達がボクの相手かい？悪いけどボク達が勝たしてもらおうよ」

短髪の女子生徒が快活な声で妃達に声をかけてきた。妃は一応この学園の生徒の情報は在る程度目を通してしている。

名前は白井美香と言ったか。

「美香、変な宣言は止めてくれ」

白井の横で長身の男が彼女を窘めるように言った。

この男も知っている。有馬辰巳。

この二人は、そこそこの運動ができるということとで有名だ。

「とつとと始めましようよ。返り討ちにしてあげるから」

妃も白井に対抗するような自信に溢れた笑みを返した。

本当は、体育祭の勝敗なんてどうでもよかったが、こういう高飛車な態度が天竜寺妃であり、そう演じる様に命令されている。

カガリを含めた4人はコートに入り、試合を始めることにした。

有馬辰巳と白井美香の運動神経は妃の予想以上だった。

（手強い、というか、）

妃は前方で固まっているカガリを見つめる。

（この子、予想以上に役に立たないわね）

カガリはほとんど動かず、さらにはボールが迫ってくればよけていた。

もはや、天竜寺が一人で戦っていると言っている状態だった。

（まあ、頑張っているんだろうけどね）

試合結果は、妃達の惨敗だ。

試合が終わり、コートの上では白井と有馬が勝利のためかはしゃいでいる。

（うざいわねー、ああいうカップル）

カガリは自分が敗因だと気が付いてるのか、いつもよりも俯いている。妃は特に気にしてないのだが。さすがに見かねて妃は声をかけることにした。

「そんな暗い顔しちゃだめよ」

妃の言葉に、カガリは顔を上げた。「でも、」と暗い顔で何かを言おうとしていた。

内向的な人間は自己嫌悪にハマりやすい。

「こういうときは、誰かの所為にして気分を入れ替えることを勧めるわ。例えば、相手チームの女の胸が平すぎて本当に女かどうか気になって集中できなかった、とか」

そう言っただけで妃は白井に流し眼を送った。

白井は少しむくれた顔で妃に視線を返した。

「胸が無いって誰のこと？」

「さあ？」

妃は肩を竦めてしらばっくれた。実を言うと、残敗で少しだけ機嫌が悪かった。白井は白井で胸が無いことを気にしていたようだった。二人は睨みあい、その二人の後でカガリと有馬がオロオロとしている。

「おい、お前ら、何をしているんだ？」

コートの外から低い男の声が割って入ってきた。振り向くと陰気な女のような顔立ちの男が立っていた。赤井草治。非常に不幸体質の男だ。

以前までは、この男が魔人ではないかと疑っていたこともあるくらいに、不自然なことが彼の周りでは起こっていたのだ。最近はどうでもないが。

「草治？バスケは終わったのか？」

有馬が親しげな口調で話しかける。

「いや、俺はサボってきたから知らない」

赤井が当然だろ、と言った表情で答えると白井と有馬は揃ってげんなりとした表情を作った。

「お師匠」

妃の後ろから泣き声に似た声がして、カガリが赤井に向かって飛び出した。

彼女の行動が理解できずに、妃は茫然とカガリを眺めた。これほど行動的な少女だったのかと認識を改めるほどにカガリの動きは素早い。

カガリは、赤井に飛び付きめそめと泣き声を抑えている。

「草治。その子は？っていうか師匠って何？」

有馬達も呆けた顔をしている。

赤井はバツの悪そうな顔を見せた。

「遠縁の子で、巫女になりたいっていうから、作法とかいろいろ教えてる」

「巫女？すげえな」

何故か有馬が興奮したような声を上げている。

「辰巳？もしかして、巫女さん好きとかいう変態？」

「ち、違う」

白井に醒めた目で見られて有馬が慌てて否定している。

それは、さておき妃は赤井とカガリが親戚同士ということを知らなかった。

（普通、学園の生徒は親戚の情報も含めて把握しているのに。この私が見逃したのかしら？）

最近忙しかったからそうなのかもしれない。いずれにしろ、気を引き締める必要がある。

「天竜寺。カガリがいつもお前に世話になっっているみたいだな」

そう言っって赤井草治が妃に頭を下げてきた。まるでカガリの保護者のようなセリフだ。別に、世話をした覚えは無いのだが。

「俺は、こいつを落ち着いた場所に連れていくために帰るから、後

はよろしく」

唐突に、赤井は泣いているカガリを見てそんなことを言った。

「おい。そう言っただけでサボるきだろ」

「まあ。そんなところ」

赤井は手を振り、カガリと一緒に歩いていった。

（どういう関係かしら？）

恋人、というふうには見えない。でも、なかなか親しげな様子ではある。

（別に、どうでもいいことね。私には関係無いこと、だし）
「関係無いわよね？」

誰にともなく妃は呟いた。

魔法否定の剣

『ひとまず。今日は魔宝具を使います。使い方は普通の魔法具と同じです』

入り込んだ赤蓮の声が頭の中に響いてきた。

その声に従い、紅石と呼ばれる宝石の魔法具を虚空に投げた。

すると紅石は空中で止まり、そこを中心とした魔法陣の円が飛び出した。

それを見てカガリが感嘆の声を上げる。

草治もこの赤い宝石の魔法具の簡単すぎる操作に驚いていた。ただ、投げるだけで魔法陣が飛び出すのだ。

紅石の魔法陣を閉ざし、虚空で固定されている紅石を手に戻した。

「これはどうだい？」

赤井草治は赤い宝石をカガリに渡して言った。

カガリは口を開いて宝石に魅入っている。

「これは、何ですか？」

「その石は魔法具の一つ」

カガリから魔法を教えて下さいと乞われてから草治は一応魔法について講義をしている。付け焼刃であるが、赤蓮からもカガリに魔法について語れと言われている。

昼間、カガリは赤城カガリとして学校に向かい、その後は草治が魔法の授業をしている。もちろん草治は魔法なんて使えない。そしてカガリも魔法が使えない。しかしカガリの体質には魔法が扱えるはずだと鬼姫は断言していた。とりあえず赤井神社の倉庫にあった魔法具の使い方を教えている。

「魔法は、魔法の源流と呼ばれている場所から己の魔法を取り出さないといけない。取り出す方法は、魔法陣を描くことでこちらと魔法の世界を繋ぐことが基本。これができないと始まらない」

「はあ、分かつてはいますけど、魔法陣の描き方が良く分からないんです」

「より精密な魔法陣になればなるほど魔法の源流に近付きやすくなる、らしい。だけど今はそんな小難しいことを考えないで、この魔法具に入っている魔法陣に従ってみろ」

草治がそう言うと、カガリは宝石を虚空に投げた。

宝石はくるくる回転しながら床に落下した。

「本来なら、意識しただけで、宝石から魔法陣が飛び出すんだけど、もっと簡単な魔法具のほうがいいのか」

草治が困ったように言って今日の授業は終わることになった。

カガリが赤井神社にやってきてしばらくたつが魔法に関しては進展がない。

「あの、やっぱり、私には才能が無いのでしょうか？」

不安そうな顔でカガリは草治に聞いてくる。

いろいろな魔法具を使っても魔法陣の一つも出せないことを彼女は気にしているのだろう。

だが、ひとまずこの少女は最初よりもいろんなことを話すようになった。学校に通っていることが大きな要因になっているのかもしれない。

今日の体育祭では失敗したと落ち込んでいる所為でいささか雰囲気暗い。

「まあ、時間はたくさんあるからゆっくりやってみればいい」

草治は穏やかな口調でそう言ったが、カガリの表情は晴れない。

もっと他に励ましの言葉を送ろうと草治が思考する。

草治が何かを言う前に、カガリが草治と目を合わせて弱々しく笑った。

「多分、時間はそんなにありませんよ。近くに、お母さんが来ているのを感じます。きっと、私を連れ戻しに来たのです」

体育祭があつた夜のことだ。

守巢市で情報を集めていた工作員達から突然連絡が途絶えた。何かがあつた。天竜寺妃のカンがそう告げていた。

（連絡が途絶えた場所は守巢湖公園付近ね）

位置を確認して、妃は家を飛び出した。

現在、目的地に一番近い魔人狩り部隊は妃だ。いの一に番に魔人に近付くチャンス。

（勝算もある）

妃は全速力で夜の街を駆ける。

守巢湖に面した場所にその公園はあつた。公園と言ってもむしろ広場といった感じた。ブランコなどのかわりに、様々な形の石像達が散らばっている。

それほど遅い時間帯ではない。

だが、公園には、その周辺にも人がいない。やけに閑散としている。

公園の中心にあつた石像の上には、一人の女が座っていた。

20歳くらいだろうか。眼鏡をかけていてお堅そうな雰囲気のある女だ。

「貴方ですね？執拗に私を探っていた『ヤオヨロズ』の職員は」

女は眼を細め、妃を見下ろしながら言った。ものごとに敏感な妃はすぐに女の嫌悪の籠った視線を感じ取った。

「貴方が、円治兄さんをぼこぼこにした魔人かしら？もしそうなら、私は貴方を捕まえないといけないの」

「円治、というと天竜寺円治ですね？あの高慢で雑な魔法の使い手」嘲笑するような声を聞き、妃は軽く息を吐く。

（ようやく魔人を見つけた）

『ヤオヨロズ』の奴らを見返す機会が来たのだ。

妃は懷から短剣を取り出した。幾何学的な紋様が刻まれた黒い剣だった。

これは奈葉霧という化け狸を捕まえた報酬として上司である明久から貰った高度な魔法具だ。これが、彼女の自信を煽っていた。

妃が自慢気に短剣を振りかざすのを視て女が嘆息した。

「ああ、本当に『ヤオヨロズ』は私の邪魔ばかりする。私はただ、私の大切な、大切な娘を探しに來ただけなのに」

嘆きの言葉が出てきたわりには女の瞳は飢えた蛇のようだった。口下を女は舌で唇を舐める。その舌の動きも蛇に似ていた。

「『ヤオヨロズ』なんて皆死ねばいいのに。本当は、全員殺したいけど我慢しているのに。どうして貴方達は私の前にやって来るの？ 殺して、と言っているみたいじゃないですか」

『ヤオヨロズ』への嫌悪を吐き、女の腕が蛇の如く跳ねあがった。その指には赤い指輪が付いている。

「世界を造る理よ。世界を形作る理よ。私の幻想を受け入れなさい」
朗々と、女は唱えると指輪から赤い光が溢れだした。

女を起点として赤い円が大地に広がっていく。

赤い円は血の池のような色をしていた。

（血の池）

そんなことを妃は思った。

そして、血の池からいくつもの真赤な腕が飛び出した。腕だけではない。次第に人影が現れる。赤いゾンビだ。

「気味が悪い魔法を使うわね」

「貴方達、『ヤオヨロズ』に言われたくないわ。人間の理を無理やり変えてまで魔法を求めるなんて、本当にヘドが出る」

遣伝子教育のことだろうと妃は思った。

今でも、人間の遣伝子を変えることに抵抗を感じる人間も多いようだが、眼の前の女はそんな倫理観だけで『ヤオヨロズ』を敵視して

いるには、女の視線がやけに粘っているように思えた。

「本当に、本当に汚らわしいわ、貴方達。『ヤオヨロズ』の人間は本当に壊れているわよ。もはや人間じゃないわ。だから、あんなに簡単に、笑いながら私の神を壊せたのよね、きつと」

女の瞳は危ない輝きを放っていた。

「そうよ。貴方達みたいのが、神を狩るのはおかしいわ。貴方達みたいなクズの所為で、私の娘も怯えているのよ」

理解不能な女の話聞いて妃は不敵に笑う。

この女は壊れている。

それでも、臆さずに妃は己の魔法を身体中にめぐらせた。妃の顔から笑顔が剥がれ落ちて、人形のような無機質な顔へと変わっていく。幼いころから妃は魔法を呼吸するような感覚で扱うことができた。彼女の魔法は微小な電気を造ることだが、応用すれば身体能力を高めることができる。

身体が軽くなったのを感じ取った後、妃は目標の女に向かって走り出した。

彼女の前には赤いゾンビ達が壁となって立ちはだかっている。

疾風の如く速く、軽やかに。

妃はゾンビ達の距離をつめて魔法の剣を一閃。

妃の短剣が触れた刹那、ゾンビは赤い塵となって消えていく。

（凄い。これが、魔法解除能力）

予想以上の剣の力に心の中で称賛の声を上げた。

負傷した円治から、この魔人の魔法について聞いていた。

どれだけ攻撃しても、死ぬことが無い赤いゾンビ達。

円治はそう言っていた。円治の炎の魔法が全く効かなかったと。

だが、妃の手元にある剣はあらゆる魔法の存在を否定する。

動きを止めること無く、剣はゾンビを貫き続ける。

女に向かって、一直線で妃は駆ける。

「っな？まさか私の魔法が消えた？分解されたわけでもない。『帰された』わけでもない」

狼狽した声が女から聞えてきた。

妃は、足に魔法を集中させてゾンビ達の上に飛び上がった。そのままゾンビの頭を踏んで突き進む。

「私の魔法が『否定』されたということね。さすがは無色の魔法。面白いわ」

女に肉薄し、そんな声が聞こえてきた。

だが、後は妃が剣を女に向かって振るうだけ。もちろん急所は外す。

普通の人間ならばとらえ切れない速さで。

「でも、私の赤い魔法も面白いわよ」

余裕に満ちた女の声が聞えた。

女の顔から赤い腕が突然生えた。腕が妃のほうへと伸びていく。

（早く、否定しないと）

妃は目の前の腕を斬り落とす。

だが、腕を否定した後、妃はあることに気が付いた。感覚が研ぎ澄まされすぎているゆえに気が付いた。

（腕に囲まれている？）

妃の周囲360度、その全てに赤い腕が浮いていた。

その腕のほとんどが空中で固定されている。

「私の魔法陣に入った時点で貴方の負けよ。私は赤い私兵を無限に、簡単に引き出せるの」

妃の腕が、足が掴まれた。

細い腕のわりに、とんでもない握力だった。

魔法によって痛覚も抑えているため痛みはないが。

（結局、私は無能でしかないのね）

妃は醒めきった頭でそんなことを思った。

火神の残骸

小説数年前の話だ。

茅野恵美は火神に仕える魔術師だった。彼女と神は姉妹のような関係でお互いにお互いのことを信頼していた。恵美も火神を姉のように慕っていた。

だが、ある日『ヤオヨロズ』の魔術師が彼女達のもとにやってきて言った。

「さあ。試験の時間だよ。今日一日、俺に殺されたら不合格。俺から逃げられたら合格だよ。簡単で分かりやすいルールでしょ？」

男はそう言って彼女の神を殺した。

男の顔は覚えていないが、その時の記憶は忘れたことが無い。

あれから努力を続け、赤い魔法の使い手としては随一の実力を得た。全ては、彼女の大切な娘を護るためだ。

だが、ここ数週間、彼女の娘の消息が掴めない。一応、この守巢市の周辺から気配は感じるのだが、気配が巧妙に隠されている。

(もしも、カガリが『ヤオヨロズ』に捕まっているのなら)

恵美は唇を噛みしめて、天竜寺財閥の影響力の強い総合病院を眺めていた。

この場所に天竜寺妃が入院している。

昨日、妃を痛めつけたが殺しはしなかった。

『ヤオヨロズ』を殺すことは『オノゴロ』という組織に禁じられているから。

まだ、『オノゴロ』に逆らえない。せめてカガリが魔法を使えるまでは。

だからひとまず妃に近づく『ヤオヨロズ』構成員を手当たり次第に調べるしかない。

だが、なかなか大物が釣れない。

下っ端ばかりだ。

（やはり、天竜寺財閥の本部に乗りべきかしら）
そんなことを考えていた時だ。

ある少年が病院に入っていくのを見かけたのは。

恵美は眼を見開き、身体を震わせて少年を凝視する。

女のような綺麗な顔立ちの黒髪の少年だ。その顔に見覚えがあった。
「麻美様？」

震える声で恵美は呟いた。

体育祭の次の日。

天竜寺妃が入院したという噂を草治は聞いた。

階段から落ちたらしいと妃と同じクラスのカガリは学校から帰ってきて言った。

草治には彼女がそんなミスをするとは思えなかった。仮にも天竜寺妃は『ヤオヨロズ』という組織の魔術師だ。

「そういうわけで天竜寺のお見舞いに行ってくるよ」

草治は鬼姫達に残して一人で神社を出た。

本当はクラスメートのカガリにも付いて来て貰いたかったが、カガリは恥ずかしいと言ってブンブンと首を振るので仕方が無い。

お見舞いとなると、果物でも持つていくのが無難だろうと考えてリ
ンゴを買って妃が入院しているという病院に行ったが妃の部屋は面
会謝絶となっていた。

そういうわけで何の収穫も無く草治は、神社に帰ることにした。

しかし、街を歩いていると妙に首筋に粘つく視線を頻繁に感じた。
たびたび振り向くと、いつも同じ女がこちらを視ていた。

眼鏡をかけた長髪の女だ。歳は20前後。

女は恍惚とした顔で草治を見つめているような気がした。

（ストーカーさん、かな）

不気味なものを感じて草治は走り出す。

すると女も追いかけてくる。

（本物だなあ）

げんなりとした面持ちで草治は走る。

女の足は意外と速い。

これでは神社まで付いて来てしまうだろう。

ストーカーに自宅がばれるのは厄介だ。

草治は足を止めた。女も足を止める。

ため息をついて草治は女に近付いていく。

草治が歩いていくと女は笑みを深めていた。そして草治よりも先に女が口を開いた。

「もしかして、貴方が麻美様の御子息ですか」

「あれ？母さんの知り合い？」

母の名前を出されて草治は気の抜けた声を出した。

草治の返事に女は感極まったという具合で両手を擦り合わせた。

「やはり、やはりそうですか。まさかこれほど麻美様と似てらっしゃるとは。私は茅野恵美と申します」

草治と母は本当に似ている。時々、クローンなのでは？と疑われることもあるほどだ。

「はあ。そうですね。母とはどういう関係で？」

「麻美様は私にとって赤い魔法の先輩といったところですね」

道端で魔術師と会うのは草治にとって初めてだった。というか大きな声で魔法とか言わないでほしかった。恥ずかしいから。

茅野恵美という女性は草治の手を握りしめてきた。

草治はぎょつとした顔で下がるが恵美は気にしない。

「ああ、本当に麻美様に似てらっしゃる。抱きしめていいですか？」
「止めて下さい」

草治がきっぱりと言った。

面倒くさそうな人だと草治は思った。

「それで？貴方の祀る神様を探すため、この守巢市に来たと？」

歩きながら草治が聞くと恵美は首肯した。

出会った時はテンションがものすごい高かったが、次第に落ち着いてきて今は大人の女性といった雰囲気を出している。

「ここ数週間探しているんですけど、なかなか見つからなくて、困っているのですわ」

「大変ですね」

適当に相槌を草治がうつ。

「そうなんです。多分『ヤオヨロズ』に誘拐されてしまったんですわ。本当に困りましたわ」

そのわりに恵美には余裕がある気がした。

もしかするとアララギのように『ヤオヨロズ』上層部と面識があるのかもしれない。

草治と恵美は赤井神社の鳥居までいっしょに歩いた。

恵美が麻美の暮らした神社を見たいと希望するので草治が案内することにしたのだ。

「へえ。ここが麻美様自慢の魔法の神社ですか」

鳥居をくぐり、閑散とした神社を視て恵美は少し落胆したような声を出した。

「意外と普通ですわね」

恵美は拍子抜けしたような顔を見せた。

しかし、その顔はすぐに驚愕に変わることになる。

赤井神社の宿舎から一人の少女が顔を出した。

真赤な髪が揺れる。

「力、カガリ？」

悲鳴のような声が恵美から上がった。

その声にカガリは怯えたような顔をしたのに草治は気が付いた。

「お、お母さん」

ぼそぼそとした声でカガリが言う。

それを聞いて草治も驚いた。恵美のような若い女がカガリの母親だったとは思いもしなかったのだ。

恵美がカガリに近付いていく。

「もう、心配しましたのよ。突然出ていくから。ってきり『ヤオヨロズ』に捕まったのかと」

恵美はカガリに抱きつき、涙声で言った。

（何はともあれ、親子の感動の再会というやつか）

だが、カガリは震えるだけで無言だ。嬉しさの震えじゃない。

何か、不自然だと草治は思った。

「さ。帰りますわよ、カガリ。もう家では儀式の準備も整っているの」

穏やかな声で恵美が言っているとカガリの怯えがさらに膨らんだような、そんなふうに草治には視えた。

明らかに、カガリは恵美が言う儀式を怖がっている。

「草治。お前は本当に、周囲の縁の糸を歪めるのが上手ね。せつかく前回のツヅリの教訓を生かしてカガリの魔法の気配を消していたのに」

神社から鬼姫が歩いてきた。その顔はかなり不機嫌に見えた。

鬼姫は険しい視線を恵美に向ける。

「言わせてもらおう。何度儀式をしても、カガリは生きかえらない」
草治には鬼姫の言わんとすることが分からなかった。

（カガリが生きかえる？）

カガリは草治達の眼の前にいるのに。

鬼姫は草治の困惑をよそに恵美を真っ直ぐに見つめる。

「正確には、オリジナルのカガリという神様をお前は蘇らしたいんだろうが、無理だ。諦めろ」

「無理では無いですわ。私の理論は今度こそ完璧なの。きっと成功するわ。どうして皆分からないのかしらね」

恵美は諭すような声音で言った。

鬼姫は双眸を強くする。

「無理だ。いや、止めなさい。結局のところ、儀式とやらでその力ガリを殺すのでしょ？『オノゴロ』が黙っていないわ」

「違いますわ。カガリを殺すのではなくて造り変えるのです」

草治は鬼姫と恵美の言葉に絶句した。

（カガリを殺す？造り変える？）

当のカガリは黙ったままだ。

ため息混じりに鬼姫は恵美から視線を外して草治に向けた。

「カガリという神は、昔、『ヤオヨロズ』に殺されたの。そこで、今ここにいるカガリはカガリ神の死骸で造られた神様もどき」

そう言つて鬼姫は踵を返した。

「まあ、私は忠告したし、後は好きにきなさいな。馬鹿な魔術師さん」

鬼姫は言い残して神社へと戻っていく。

何が何だか訳がわからない草治は、鬼姫を説明を求めるために声をかけようとした。

だが草治の口が開く前に、恵美が奇声をあげた。

「忠告？そんなもの必要無いわ。私は今度こそ、カガリを直すから」
そう言つて恵美は慈しむようにしてカガリの頭を撫でる。恵美に触れられてカガリの身体がブルリと震えた。

「魔法がろくに使えない身体を壊して、造り直してあげる。大丈夫。全て私に任せて、カガリ」

「や、やだ」

カガリがポツリと呟いた。

恵美の優しい顔が強張る。

「どうしたの？カガリ」

「もう少し、もう少し待つて。お母さん。すぐに、すぐに魔法を使えるようになるから」

真っ青な顔でカガリが叫ぶ。

「何を言っているの？そんなことしなくても儀式で貴方を造りなおせばいいだけのこと。折角だからその卑屈な心も直してあげるわ」

「や、やだつてば！」

大声が響き渡った。

カガリは恵美の腕を振り払う。

恵美の顔が凍りついた。

「本当に、今回のカガリはどうしようもないわねえ」

声には苛立ちが混ざっていた。

今回、つまりは前回もあつたのかもしれない。

恵美は右腕と振りかざす。その指には紅い指輪が一つ。

それを視て草治の背筋に悪寒が走った。

「赤蓮！」

「はい、はい。準備万端ですよー」

草治の目の前に剣を持った赤蓮が現れ、草治の中に憑依する。

紫色へと瞳が変色する。

恵美の瞳も紫色へと変わっていた。

赤い魔法の使い手の魔眼は紫色を宿すことが多いということを以前、

赤蓮がいつていた。

「カガリ、逃げろ！」

草治の声を聞き、カガリは草治のほうへと走り出した。

訝しげな顔で恵美が草治を睨む。

「どうして、邪魔するのですか？草治様」

「ふざけんな。お前の都合にカガリを巻き込むな」

怒鳴り声を草治があげる。

すると恵美が瞳を伏せた。

「麻美様ならばきっとそんなことは言わないでしょう。やはり姿が似ているとはいえ、草治様と麻美様は違うのですね。失望しましたよ、草治様」

暗い輝きを恵美の瞳が放っている。

（壊れているな。この女）

草治は心の中で吐き捨てた。

『人間誰しも、壊れてしまう時があるものです。ご主人様はそれが悪いことだと思うのでしょうか』

赤蓮の声が聞えたような気がしたが草治はその声に返す余裕はなかった。

恵美を起点として赤い魔法陣が広がった。

そこからいくつもの赤いゾンビが這い上がってくる。

赤井少年と赤蓮

『鬼姫は、依頼者から恵美さんと魔法をぶつけ合うのを禁止されています。ここはご主人様が、恵美さんを止めてあげるしかありませんよー』

能天気にも語尾をのばして赤蓮が説明する。

赤蓮が言う依頼者こそ草治の母親である麻美本人なのだが、このことを草治は知らされていない。麻美自身がそう望んだのだ。今はまだ草治は知るべきではない、と。

麻美が力ガリを赤井神社に連れてきた時に依頼したことは3つ。

一つは力ガリに人間の世界のことを教えること。そして力ガリの身柄を保護すること。最後に、力ガリに執着している恵美の心を救うこと。

しかし、赤蓮は草治に力ガリに人間の世界を教えてほしいとしか言わなかった。草治には危険なことをしてほしくなかったから。

いや、麻美の思惑道理に草治が動くのが嫌だった。麻美は赤井草治を魔術師として鍛えようとしている。そんなことをされたら更に草治が赤蓮から離れてしまう。

だが赤蓮の思惑を知らない草治は馬鹿みたいに恵美を神社に連れてきた。そして結局麻美の予想道理に草治は剣を抜いている。

不快だった。

恵美の魔法陣から這いで、紅の人影がゆらゆらと身を揺すりながら向かってくる。対して草治は剣を構える。

『それにしても、恵美さんの魔法は純度の高い赤色をしていますねー。おそらくかなりの使い手ですよ』

一応、赤蓮が解説を始めたが草治はそれどころではないため返事をしてくれない。

紅いゾンビ達は猫背で足どりは酔っ払いのようにふらふらしている

が、その動きは素早い。筋力のような力は高いのだろう。

あつという間に近付いてきたゾンビ達に草治は真横に剣を振るう。剣の軌跡の後には、空間に血がにじみ出たような亀裂が入っている。この鈍い血のような色こそ、赤い魔法の象徴だ。魔術師のランクは、振るわれる魔法の色の純度で判断できる。

草治の色は赤井の剣の力だが、恵美の色は実力によるもの。

紅いゾンビ達のいくつかが草治が入れた亀裂に飲み込まれていくが、恵美はゾンビを無限に製造できる。

（これは、勝ち目がありませんねー）

心の中で赤蓮はため息を吐いた。

まあ、今回は危なくなったら鬼姫が助けてくれるのだろうけど。

草治は剣を一心不乱に振り続けて亀裂を造っているが、次第に息が荒くなっていくのを赤蓮は感じ取った。もともと赤井の剣は使用者の負担が大きすぎる。

『おそらく、恵美さんが造った魔法陣の中心を剣で突けば全てのゾンビが消えるかと』

赤蓮が草治の頭の中で声を響かせた。すると今度は返事を返してくれた。

「このゾンビの中を掻きわけて行くのは無理、だと思われる」

かなり弱い声だった。ゾンビ達の動きの速さ、そしてその数は草治は敗北する未来しか予想できないようだ。

「逃げるぞ、ひとまず」

そう言つて草治はカガリの手を引いて鳥居のほうに走り出した。カガリは茫然としながらも草治に付いてきた。

一気に草治とカガリは石段を駆け下りる。

しかし、逃げられない。赤蓮はそう思った。

そして彼女の予想は的中する。

『上から、なにやらいっぱいきましたよー』

赤蓮の声に反応して草治は後を振り向き、息を飲む。

神社の境内から紅い噴水が上がっていたのだ。

紅い水ではなく、紅いゾンビ達が密集した噴水が空に上がっている。西に東に北に南に、ゾンビ達がこれでもかとばら撒かれていく。そして大雨の如き量で草治達のもとにも落ちてくる。

咄嗟に草治は剣を振るって亀裂を造った。

ゾンビ達は亀裂に吸い込まれていくが、膨大な量のゾンビ達全てを呑み込めなかった。草治とカガリはゾンビの洪水に押し流される。

草治とカガリは赤井神社の石段から転がり落ち、視界いっぱい集まったゾンビ達に押さえつけられた。草治は首を掴まれ、仰向けで倒れていた。

「本当に、ここらへんの魔術師は軟弱ですね。草治様も、『ヤオヨロズ』の職員も」

どこからか、恵美の声が聞こえてきた。

草治の視界と赤蓮の視界は今繋がつているため彼女がどこにいるかは分からなかったが、近くに来ていることだけは分かった。彼女の声は勝ち誇っている。

（まあ、魔法を知って数カ月のご主人様では、相手にならないのは仕方ありませんけど、この人はまだ諦めるつもりはないようですねー）

草治の中で苦笑し、赤蓮は草治から気力が湧き出てくるのを感じていた。噴水のような激しい気力ではない。むしろ、湧水のような慎重ましくも芯のある気力だ。

草治の紫色の瞳に力が入る。

「『ヤオヨロズ』の職員？」

紅い集団の奥にいる魔術師に向かって草治が尋ねる。

どこからか恵美のクスクスとした笑い声が聞えてきた。

「天竜寺という魔術師達です。私が魔術師としては再起不能になるまで苛めてあげた人なんですけど、もしかして知り合いでしたか？」
恵美の嘲笑うような声を上げる。

「草治様にも見せてあげたかったですよ。特に、天竜寺妃とかいう小娘なんか左腕と左足をすごく綺麗に美しく、ぽつきりと折ってあげましたわ。それなのにあの娘、表情一つ変えませんの。やはり、『ヤオヨロズ』の人工魔術師は気味が悪い」

恍惚とした声が響いてきた。

それを聞いてカガリから絹を裂く悲鳴のような声が上がった。恵美の気味悪い告白のためか、それとも知り合いの妃が母親に暴行を受けたことを知ったためか。いずれにしろ、カガリにとっては衝撃的な事実だろう。

恵美は歌うような声音で続ける。

「『ヤオヨロズ』の倫理観は間違っていると思うのよね。組織としては神を保護するとか歌っていますけど、遊び感覚で弱き神を殺す人間もいるのですよ。神を何だと認識しているのでしょうか」

問いかけるような声に、草治は答えない。身動きが取れないため、ただ歯を食いしばっていた。紅いゾンビの力とはとてもなく強い。カガリからは泣き声が聞こえてきた。よく泣きだす子だと赤蓮は思った。

「でも、おかげで私は分かりました。神とは、絶対的に崇めたてまつられないといけないモノなんです。つまり、心も魔法も弱い神ではダメなんです。こんな、カガリではダメなのです」

「はなして、はなして下さい！痛い、止めて」

カガリの悲鳴で赤蓮は理解した。どうやら恵美はカガリを捕まえたようだった。対して恵美はカガリを叱りつけるような声を出す。

「どうして、分からないの？カガリ。今の貴方じゃ、ダメなの。『ヤオヨロズ』を皆殺しにするどころか、貴方なんかじゃ、誰にも認められないの。これ以上、私の手間をかけさせないで」

さらに、『ヤオヨロズ』討伐宣言も聞こえてきたが、それ自体は草治にとってはどうでもよかったようだ。

草治の頭の中に赤井麻美との記憶が流れていくのを赤蓮は視た。

「馬鹿じゃねえの？」

草治の低い、低い声が口から漏れた。侮蔑と嫌悪が混ざった短い言葉が周囲に響いていく。この少年は口下手だが、彼の言葉にはある種の力がある。恵美とカガリから漂う胃が痛くなるような空気が凍ったのを赤蓮は感じた。

「アンタは、カガリの母親なんだろう？ だったら、何で自分の子どもを否定する。カガリは、アンタのために魔法が使えるようになったいと言ったんだぞ？ その気持ちすら否定するのか」

「はあ？ どっちにしろ、このカガリに魔法の才はほとんどない。どんなに頑張っても、程度が知れてるのよ」

「はっ。大切なのは才能や資質ってか。その考えは、『ヤオヨロズ』の優れた遺伝子を優遇する思想と同じだな」

「草治様、いい加減、殺しますよ？」

恵美の言葉はナイフのように尖っていた。

己の思想が、忌み嫌う連中と同じだと貶されたのだから当然の反応かもしれないが、同時に草治の首を掴む紅いゾンビの力が強まっていく。

「つく」

草治の顔が苦痛に歪む。

そろそろ潮時かもしれない、と赤蓮は思った。

しかし草治も、右手に握られた剣に力を込めていく。まだ、足掻くつもりのようにだったが、もう遅い。もう草治は息すらできない状態だ。

『負けですね』

『まだ、負けてない』

赤蓮が告げると、草治の心の声が彼女に飛んできた。こんなことは初めてだった。赤蓮の驚きをよそに草治は声を造る。

『赤井神社は、歪んだ縁を結び直す、縁結びの神社だ』

草治の頭の中で麻美との記憶が広がった。

ずっと、昔、麻美は草治に問うた。

将来何になりたいか、そんなありふれた質問だった。それに草治は、なりたいたいものなんて無い、自分になれる職業なんて無いと答えた。子どもにあるまじき捻くれた答えた。この頃から、少々卑屈な少年であつたようだ。

麻美は草治の答えを聞いているのか、聞いていないのか、笑顔でこんな言葉を草治に返してきた。

「それなら赤井神社の魔術師になるべきだわ。赤井神社は、歪んだ縁を持つ人間を招き寄せる魔法の神社。草治は彼らを助ければいいわ。誰かを助けてあげる仕事ってとてもステキだと思わない？」

正確には初代赤井の魔術師が、レンと呼ばれた鬼と彼の歪んだ縁を嘆き悲しみ、その罪滅ぼしのために造った魔法の神社なのだが。

何はともあれ、麻美から提案された良く分からない職業を聞いて草治は軽く息を吐いた。

「俺みたいのが、人助けなんて出来るわけないと思うのだけど」

「大丈夫よ。困った人はね、とりあえず誰かが側に居るだけで安心するものなの。一人で困るよりも、二人で困るほうがいいでしょ？草治はただ、一緒に困ってあげればいいの」

「そうなんだ。簡単な仕事だから俺にも出来そうだね」

麻美の適当な言葉に、幼き草治は満足げに頷く。

自分みたいな人間が誰かの助けになれると思っただけで珍しく草治の胸が高鳴ったのだ。

そんな話を昔、したことがあつたのを草治は思い出していたようだった。

実際は簡単なんてとんでもない話だ。

今も、草治は首を絞められて意識を失いかけている。

その一方で気力だけは満ち溢れている。

草治が剣をよろよと振り上げた。

赤蓮には草治が何をしようとしているのかが分かっていた。無理だ

と思った。現に、草治の腕からは力がどんどん抜けている。それでも、草治は剣の切っ先を真下に向けて剣を道路のコンクリートへと刺しこんだ。

どぶり、と泥沼を斬ったような音が剣と道路から上がった。

剣がコンクリートへと刺さり、道路から血が出たような赤い亀裂が生まれていく。

赤い亀裂は、傷口から血が漏れていくかのように、どぶどぶと赤く細い線を大地の上に広げていく。

『赤井の剣の有効範囲は、刀身の長さまでって決まっています
が』

赤蓮はやれやれ呆れたと言わんばかりの声を響かせた。

剣の亀裂は、草治を中心とした蜘蛛の巣といった具合の形と大きさで完成した。

「帰れ」

草治が呟き、亀裂がパクリと開いて漆黒の魔法の世界がその姿を覗かせた。

周囲のゾンビ達が一瞬で黒い魔法に取りこまれ、吸収されていく。吸収できたのは、赤井神社の境内から溢れ出たゾンビの数を考えれば微々たるもの。

それでも草治の視界が一気に開き、カガリと彼女を押さえている恵美の姿を捕えた。

瞬間、弾けるように草治は起き上がり、二人へと走り出した。

恵美の顔は驚愕で固まっている。

「少しは、頭を冷やせ」

草治が一言。

そしてその言葉と共にとび蹴りを恵美に喰らわせ、カガリから引き離す。

草治という少年は女だろうとけっこう容赦なく攻撃する。何だかん

だで鬼姫に対してもそうだった。

『とはいえ、』

赤蓮は状況を整理する。

恵美は草治に蹴り飛ばされた後すぐに立ち上がり、鬼を思わせる形相で睨んできていた。

『女とはかくも怖いモノなんですね』

いろいろな理由で草治を祟っている赤蓮も同じようなものなのだが、『それはさておき、恵美さんの魔法陣は依然、神社の境内に健在ですよ』

どうしますか、と赤蓮が問う。

『あのバカ女の魔法陣を壊す』

草治は赤蓮の心の声を打ち返すように間髪いれずに赤蓮だけに答えた。彼の心は怒りで満ちている。

どうやら、今回のいざこざで草治と赤蓮はより深くリンクできるようになったから理解できた。

それでも、草治とより近づけることは赤蓮にとっては喜ばしいことだ。思えば、こんな壊れた自分と彼がこれほどに近づけるとは考えたことがなかった。

赤蓮は草治が心を壊した人間を嫌っているのを知っている。だから恵美に対して激しい怒りを抱えている。

けれど、本当は、赤蓮は茅野恵美以上に壊れている。ずっとずっと昔に死んだ時に、壊れてしまったのだ。

昔も今も、草治への歪んだ心で埋め尽くされていて、彼への愛と憎悪が日替わりで入れ替わることもある。きつといつか自分は憎悪に負けて彼を不幸に導くかもしれない。

だから草治は赤蓮もきつと嫌いなのだろう。それでも良かった。そんな関係でよかった。

だけど、一つだけ聞きたかった質問があった。

今なら、彼の本当の気持ちが聞ける。

『私は、恵美さんよりも壊れてます。こんな私は、ご主人様のおそ

ばに居てもいいんでしょうか』

いや、違う。こんなことが聞きたかったわけじゃない。

『私は、壊れたままでもよろしいのでしょうか？』

赤蓮の疑問はすぐに草治に打ち返された。

『壊れているかは知らないが、今のお前がいないと俺は何も出来ないんだよ。悪いが、俺に付き合ってもらおうよ』

そう言つて草治は剣を構えた。

『そうですか。そうですね』

赤蓮は嬉しそうな声を上げた。

今日の草治の言葉は、彼女の中にある草治への愛情と憎悪の天秤へと届いた。天秤は愛情のほうへと激しく傾き、嬉々とした声を赤蓮は上げる。

『どうやら、本日の私はご主人様への愛のメーターがマックスです。もう、メチャクチャ頑張っちゃいますよー』

赤蓮の華やかな声と一転して、草治とカガリの周囲に気味の悪いゾンビ達が再び集まり出す。

火神の魔法

カガリにとって茅野恵美は母親であり、絶対的な存在だった。

恵美の意思に従うためにカガリは動いてきた。

彼女が魔法を使うように言ったから、頑張って魔法を覚えようと思ったのだ。魔法が使えない『カガリ』は要らないと母が言ったから赤井神社までやってきた。

でも、母は言う。

今のカガリには魔法の才能は無い。

今のカガリの心すらもダメだと言われた。

だから捨てられるのだ。壊されるのだ。

そのことを悟り、カガリの心と身体が悲鳴を上げた。

「何で、何で私は、こんなに、こんなにも役立たずとして生まれてきたのですか」

誰にともなく、カガリは憎悪の言葉を己に吐いた。

カガリは恵美を恨むことはなかった。

自分の心が弱く、魔法も使えないから、今のカガリは死ぬのだ。つまり全て自分が原因。

「私が、私が不甲斐ないから、天竜寺さんまで」

先ほど告げられた母による天竜寺妃への暴行も少女の心を抉っていた。

妃とそれほど仲が良いわけではなかったが、カガリは彼女に好感を持っていた。何だかんだでカガリを気遣ってくれた。

沈み込むカガリの肩を草治が揺すった。

「お前は何一つ悪くないよ。悪いのは、あの女だ」

草治が強い口調で言う。

だがカガリの心は晴れることはない。むしろ面と向かって絶対的な存在の母を侮蔑する言葉を向ける草治に反感を持った。

「お母さんは、何一つ悪くありません」

私が悪い、とカガリが甲高い声で叫んだ。

カガリは強い力で草治の腕を引っ張り、鬼気迫る顔で彼を睨みつけた。

草治の口から、わずかに息が漏れた。

それを見てカガリは少し戸惑った。

見ようによつては草治が笑ったようだったから。

「なるほど、悪いのは無力な自分ってか。それなら、お前は具体的にどういう自分だったら悪くなかったと思えるんだ？魔法が使えるように生まれてきたらよかった？」

草治に問われ、カガリは頷いた。もつと魔法が使えて、もつと神らしく堂々と出来ていれば母が機嫌を悪くすることもなかった。

カガリの首肯に草治は眼を細める。

「そうだな。だけど、そんな贅沢が現実には叶わないことも分かっているよな」

冷たい言葉だった。

カガリの理想は贅沢なものでしかない。ただの甘えだと彼は言う。

「分かっています。やはり、私はお母さんにとって要らない子だとずっと前から理解してました。だったら、無力な私はどうすればいいんですか？死ねば、いいんですか？」

「お前の母親がどうか知らないが、世界に要らないものは無いよ」

草治が言い、剣をゾンビへと振った。

カガリは混乱して気が付かなかったがいつの間にか、周囲は紅いゾンビが寄ってきていた。

「たぶん、どんな人間もどんな存在も、本人が知らないだけで必ず世界からは必要とされている。無力な存在なんてこの世界には無いよ」

淡々とした声音がカガリの心に妙に反響した。

斬りつけられたゾンビから彼らの赤色とは違う赤い亀裂が生まれる。まるでゾンビから血が出ているかのような光景だった。亀裂が開き、ゾンビのいくつかが吸い込まれていく。

続けて草治は周囲を斬る。

「カガリ、お前だってそうだよ。お前は役立たずでは無い。今のお前の縁はからまっているからそう思えるかもしれないけれど、からまった縁は俺達がほどいてやる。赤井神社はそういう場所だ。だから、カガリの力も貸してくれ。お前の母親と仲直りしたいだろ？」

仲直り、その言葉はカガリの心を揺さぶった。

最後に、草治は地面へと剣を突き刺した。それこそ蜘蛛の巣を大地から血がにじみ出たような亀裂が広がる。それこそ蜘蛛の巣を描くように。

あたり一面のゾンビ達は蜘蛛の巣を模した亀裂へと、ごっそり墮ちていく。

紅い景色が一気に消え、恵美の姿が再び現れた。彼女は怒りで顔が歪んでいた。

草治は怒り狂う恵美へと赤井の剣を向けた。

「そういうわけだ。アンタの縁も魔法も全部あるべき場所に戻ってもらう」

「ははは。偉そうなことを言うけど、草治様、アンタ息切れしてるじゃない。言っておくけど、私はまだまだ余力があるのよ」

「ああ、そうだな。俺は魔法を使いすぎた。っていうか、なんかもう吐きそうだな。魔法を使う度に、吐き気をもよおすから出来るなら、もう降参したいけど」

よく見ると草治の顔が青白い。

それでも彼の瞳はまだ足掻くことを語っている。

恵美は草治の戯言を鼻で笑い、再び右手を掲げた。

「なんで、草治様はこんなに首を突っ込んでくるのよ。アンタは関係ないでしょ？どっかに消えて下さいよ」

周囲にゾンビ達が集まり出す。

草治も再び剣を振り上げる。

絶対的に不利な状況に関わらず母に抗う草治の姿に、カガリは感嘆した。

カガリにとって絶対的な存在の恵美に、臆することなく草治は抗っている。恵美に対して絶対服従だった彼女には、その姿勢は新鮮だった。

（もしかしたら、私はいろんな理由をつけて、怖ろしい母に抵抗することから逃げてきただけかもしれない）

そんなことをカガリは思った。

今までは、母の言いつけを守り、母の期待にそうすることが全てだと思っていた。

だけど、草治達と接し、人間の学校に通って気が付いた。

誰かに従うだけではダメなのだ。誰かの指示を待つだけではダメなのだ。

自分の正しいことをすべきなのだ。

そして、カガリの心は決まっていた。

（私は、まだ生きたい。そして、お母さんともっと仲良くなりたい）

いつしか、カガリの手はポケットをまさぐり、ある物を掴みとる。

それは、草治から渡された紅石と呼ばれる魔法具だった。

無造作に紅石を投げると、瞬く間に赤い魔法陣が飛び出した。初めての成功だが、それほど感動しなかった。むしろ、今のカガリには出来て当然だと思えた。

そして、カガリは草治の魔法についての講義を思い出す。

『魔法の原則は、反射』

そのことをいつも言われた。言われた時は何のことか分からなかったが、今なら分かる気がする。

魔法陣の中に黒い世界が映る。全ての色が重なり合った混沌の黒。本当の魔法の世界だ。

黒い世界に人のシルエットが浮かぼうとしていた。

黒い姿はあつという間にはつきりとした像へと変化する。紅い髪の少女の姿へと変化した。

自分の姿だ。あたかも鏡に映るように魔法の世界に自分が映っている。

る。

これが魔法の反射。この魔法の像こそがカガリという存在の魔法の質と量。

魔法の像へと手を伸ばす。

同じく、魔法に映った自分も手を伸ばした。

魔法陣を隔て、二つは触れ合った。

途端、魔法の像の自分が、粒子となって現の世界へと飛んできた。

桜吹雪のように舞い、カガリの中へと入っていく。カガリの中で魔法が駆け廻った。

身体が熱い。だがそれすらも心地良い。

荒々しい豪炎が身体を焦がしまわっている。

ああ、燃やさないと。

人も神も世界も魔法も魂すらも。

轟音、暴風、爆炎が突如カガリから上がった。

近くに居た草治はうねり拡がっていく炎を浴びた。

（熱くない）

周囲のゾンビ達は、カガリからの豪炎を浴びてのたうちもがいている。

しかし、草治には何の外傷も与えなかった。

『物理的な炎では無く、魔法の炎ですから、カガリさんが燃やしたいモノしか影響を与えないでしょう』

赤蓮が解説する。

それを聞いて草治は、あることを思いついた。

「カガリ、お前の炎で神社までの道を造れ」

叫び、草治は石段に向けて走り出した。

赤井神社の境内にある魔法陣さえ壊せば草治達の勝ちなのだ。

炎となったカガリは草治の言葉どおり、彼の行く手に立ちはだかる

ゾンビへと体当たりして吹き飛ばす。

血のように赤い炎の中、草治は石段を駆けあがる。

『まさか、カガリさんがこれほどの魔法を使うことが出来るとは。まだまだ荒くて不死身の魔法を完全には消せてはいませんが、これなら神格だって認められるかもしれません』

赤蓮がしみじみとそんなことを言っている。よく見ると炎の中には、苦しみもがいているゾンビ達がちらほらと見受けられる。どうやらカガリでもゾンビを倒すことは出来ない様だった。

草治は石段を登りきり、境内の真ん中の地面に描かれた魔法陣を見つけた。

もう、身体は疲労で限界だった。足に力を込めてそこまで走る。

魔法陣も血の池のようだった。

草治は剣を振り上げて、魔法陣の中心へと刺し込んだ。

紅い魔法陣の上に、草治の暗い赤の亀裂が差し込まれていく。

そして亀裂は広がり、黒い魔法の世界が覗き見えた。

魔法陣は吸い込まれる。

恵美の魔法が吸い込まれていくのを見てみると、唐突に眠気のようなものが草治を襲った。この感覚には覚えがあった。

『そうですね。恵美さんの魔法に感染したみたいですね』

最後に、赤蓮の声が聞こえ、草治は瞼が閉じていくのに気が付いた。

神様と魔術師

幼い恵美と、カガリだった火の神の記憶には靄がかかっていた。

火の神は優しい神だったという情報しか、恵美の魔法には無かった。だけど、火の神が『ヤオヨロズ』に殺される記憶は鮮烈に残っていた。

悲鳴を上げ殺される神と、『ヤオヨロズ』の男の魔法に怖れおのき逃げ出す恵美。彼女の魔法はこの時からある形を成すことになる。心優しい神を見捨てた自分に嘆き失望し、己を捨てることにした。神を見捨てた『恵美』という人間に生きている資格は無いと判断したから。

それから、落ちこぼれと言われていた彼女は必死に魔法を学んだ。それこそ己を壊すかのような勢いで赤い魔法の師匠に教えを乞うた。みるみるうちに彼女は力を付けていった。

だけど、彼女と親しくしようとする同門はいなかった。

恵美は魔法を習い、火の神を蘇らせることしか考えていなかった。だけど時折、火の神を見捨てた時の記憶が頭によぎることがあった。そんな時、彼女はところ構わず絶叫し、記憶を吹き飛ばすように半狂乱で己の魔法を暴れさせた。こんな危険な少女に誰が近づこうと思うだろうか。

だから、恵美はいつも一人で魔法の練習を繰り返していた。彼女もそれでよかった。

しかし、ここで恵美に一つの転機が訪れる。彼女の指針に大きな影響を及ぼす出会い。

赤井麻美との出会いだ。

ある日、師匠へと魔法についての疑問を聞きに行った時二人は出会った。

師匠の部屋を開けると。師匠は不在で代わりに麻美が居た。

麻美は師匠の教えを卒業して数年たち、面識なかったが恵美は彼女を知っていた。

なぜなら赤井麻美は人間でありながら、『オノゴロ』から神格を認められた数少ない人間だったから。

麻美は笑顔で恵美を迎えた。

「私は師匠に頼みごとがあつて来たんだけど、今日は居ないみたいだね」

口惜しそくに麻美が言う。

軽い雰囲気の中麻美に対して恵美は直立不動で何も答えられなかった。麻美の瞳に吸い込まれるように、彼女の魔眼を凝視する。

赤い魔法の使い手としてはよくある紫色の瞳には、深紅の紋様が浮いていた。これこそ、『オノゴロ』から神の眼と言わしめる、全てを見透かす魔眼。

麻美の魔眼は恵美を見透かしている。

と、麻美の魔眼が普通の黒い瞳へと変わった。

「なるほど」

彼女は頷き、笑みを消す。神妙な面持ちで麻美は恵美を見る。

「恵美ちゃんは、凄い目標を抱えてみたいね。けど、神を蘇らせるなんて人間には絶対に無理」

麻美は恵美の心を読み断言した。火の神は蘇らないと。

その言葉を聞き、恵美が絶叫する。

言葉は無く、理性も無い恵美の魔法が師匠の部屋で暴れた。

赤い死人を呼び出し、目的も無く全てを打ち壊す。

しかし、恵美には麻美がどこにいるのか分からなかった。突然、分からなくなった。

叫ぶ恵美の声をくぐり、どこからか麻美の声が届く。

「ははは。恵美ちゃんの心もけっこう壊れてるね。うちの神社に祟るあの子よりはましだけど、もう治らないくらい心が壊れてるわ。少なくとも、今の世界に貴方の心を埋めてくれる人は存在しない」

麻美の余裕のある声も恵美にはどうでもよかった。単に、暴れて、

頭の隅にこべりつく火の神を見捨てた記憶を忘れたかった。

そんな恵美の心をも見透かし、麻美が笑う。

「ふふ。恵美ちゃんはおもしろいわ。だから私が手伝ってあげるわ。神格を認められた私が貴方を手伝ってあげる」

何を言われたか、恵美にはすぐ分からなかった。

（神が私を手伝うということ？）

茫然とした面持ちで、魔法を止めると眼の前で神秘的な笑みを浮かべた麻美が立っていた。

魔法を止めるまでそこに麻美がいることに恵美は気が付かなかった。

（これが、神の魔法？）

怖れおののき、恵美は麻美を伺う。

麻美は軽やかに恵美に近付いてきた。

美しい女性だと恵美は思った。

「人間に、神を蘇らせるのは無理だけど、神様ならできるわ。私に任せなさい。それに丁度、私も神の蘇りについて興味があったから少しは知識があるわ」

そう言つて麻美は恵美へと一冊の魔道書を渡した。

「これに、神を作る魔法が載っています。これを複写し、貴方の魔法として使いなさい」

「はい」

神託を与えられた巫女の如く、恵美は答えた。

麻美はそれを満足そうに聞き、再び口を開く。

「恵美ちゃんの心は壊れているけど、私は壊れることが悪いと思わない。だから、恵美ちゃんの思う通りにしなさい。人間の倫理、道徳も気にせずに、邪魔なモノは排除するといいわ。そうするしか、貴方の心は正気を保てないだろうから」

「はい」

恵美の従順な返事を聞き、今度は麻美の顔が曇った。

「だけど、きつと貴方は最後に後悔をするわ。その前に、恵美ちゃ

んの心を正してくれる存在が生まれけると、いいんだけどね」
麻美は最後に言った。

その後、恵美の奇行も収まることになる。

これが、茅野恵美の心を占める記憶。

その全てを知り、草治はため息を吐いた。

「母さんが原因か」

恵美を促した赤井麻美は草治の母親だ。

なぜ、麻美がそんなことをしたのか知らないが、今はそんなことどうでもいい。

草治は恵美の魔法を、心を辿る。

人の心の中も、魔法の源流と同じで真つ黒だった。暗い空間のところでどこかに記憶が浮いている。

そして恵美の心の根源には、火の神を見捨てた己への絶望が根付いていた。

それを取り去るにはどうすればいいのか。

「そんなこと、できませんよ」

過ぎ去っていく恵美の記憶から返答があつた。

茅野恵美の虚像が草治の前に浮かぶ。

「私の過ちは死ぬまで消えない。この罪悪感を少しでも償うために力ガリを造ったのよ」

「なるほど、そうして力ガリは魔法を使えるようになったわけだが、どうだ？」

草治は恵美に尋ねる。

本来の力ガリという神はとても力の弱い神だった。

だが、今の力ガリはとても強い可能性を見せた。

恵美の目標はほぼ叶ったと言ってよい状態だが彼女の顔は曇っている。

彼女の本当の願いは叶っていないのだ。

「結局、カガリの魔法をみても心は晴れませんでした。私は、ただカガリ様に謝りたかったのかもしれませんが。だから、カガリを造った」

「それが分かれば十分だ」

そう言つて草治は虚空に手を伸ばす。指には赤い糸が巻き付き、どこかに繋がっている。草治は己に繋がる糸を引く。

「赤蓮も一応、鬼姫の半身だから、彼女と同等の力と権限がある」
草治が虚空へと呟く。

恵美は茫然として糸の先に広がる暗い景色へと視線を伸ばす。
しばらくして、糸の先から二つの人影が現れた。

赤蓮とカガリだ。

ただ、カガリの様子がいつもと違う。おどおどした態度ではなく、菩薩のような優しい笑みを湛えている。

「カガリ様？」

恵美の口から自然と名前が出た。カガリは穏やかに頷く。

恵美とカガリは言葉も無く向かい合っている。

「カガリさんの中に残っているカガリという神の人格を呼び起こしてきましたよ」

赤蓮が自慢げに胸をそらしていた。

さすがは赤蓮といったところだ。

先に、カガリが口を開いた。

「ごめんなさいね。私が弱い神だったから」

「違います。私の心が弱かったから」

「いいえ。人間の心が弱いのは当然のこと。だから神様が護つてあげないといけないの。それなのに、私は何も出来なかった」

カガリは自嘲するように言う。カガリという神の心の声は恵美の世界に広がる。

「だけど、貴方が造ったあの子は、きつととても立派な神様になるわ」

途端、花が咲いたような笑みを見せた。

それと同時に、カガリの姿が紅く輝き始め消えていく。

「カガリを、私を助けてあげて、恵美」

その言葉を最後に、カガリは光となり暗い世界を灯の如く照らし始めた。

カガリの言葉は恵美の心を晴らしたわけではない。だけど、確実に彼女の心に変化をもたらしたようだった。

それを感じ、草治の意識も閉じ始める。

ふと、目を覚ますと見慣れた顔が2つあった。

鬼姫と赤蓮だ。

草治が起きあがると、鬼姫がわずかに安堵したような表情を見せた。

場所は草治の寝室。

何だかカガリのことも全て夢のように遠くに感じられる。

「カガリと恵美は？」

「あの二人なら、追い出したわ。私の神社を荒らしたのだから当然でしょ」

鬼姫が少し不機嫌そうに答えた。

赤蓮は苦笑して鬼姫をみている。

「ひとまず、恵美さんも正気に戻ったようです。だからご主人様に謝罪したいというさかつたんですけどね。一応、恵美さんから手紙を預かりました」

赤蓮に手紙を草治に渡してきた。

「長い文章なのですが、要約すると、『迷惑をかけました。これからは今のカガリと頑張ります』的なことが書いてあります。あと、恵美さんとカガリさんはこの近くに越してくるとかも書いてありましたから、カガリさんとはいつもものように学園に行けば会えますよ」
赤蓮に説明を受けたが、一応草治は手紙を開いた。彼女の言う通り

几帳面な字がびつしりと詰まっていた。

新しい家のめどもたったので遊びに来て下さいとかも書いてある。

「却下します」

鬼姫が突然、草治に詰め寄ってきた。

「カガリの家に行くのは認めません」

目を吊り上げて、鬼姫が強い口調で言う。

どうして鬼姫が怒っているのか分からない草治は赤蓮へと助けを求め。

「カガリさんも、『オノゴロ』に認められたため正式に神様です。

ちなみに、ご主人様はまる2日寝込んでいました」

赤蓮が苦笑いで答えてくれた。

鬼姫にとっては、他の神と草治が会うのを何故かよしとしない。

「鬼姫は古い神ですから、考え方も古くて、神とその魔術師は強い絆で結ばれているって考えてるんです。それこそ、親や恋人よりも強い絆で。まあ私はそんなの認めませんけど」

茶化すように、赤蓮が言い、鬼姫の顔が真っ赤になった。

鬼姫と赤蓮がぎゃあぎゃああと草治の上で騒ぎ出す。

神様としての威厳も何もあつたものではない。

案外、神様の心も人間とそう変わらないのかもしれない。

かつてのカガリは、人間は弱い生き物で、だから神が人間を守らないといけないと言ったがこの二人にそんなことが出来るだろうか
と疑問に思えた。

「俺が、頑張らないといけないなあ」

そんなことを呟いてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5045o/>

赤井神社にようこそ

2011年2月21日12時18分発行